
T 1 0 3 ～タイラント物語～

ノルス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

T103「タイラント物語」

【Nコード】

N2892S

【作者名】

ノルス

【あらすじ】

バイオハザードの世界に「タイラント」として来てしまった、高校生の石崎上総君。

彼はいかにバイオハザードの世界を生き抜くのか。

話によって落差が激しいです。

かなりトンでも設定です。

そういうのが嫌いな方は、読まない方がよろしいかと。

人物紹介（前書き）

ネタバレを含む可能性有り

本文を先に読むことをおすすめ

人物紹介

イシザキ カズサ
石崎上総

主人公

普通の何処にでも居る高校二年生であったが、ある日電車に轢かれて死亡。しかし何故か目覚めると、タイラント化してバイオ世界にいた。

基本的に温和で優しい性格であり怒るという事をしない。本人曰く「怒ると疲れるから」らしい。

タイラント化してからは生物兵器という構造上、喋る事が出来なくなったが、筆談で何とかコミュニケーションを取っている。しかし、コミュニケーションをとる前に攻撃を受ける事もしばしばある。

タイラント自体が非常に強靱である為、他の生物兵器と戦ってもほとんど負ける事は無い、仮に重大なダメージを負っても一時的に仮死状態になるがしばらくすると回復し、元の状態に戻る。

手の大きさが人のそれよりかなり大きく銃器を使う事は出来ない、力は強い為鈍器を振り回すだけでも充分強いのだが、本人曰く「ゾンビは汚いから接近戦はいや」との事。本人は銃器を熱望している。

基本データ

身長235cm

体重200kg

暗緑色のトレンチコートを着用

力は非常に強く、その気になれば壁も突き破る事が可能

喋る事が出来ない為、コミュニケーションを取るためには筆談を行う

知能は人間と同じ（元人間だから）

1話 来ちゃった(前書き)

初投稿です。

読もうと思った方、どうか付き合っ
てあげて下さいませ。

1話 来ちゃった

猛烈に叫びたい

どうやら俺こと石崎上総いしざきかずみは巷で流行の「転生」とやらにあってしまっただけらしい。いや、「憑依」かな？まあ今までの世界と違う世界にきたみたいです。

それでその世界はバイオハザードの世界らしい。

ホラーゲームが嫌いな人にとっては嫌かも知れないが、俺はどちらかと言われればやってみたいと思う。だってレオンの名台詞「泣けるぜ」っていつてみたいし。仮に悪役のウェスカーだったとしてもダークヒーロー的な彼なら問題無いと俺は思っている。充分格好いいし。マト●ックスみたいな動きしてみたい。

要はバイオハザードの世界に来てもいいって事ですよ。

でもね、それは人間としてバイオ世界に来るという事ならの話。

そう、「人間」としての話。

何でタイラントなんだよ!!!

タイラントってあれだよ、最後ロケットランチャーでドカーンってなるやつだよ

。最初から死亡決定で、俺をバイオ世界に飛ばした神様が仏様が知らんが出てこいや!

ああ、レオンの

「ゲームオーバーだ!!!!」
が頭を過る。

神様のバカヤロー!!

いつもの朝だった。

と、思う。

何故自信無さげかというとあんまりよく覚えてないからだ。

俺自身かなり忘れっぽいのですよ、と、そんなことは置いといて、とりあえずいつもの朝だったんですよ。多分。

高校生である俺はその日の朝も、学校に行く為に駅にむかった。

両親から受け継いだ低血圧のおかげでボウっとしながらホームで電車を待ってた。

電子音がしてあゝ電車来たんだなあ、とか思いながら電車の来る方を見てた。

その時だった。

何かがぶつかった。

俺はバランスを崩してホームから落ちた。

電車が迫って来た。

そこで俺の意識は途絶えた。

最後に聞こえたのは悲鳴だった。

まあ、そりゃあえらいことになってるでしょうからね、いろいろバラバラだと思うし。

結構、いやかなりグロい

父さん、母さん、先に逝くことをお許し下さい。

1話 来ちゃった(後書き)

感想、各種批評、ご意見等ありましたらできたら書いて下さい。

2話 確認しました(前書き)

前回よりも多いです。

2話 確認しました

目が覚めた。

知らない天井だ…

俺は起き上がろうとした、が

体が動かなかった。

何故だ？ここは何処だ？

相変わらずの低血圧で上手く頭が働かない。

落ち着け、落ち着くんだ俺。

とりあえず周囲の確認をしよう。

辺りを見回してみた。

…見回せるってことは首は動くのか…

頭上にはライト、横を見るとメスとかピンセットとか手術に使う物があつた。

首だけ起こして自分を見てみると暗緑色のコートみたいなものを着ているようだ。

体にたくさんのコードが繋がれている

「これでようやく5体目か…」

突然声がした。

「…確かにT103型は強力だが少しコストが高過ぎないか？これ一体で戦闘機が買えるとか聞いたぞ？」

どうやら俺の他に二人いるようだ。

「文句言うなよ、確かにコストは馬鹿高いが前のT002型よりも格段にコントロールしやすい。お前だって見たろ？アークレーの資料映像を。お前もウェスカーみたいになりたくないだろ？」

「む、確かに…」

「それにコイツから適合者のクローンを使うことになってる。確かセルゲイって幹部様のクローンを使うらしい。今までより大量生産しやすいから少しはコストも下がるだろ。」

……何となく状況が分かってきたぞ。

認めたくないけど。

さて、ちよつとこの状況を整理しよう。

一、電車にひかれて俺は死んだはず。

二、しかし何故か生きている。

三、けれど今いる場所に面識はナシ。

四、とっても気になる単語、「ウェスカー」、「セルゲイ」、「アークレー」、「タイラント」

結論は

バイオハザードの世界に来た。

…すんごく認めたくないけどもう1つ結論がある。

何か俺はタイラントらしい。

そして冒頭に戻る、と

今俺は激しく錯乱している。もう持ち前の低血圧を空の彼方へ光の速度で発射してしまえるくらいに。

すると

周りの機会から物凄い電子音がした。

「どうした!?!」

「わからない!でもT005の血圧が上がってる!」

「早く鎮静剤を投与するんだ！」

何か周りで騒いでるし。

うっさいぞ！俺は今激しく錯乱しているのだ！

…あれ？何か気分が…落ち着いてくる…鎮静剤か…ってことはT005ってのは俺のことなのか…

「お、おさまったか…」

「ああ、コイツのおかげで鎮静剤の残りが少ない、取ってくる。」

「任せたぞ私はウェスカーの二の舞は絶対に嫌だからな。」

あ、一人がどっかいった。

「しかし何故だ…タイラントに意思は無いはず、何故急に血圧が上がり始めたんだ？」

答えは簡単。俺が錯乱してたから。

でも、先刻思い切りタイラントに意思は無いって言ってたよね？

バリバリありますよ

意志があるってことは体も自由に動かせるかな？

よいしょっと。む、縛られてる？

ちぎっちゃえ。

「この事を会社になんて説明しよいか…ってま、またか！？しかも勝手に動いている！？」

「おい！どうした！」

「早く鎮静剤を、早く！」

あ、また鎮静剤を打たれた。チツ、もうちよつとで完全にちぎれたのに…

そうして俺は鎮静剤のせいで眠ってしまった。

2話 確認しました（後書き）

感想などお待ちしております。

3話 行動開始（前書き）

祝2千文字越え

3話 行動開始

音が聞こえる。

プルルル…ガチャツ

「もう使ってしまうんですか！？動作テストや操作テスト、伝達系テストすら確認していないんですよ！？」

なんだ？電話？

テスト？何それ？抜き打ち？いや、勘弁して欲しいんだけど。

「…ですが…しかし！…ええ、分かりました、分かりましたよ！」

え、テストしちゃうの？

俺なんも勉強しとらんよ？

ガッチャン！！！！

うわお、そんなに嫌ならしなけりゃいいじゃん。ところで何の教科？英語なら望みは無いな、三回連続レッドブレイク（赤点）した俺を舐めるなよ。

「なんだったんだ？」

「…T103型を使うらしい、まだテストが残っているというのに！上は何を考えているんだ！」

「お、落ち着けよ、それと俺に怒んなくて、仕方ない無いだろ。上

が考え無しなのは何時ものことだろ。」

「だが、もし暴走してしまえばタイラントは人におえるものではないんだぞ！」

タイラント？……………タイラント……………大乱闘？……………

いやいや……………俺か！

そういえば俺タイラントだったね。うん、思い出した。

「ハア……………いいか、俺達は研究員だ。コイツらタイラントを運用するのは現場だ。つまり事故や問題が起きても俺達にとっちゃデータでしかない。俺達はそのデータを使っていけばいい。だから問題は無い筈だ。俺達にあるデメリットは少し研究対象が減るだけだ。」

「……………すまない……………少し感情的になってしまった。確かにお前の言う通りだ。T005も使うと言われて頭に血がのぼってしまった……………許してくれ、すまなかった。」

「別にいいさ。お前の失敗作を使いたくない、っていう職人気質みたいなのは俺はきらいじゃ無いからな。」

オイコラ、今メツチャ俺のこと失敗作って言ったよな。ベリイ・トウ・ベリイ（スープレックスでも可）でもかけてやろうか？

「ところで何処に使うんだ？こんな物騒なもの使うってことは結構ヤバいとこなんじゃないのか？」

「ラクーンシティで使うらしい、アークレーとラクーンの奴らの尻拭いをするらしい。」

お、ついに来ますかラクーンシティ。
そしてこんにはバイオ2、バイオ3の方々。

『三十分後』

はい、こちらは恐らく何処かの上空です。そしてご覧ください、

何にも見えません、真っ暗です。

どうやら私は何かのタンクに入って運ばれているようです。

…中継をふられたキャスターの真似ってあんまり楽しくない。

どうしてそんな楽しくも無いことをやっているかというのと、とてつもなく暇だからである。

理由は三十分前にある。

（回想中）

「そろそろ準備をするか、悪いが手伝ってくれないか？」

「分かった。」

今俺は研究員ズにあの暗緑色のコートを着せられています。
というか俺、真っ裸だったんだ。

コートを着せられた俺の頭に唐突に文字が浮かんた。

指令、待機状態。機能停止モード

なんじゃこりゃ？タイラントってこうやって命令を送るもんなのか？

研究員ズを見てみると俺の首に何か付けている。もう片方はなんか
パソコンを弄ってる。

「よしこれでいい。バッチリ受信機をつけたぞ、そっちはどうだ？」

「上々だ。今プログラムを立ち上げてたところだ。」

「これで理論上はコイツらは命令無しには動けない筈だ。」

「そうだと良いがな。」

「まだ気にしてんのか？もう気にすんなって。」

そうそう、気にしちゃ駄目だって、

俺メツチャ自由に動けちゃうから。

理由は簡単、先刻手が自由に動かせちゃったから。勿論手を動かせという命令は出ていない。

その後俺はタンクっぽいのに入れられ、音からしてへりに乗せられた。

（回想終了）

あ、回想終っちゃった。またやる事が無くなった。隙だ。非常に隙だ。

あまりにやる事が無いから自己紹介をしよう。

誰にするんだ、ってツツコミをした奴には覇碎双剛掌だ！

石崎上総、17才です。高校二年生で身長は183センチ、成績は

いたって普通、何？英語の赤点？それは他の教科でギリギリ補ってる、だから聞くな。えーと、運動神経も普通、可もなく不可もなくといったところ。

趣味は読者にゲーム、たまに運動。

やったバイオハザードのタイトルは4、5だけだが動画を見たりノベル版を持っているので他のタイトルも知っているといえは知っている。

ウム、ここで一つの疑問に答えよう。

何故18才以上対象であるバイオ4を17の俺が持っているのか……

答えは簡単、普通にゲ●で買えたから。

な〜んとも言われなかった。

まあ、エロいゲームじゃないし。例外も居るが。

お、止まった？つっても上空だが。

ここで一つ思い出してもらいたい、
タイラントってどうやって運ばれる？

答え、ヘリです。

じゃあその後は？

答え、そのままポーンと空中落下アアアアアア！……！！

先刻言い忘れてたが俺は絶叫マシンとかが大の苦手だ。

小さい頃にジェットコースター乗るのが嫌でぐずりまくって外国人のお姉さんに

「ドントクライ」

って言われた過去を持つ位苦手だ。

安全バー無しフリーフォールとかマジやめて。

鈍い破壊音と共に着地した後、タンクが開いた。

出ろってことかな？

出てみた、歩くたびにずしんずしんという音がする。

まあ、タイラントってでかいしそのぶん重いわな。

タンクから出るとそこには、死んだ街、ラクーンシティがあった。

あたまの中に文字が浮かぶ。

指令、稼働状態、戦闘モード、目標、米軍及び警察組織の残滅。

俺は首の受信機を引きちぎった。

3話 行動開始（後書き）

今更ですが上総君がなってしまったT103型というのはバイオ2の裏編で出てくるタイラントと同じ型です。

感想お待ちしております。

4話 遭遇（前書き）

前回よりも少ないです。

4話 遭遇

side 研究員ズ

「よし、全目標地点に投下完了。」

「次は指令だな。」

「ああ、今やっている。…よし、これで完了だ。今のところ問題無く進んでいる。」

「まあ、多分だいじょ「ピー、警告、T005の受信機がオフラインになりました。」

「「なにイー！！！！」」

side 上総

見渡す限り、

ゾンビ

ゾンビ

ゾンビ

ゾンビ

ゾンビ

ゾンビ

ゾンビ

……まあ、ラクーンシティの住民のほとんどがTウィルスに感染、ゾンビ化したなら仕方ないか。

沢山の瓦礫、燃える車、そして、まだ新しい死体に群がるゾンビ

不思議な事に俺はその光景にそれほど嫌悪感を抱かなかった。いや、抱けなかったと言った方が正しいか。

だって俺もうBOWだし。

さて、これからもうどうしようかな？受信機も引きちぎったし、俺は完全に自由だ。

ほら、ラジオ体操だって出来る！

………やっても虚しいな、観客ゾンビだけだし、そしてゾンビだからアゝアゝ言ってるだけで見ちゃいない。まあ、見られても反応に困るだけだが。
虚しい………

まあ、とりあえず警察署に行こう。

バイオ2も3も絶対に警察署に行かなくちゃいけない筈だ、行って損は無いだろう。

それよりも、今日って何日だ？9月28日以降ならすでにジルとかは活動してると思うんだけど、まあいいや、とりあえず警察署に行

こう。

…という訳で警察署に向かっています。地図なんて無いから無論適当に。

ええいゾンビ邪魔だな！ア〜とか言いながら俺がいこうとしてる道塞ぐな！

くそう、バイオ2、3はやったこと無いから道が分からん！もう一時間は迷ってるぞ！

……えいくそ、八つ当たりじゃあ！！！！

ドカツ！！（近くのゾンビを殴る音）

ア〜…

うっさい！！ベキッ！（ゾンビに回し蹴りを叩き込む音）

ア〜ア〜……………

よってくんな！！ドゴォン！！（踵落としがゾンビの頭にヒットしてそのまま地面に踵がめり込む音）

ア〜ア〜ア〜……………

……（怒）ウツキヤアアアア！！！！！！！！！！

「上総君、無双中、しばらくお待ちください。」

辺り一面、

ゾンビ

ゾンビ

ゾンビ

ゾンビ

ゾンビ

ゾンビ

ゾンビ

の、残骸。

もしくは上総無双（八つ当たりでも可）の被害者の成れの果て、ともいう。

何を隠そうこの死体の山（文字通り）を築いたのはこの俺である、ハッハッハッハッハッハッ……

ハア、正直やり過ぎたと思う。

いや、別に俺はなんてことをやってしまったんだ！…… 的な後悔は無い、けど、やり過ぎたっていうのは本音だ。

：コイツら、クリムゾンヘッド化しないよね？初めてクリムゾンヘッドと出会った時にマジで心臓止まるかと思った。殺した筈のゾンビが起き上がった時初めてゲームで叫んだ、つか悲鳴をあげた。まあ、ほとんど部分破壊して殺してあるし大丈夫だろ。うん、大丈夫だ、そういうことにしよう。

あゝもうどーすりゃ良いんだよ……道は分かんないし、ゾンビもいなくなったらから周り静かすぎてなんか寂しいし、太陽がだいぶん傾いて夕方になってるし、ホントどうしようかな……

考える像みたいにたまたまあったコンクリート片に腰をおろして顎に手をあてて考えてます。

あ、そうだ、知ってますか？考える像って本当は考えて無いんですよ。正確には地獄を見下ろしてるんです。知ってましたか？

現実逃避してる場合じゃ無かった。

俺がうーんどうしようか、早く警察署に行きたいけど道分からんし、

夜になるし、というかタイラントって睡眠とか必要なのか？食事は？だとかいろいろ考えていた時だった。

「な、何これ……っ！何でここにタイラントがッ！！」

声が聞こえた。トーンからして女性だろう。

何だろうと思って振り返った。

女性がいた。

歳は18位、身長は目測で160前後かな？緑のベストとジーパンをはいていて、髪型は茶髪のショートカットだ、目は恐怖で見開かれている、手には拳銃、多分ベレッタが握られていて銃口はもろに俺に向いている。

俺は一目で分かった。

STARS元ブラボーチームのRS（リア、セキュリティ）
レベッカ・チェンバースだ。

何でレベッカがここに居んの？

4話 遭遇（後書き）

ベレッタというのは米軍に採用された拳銃、イタリアのベレッタ社製M93Fのことです。バイオにでてくるのはこれのSTARS仕様だったと思う。あくまでも思う、です。

以上、作者の銃器知識からでした。

感想お待ちしております。

5話

被弾（前書き）

やっと一人登場

5話 被弾

何でレベッカがここに居んの？

いや、だってさ、レベッカってバイオ1以降消息不明だったよね？
確かノベル版では、他の州のSTARSたちと行動してたみたいだけど、それなら今ラークンシティにいる筈がない。

何でだ？

俺は首を傾げた。

まあいいや、それよりもレベッカの事よ、

彼女はやはり元STARSだけあって、18才と若い飛び級で大学を卒業したみたいだし、機械には強いようだし何よりも薬品を扱う事が出来る。訓練は一通りやった筈だから銃器の扱いにもある程度慣れている筈だ。

明らかに有能なのだ。そしてラークンシティでの土地勘もあると思う。絶対にお近づきになった方が何もしないより良いのは確実なのだ。

よし、そうと決まれば、行動開始だ！

俺はガバツと音がするくらいの速さで今まで下げていた顔を上げてレベッカを見た。

レベッカと目があった、相変わらず目には恐怖に見開かれている。

そして銃口もこちらを向いたままだ。

だが一つ先刻と変わった所があった。

元々スペックが普通な俺だったがタイラントになったことで身体能力が格段に向上している。それは視力も例外ではない。

レベッカがベレッタの引き金を引く所がバッチリ見えた。

いきなりですかい、レベッカさん……まあ、いきなりタイラントとお友達になろうとする人なんていないか、…

弾丸は俺の脚に当たった、が、痛みはほとんど無く感覚的には強めのデコピンくらいのものだった。

今更だがタイラントすげー。

sideレベッカ

その周辺には街に溢れているゾンビが一体も居なかった、いや居るのは居るが全て破壊され、ただの腐った死体に変わっていた。そして、そこにはゾンビの残骸だけがあるのでは無かった。

最悪だ。

今このタイミングで出会ってしまうなんて。

そこにはタイラントがいた。

何故か座っていた。

見様によっては考えているように見えるかも知れないが、私は知っている、

タイラントがどれだけ強靱で執拗で凶暴かを。

私と仲間達がアークレーのアンブレラ秘密研究所で戦ったタイラントはベレッタは勿論マグナムやショットガンを使ってですら殺すことが出来なかった、結局そのタイラントを殺せたのはロケットランチャーが直撃したからだった。

だが、今私はベレッタしか持っていない。

これではタイラントを殺すどころかまともに戦うことすら出来ない。

それまで考えるように首を傾げていたタイラントが突然顔を上げ、こちらを見た。

とっさに私はベレッタの引き金を引いた。

脚を撃てば速度が鈍るかも知れない。

弾丸が脚に当たった。

タイラントは相変わらず立っている。損傷した様子はない。

私の僅な希望は消え去った。

それと同時に

「バウッ！バウッ！」

大量の死体の匂いに集まってきたのか腐った犬、ケルベロスが飛び付いてきた。

死神はどうしても私を殺したいらしい。

タイラントに意識を向けていたせいで反応が遅れて私はケルベロス

の体当たりをもらに受け勢い良く倒れてしまった。

その時に強く頭を打ち付けたらしい、

私はそこで意識を失った。

最後にケルベロスの牙が見えた。

ああ、これは確実に死ぬ。

side 上総君

どうやら俺が殺しまくったゾンビの匂いを嗅ぎ付けて、ケルベロスが集まって来たらしい、それは別に良い、全く問題無い。

今の俺と対等に戦えるのは同じタイラント位だろう。

だから俺は良い。

そう、俺は

だからレベッカにケルベロスが飛び付いた時には本気で焦った。

なんかレベツカはケルベロスに飛び付かれた勢いでこけてしまった時に強く頭を打ったらしく意識が無い。

これは不味い、

レベツカを死なせる訳にはいかん、助けねば！

俺は猛然と走ってそのままの勢いでケルベロスを蹴り飛ばした。

ケルベロスが丁度真っ二つになって吹っ飛んでいった。

うわお、改めてタイラントすげー。

「グルルルル…」

チッ、まだ居やがる。

「ガウ！」

ゴン！（飛び付いてきたケルベロスを殴り飛ばす音。）

此処にいちや不味いな。

そう考えた俺は、レベツカを抱えて高速で走り去った。

5話

被弾（後書き）

感想お待ちしています。

6話 お近づき（前書き）

今更ですが、タイラントの身長は2メートル半位、と設定し、上総君もそれに準じています。

6話 お近づき

ケルベロスの軍団を振り切った俺は、レベッカを介抱できる場所を探し、誰も居ない倉庫の様な場所を見つけたのでそこでレベッカを介抱することにした。

鍵はついていなかったのだからバイオ4で村長がやったのと同じようににボールを取っての所でグニヤリと針金の様にして扉を閉めた。

レベッカは見た感じ特に怪我が有るわけではない、後頭部にたん瘤があったがこれくらいなら問題無いだろう。

まあ、脳震盪とか起こしてるなら分からないが……俺にはそれを見分ける事が出来ない。

とりあえず寝かしておこう、たん瘤を痛めない様にうつ伏せで寝かした。上に見つけた毛布をかけてこれまた見つけたペットボトル入りの水をタオルっぽい物に浸してたん瘤が出来てる所に乘せておいた。

驚くべき事が分かった。

俺、英語が解る。

これが分かったときの喜びは言い表す事が出来ない。

万年英語に泣かされて来た俺は、渾身のガッツポーズをとった。

通りでレベッカの言ってることが解る訳だ。

ヤッター！

：思わず結構古いポーズをとってしまった。

この倉庫はどうやらなんかの非常用物質の備蓄倉庫らしい、中を探索すると災害時用って書いてある（読めた時に物凄い優越感を感じた）沢山の段ボールに毛布とか缶詰めとか水とかが有ったからだ、我ながら非常に都合の良い場所を見つけたもんである。

倉庫の中を探検していると、奥の方には管理人室みたいな所と天井にデカイ穴が有った。

どうやら隣のビルから何かが落ちて来たらしい、落下物の残骸が有った。

管理人室の方は作業用机と椅子とカレンダーが有るだけの部屋だったが、中々良い物を見つけた。
一つは腕時計である。

バイオ世界においてアンブレラ社の設計者の人達はやたらと最後に自爆したがるので時間を把握出来る物を持つに越したことはない。
まあ、デザインを気に入った、てのもあるが。

もう一つは、弾薬である。

弾薬の入っているパッケージに「9ミリ弾」、と書いてあったので多分ベレッタにも使える筈だ、これからレベッカとコミュニケーションをとって何とかお近づきになりたい俺には、お近づきの印がある方が良い。

そんなことをしていると、

「う、うーん……………ここは？」

レベッカが目を覚ましたようだ。

早速俺は、お近づきの印である弾薬を持ってレベッカの居る方へ行った。
った。

レベッカの所に行った時、レベッカに物凄いびっくりされて壁際ま

で後退りされた。

結構傷付くな……

いや、めげるな俺、頑張れ俺。

物凄い怯えてるレベッカの所に近づき、弾薬を渡そうとしたがレベッカは目をぎゅっとつぶって顔を伏せ、へたりこんでいる。

め、めげるな俺。

弾薬を差し出しても目をつぶってるから分からないようで、いつこうに受け取らない。

く、……め、め、めげるな俺。

埒があかないと判断したのでレベッカの頭を、軽く、ホントにかかるくくつついた。

そしたらレベッカが目をやつくり開けて、

「し、死んで無い？」

と言った。

……殺さないから。

もうめげて良いですかね？

ようやく顔を上げたレベッカに、それでもバリバリ警戒と怯えられたが、弾薬を差し出した。

「な、何？弾薬？９ミリの……………ッ！」

レベッカは必死で自分の服のポケットとかを探している。

そして、

「無い、…ベレッタが無い！」

と言った。

……………もしかしてケルベロスに飛び付いてきた時に落とした？

良く見るとレベッカが涙目になっている。

好感度UP 作戦開始！

目標はレベッカの持ってたベレッタを回収する事！

俺は、レベッカをこれ以上びびらせないため奥の天井の穴から飛び出した。

ベレッタは割と直ぐ見つかった。

あの、俺がゾンビを殺しまくった場所に落ちていた。
襲ってくるケルベロス文字通り叩き潰しながら回収し、直ぐに倉庫に戻った。

レベツカの所に戻って来るとレベツカは何やら困惑してた。

俺は、近づいてベレッタを差し出した。

レベツカは困惑しながらも受け取った。

そして、

「…ありがとう。」

と言った。

……ヤッター！

勿論ポーズはしていない、誓ってな。

6話 お近づき（後書き）

感想お待ちしています。

7話 続、お近づき(前書き)

コメディー少なめです

7話 続、お近づき

sideレベッカ

「う、うゝん…」

目が覚めた。

私は死んでいなかった。

確かあの時ケルベロスに襲われた筈、近くにタイラントまで居ただ。

私がどんなにツイていても死なない筈がない。

だが、自分の心臓の鼓動が今しっかりと聞こえている。

「……ここは？」

周りを見渡すところはどうやら物資の備蓄倉庫のようだった。

私は生きていた。

……あの世が倉庫みたいなものだったら別だけど……

奥からあのタイラントが現れた時、心臓が止まるかと思った。

思わず壁際まで、後退りしてしまった程だ。

タイラントは少し躊躇う様に立ち止まると、やがて決意したのか私の方に近づいてきた。

今私の顔は、恐怖に歪んでいるだろう、心臓がバクバクいつて治まらない。

タイラントが近づいてくる。

遂に私は死ぬんだ。

私は次の瞬間訪れるであろう痛みを目をつぶった。

しかし訪れるであろう死は一向に訪れ無かった。

頭に何かを感じた、それはつつく様な、それでいてまるで壊れ物に触れるかの様なものだった。

目を開けると、目の前にタイラントがいた。

「し、死んで無い?…」

しかし、未だに私に死は訪れていなかった。

何故?このタイラントは私を殺さないのだろうか。私はこのタイラントに銃を撃つという事は完全な敵対行為だった筈だ、私を殺すことなんて、コンクリートブロックを粉々に握り潰してしまえるような

力を持つタイラントには容易な筈だ。コンクリートブロックを粉々に握り潰してしまえる力を持つタイラントには容易な筈だ。

そんなことを考えていると、目の前のタイラントが腕をこちらに向かって動かした。

その行為に非常に驚いて、ビクついてしまったが、タイラントが私に何かをする為に腕を動かしたのでは無い、という事が直ぐに分かった。

タイラントは私の顔くらいなら握り潰してしまえそうな位大きい手に、何かを持っていた。

どうやらそれを私に差し出しているようだった。

「な、何？弾薬？9ミリの……」

それは9ミリの弾薬のパックだった。

9ミリの弾薬を私に渡して何をする気なのだろう。私のベレッタに使えるから使え、ということなのか？

私は無意識に持っているであろうベレッタに手を伸ばそうとした。

だか、それを行う事は出来なかった。

「ッ！！」

私は、持っている筈のベレッタを持っていなかった。

ケルベロスに飛び付かれた時に落としたのかもしれない。

ベレッタは私を守る唯一の武器である。

だからそれを失ってしまった事で、不安になってきた。

目に涙が浮かぶ。

それを見たタイラントは、何故か奥の方に走っていった。

タイラントの度重なる不思議な行動に、頭の中を？マークが沢山浮かんだ。

タイラントが去った事で幾らか落ち着いた私は、改めて自分が何処にいるのかを確かめる事にした。

まず、タイラントが走り去った方に行ってみた。

そこには小さな部屋と天井にかなりの大きさの穴があり、その丁度真下には原形を留めていない、何かが有った。

恐らく隣のビルから何かが落ちて来たのだろう。

小さな部屋の方は、多分管理人室だろう。しかし既に誰かがあさった後の様で目ばしい物は無かった。

奥を探索し終わったので、元居た場所に戻ってきた。

さっきまで自分が居た場所には、毛布と濡れタオルが落ちていることに気がついた。そして自分がさっき起きた時に、毛布がかかっていたことを思い出した、ケルベロスに飛び付かれてバランスを崩し、思い切り頭を打ったのも思い出した。

誰が私を看病していたのだろう。

…まさか、あのタイラントだろうか？

あり得ない。アイツらにそんな感情が有るとは思えないし、そもそもタイラントとは、生物兵器なのだ、特別にプログラムされない限り、他人のけがの手当てなどしないだろう。

だが、この倉庫に居たのは私とあのタイラントだけだ、他に人間はいなかった。

ということはやはり、あのタイラントが手当てをしたのだろうか？

私が困惑しているとタイラントが戻ってきた。

やや警戒して身構えていたが、タイラントは先程と同じように腕を

私に向けただけだった。

その手にはベレッタが握られていた。

私が無くしたベレッタだった。

わざわざ探したのだろうか？

何の為に？

タイラントからベレッタを受け取るとしたら私は私は無意識に、

「ありがとう」

と、言っていた。

その時タイラントは物凄く嬉しそうに見えた。

7話 続、お近づき（後書き）

感想お待ちします

8話

コミュニケーション（前書き）

ぐたぐたな上に進展なし

8話 コミュニケーション

side上総君

レベッカが、

「ありがとう」

と言ってくれた。

それが嬉しくて某ドラマの歓喜のポーズをとってしまいそうになったのは自分だけの秘密だ。そのドラマが流行ったのも結構古いし。

「あ、あの……」

お、まさかレベッカの方からコンタクトをとってくるとは、大変予想外。非常に良い傾向だ。

「あ、貴方が私をここへ運んできたの？」

その通りでござんす。

俺は、首を縦に振った。

「やっぱりそうなのね……じゃあ私に毛布を掛けてくれたりしたの

も貴方なの？」

大正解。つかよくあんなにビビってる状態で自分に毛布掛かってるってわかったね。

俺は、再度首を縦に振った。

「貴方は何故私を殺さないの？私は貴方を撃ったのよ？」

answer、撃たれたけどほとんど痛くなかったし、殺す必要がそもそもありません、ええ1ミリも。

俺は、その事をレベッカに伝えようとして口を開いた。

だが、俺の口から出る筈の言葉が、

何一つ出なかった。

俺の口は虚しく開閉するだけだった。

俺は、タイラント、即ち生物兵器だ。

だから戦闘能力は非常に高い、また抗甚性能もとても優れている。

バイオハザードをやった事のある人なら分かると思うが、タイラント級の生物兵器のしつこさは、半端じゃ無い。

それはさっきも言った様に戦闘、抗甚性能が非常に高いからだ。

だが、戦闘能力や抗甚性能が高いのは、それが生物兵器であるが故だ。

だから他の生物兵器として不必要なものは、無くされるか、スペックダウンされたりする。

例えば、声とか。

タイラントを操作する方法が、受信機を介して頭に直接届く方法なら、声は必要ない。

タイラントが意志疎通を図るなんて想定されている筈がない。

だから、俺の声帯が普通の人間と同じである可能性は極めて低い。

実際、俺は声が出せなかった。

と、いうことは、俺は喋ることが出来ない、ということだ。

ガッデム！オウ、シット！

せっかく英語解るようになったのに、英語話せないとか、残念すぎる。

「喋れないの？」

うん、そうなの。

俺は、再々度首を縦に振った。

ってかレベッカの事忘れてた。いやゝゴメンゴメン、マジで忘れてた。

そんな事よりも、どうやって意志疎通を図ろう？喋れないし、ジェスチャーじゃちょっと苦しい、個人的に相手身振り手振で必死に相手に伝えようとするタイラントなんて見たくないし、実践する気も更々無い。

ジェスチャーをするタイラント

この上無くシユールだ。

絶対にやりたくない。

「私が言ってることが解る？」

yes、理解しています。

「なら筆談ならできる？何か書くものは無いの？」

流石レベッカさん、洋館から生きて帰っただけあって頭いいね！

俺にもちよつと分けて欲しい位だよ。

直ぐに俺は、奥にある管理人室っぽい部屋、……もうめんどくさいから管理人室でいいや、に何本かボールペンが有ったのを思いだし、管理人室にすっ飛んでいった。

管理人室にボールペンが複数あって本当に良かった。

いやあ、最初のボールペンを握り潰しちゃった時は本気でビックリした。

そしてレベッカもビビった。

スマン、レベッカ。

その後また一本程握り潰してしまってレベッカもビビらせてしまったが、何とかレベッカに殺す必要が無いことを伝えた。

「……痛くなかったから……じゃあ貴方は誰かに命令されてる訳じゃ無いのね？」

当たり前じゃん、俺は受信機をラクーンシティに来たときに捨てた。

今頃あの研究員ズは真っ青だろうね。

「気を悪くしたら悪いんだけど、……貴方は生物兵器よね？それもアンブレラに作られた。」

俺は、紙の代わりの段ボール（近くの段ボール箱からちぎってきた）にその通りだ、と記した。

「なら、何で自我が、自分の意志があるの？」

………どう答えよう……

自分が危害を加えない、って事伝えるだけでも結構な労力が必要としたのに、別の世界から来て何故かタイラントになってました、じやとても信じて貰えそうにない。

とりあえず、分からないって書いておこう。

「……分からない……か、じゃあ貴方は完全にイレギュラーな存在なのね。」

うん、そういうことにしよう。

「あ、そうだ、まだいって無かったわね、私はレベッカ、チェンバース、貴方は？名前ってある？」

もう知ってます、レベッカさん。

そして残念、もし名前が無いんなら私がつけてあげようか、みたいな顔するな。

まあ、名前くらいなら教えてもいいかな？

俺は、段ボールに自分の名前を書いた。フルネーム書くとなんか日本人ってばれるかもしれないから、名前だけ書いた。

「…………え？、名前、あるんだ…………カズサ？貴方カズサっていうの？」

俺は、首を縦に振った。

…………レベツカよ、残念そうにするな、モロ顔に出てるから。

とりあえず、これで一人お近づきになれたかな？

8話 コミュニケーション(後書き)

感想などお待ちします。

9 話

続、コミュニケーション（前書き）

ちよつと進展

9話 続、コミュニケーション

sideレベッカ

驚くべき事が分かった。

このタイラントには自分の意志がある。

そして名前があるらしい。

これが少し残念だったのは私だけの秘密だ。私が名前つけられるかも、
と思ったのに。

このタイラント、いや彼は、カズサ、というらしい。

何故自我が有るのかとカズサに聞いてみたが、彼自身も分からない
ようだった。

と、いうことは、カズサは完全なイレギュラーな存在ということだ、
あの狂気のアンブレラでさえ予期出来なかったらしい。

私がそんなことを考えていると、カズサが先程から紙の代わりに使
っている段ボールを見せてきた。

「今日は何日？」

私は何故そんなことを、聞くのだろう、と首を傾げながら、

「9月27日よ。」

と、答えた。

そうするとカズサは、自分の腕時計をみた。（この腕時計はカズサが、奥の管理人室で見つけたものらしい、気に入ったからつけているそうだ、こういう所が非常に人間らしい。）

今は、もう空も暗いが何か予定があるのだろうか？

考えているとまた、カズサが段ボールを見せてきた。

「警察署の場所は分かる？」

勿論だ、だってほんの少し前まで私の仕事場だったのだから。

「ええ、分かるわ、私はこう見えてもSTARS、エリート警察官だったのよ？」

どう、すごいでしょ？とばかりに私は胸を張った。

カズサはどう反応するかな？

「なら、明日案内してくれない？」

軽く無視された。

……ちよつと凹むわね……

勿論、案内するのは構わない、私も丁度警察署に行こうとしていたところだ。確かあそこは避難場所になっている筈、もしかしたらまだ生存者がいるかも知れない。

そして、どんなにアイアンズ署長がアンブレラと共に腐っていたとしても、全員がアイアンズのようにアンブレラのお友達じゃ無いだろうから、何か証拠が残っているかも知れない、

いや、証拠は既にある、カズサ自身が証拠なのだ、だから簡単には死なないだろうが、死なせる訳にはいかない、そういう意味では、ラクーンシティで恐らく一番安全な警察署に居た方が良いだろう。

そして生き残ってアンブレラの悪事を暴くのだ。

だが、その為にはカズサに証拠になってももらわないといけない。

「良いけど、一つ条件があるわ。」

カズサが段ボールを見せる。

「どんな条件？」

「貴方、アンブレラを知ってる？」

「勿論。」

「気を悪くしたら悪いんだけど、アンブレラは非合法的な研究をして

るわ、ゾンビを作り出すウィルスや、その…貴方みたいな生物兵器を造る技術とか。」

「知ってる。」

「…そう、それでなんだけど、貴方に証拠になってもらいたいもの。」

「それが条件？」

「ええ、そうよ。」

カズサは少し考えこんでいる。

だが、やがて、決心したように段ボールを見せた。

「分かった。」

「オーケー、それじゃ交渉成立ね、明日警察署に案内してあげるわ。」

アンブレラ打倒の日は近い。

s i d e 上総君

「良いけど、一つ条件があるわ。」

中々抜け目ないな、レベッカ。

俺は、段ボールに、

「どんな条件？」

と、書いてレベッカに見せた。

「貴方、アンブレラを知ってる？」

当たり前じゃん。

なんたって俺は、m a d e i n アンブレラですよ？

「勿論。」

そう書いてレベッカに見せた。

レベッカの条件とは、打倒アンブレラの為の証拠になれば、ということだった。

レベッカは、俺がアンブレラのかかなり非合法的な研究によって造られた事を知ってるのだろう、実際にアークレーの研究所に行ったんだからその辺の事は熟知している筈だ。

アンブレラはかなり大きな、いや、巨大な企業だ、それこそ事実を簡単に変えられるくらいに。

レベッカ達は洋館事件の後、証拠を上に出した筈だ、だがアンブレラはそれを揉み消してしまったのだろう、だからこそ俺という文字通り生きた証拠が必要なだろう。

ホントに抜け目無いな、レベッカよ。

だけど俺は、どうしても警察署に行かないといけない。

理由は簡単。

クレアとかジルに会いたいからさ！

いや、レベッカってね、ゲームの画面越しでも結構可愛いけど、こうして現実にあって見るともうメチャクチャ可愛いよ、だからクレアとかジルとかにも会ってみたい！

うむ、今はタイラントだが中身は思春期真っ只中の男の子なのさ！

たがら俺は、段ボールに

「分かった。」

と、書いた。

「オーケー、それじゃ交渉成立ね、明日警察署に案内してあげるわ。」

よし、これでようやく警察署に行ける。

全く、長い道のりだったぜ。

9話 続、コミュニケーション(後書き)

感想お待ちしています。

10話 警察署に行こう（前書き）

バイオ2、3をやった事が無いという究極の見切り発車

10話 警察署に行こう

side上総君

9月28日、朝

俺は、レベッカと共に倉庫をでた。

レベッカは油断無くベレッタを構えている、昨日散々俺がゾンビの相手は俺がやると伝えたばかりなんだけど…

いや、これが普通か。

いくらタイラントが護衛していても必ず守れない部分がある、というかこんな化け物がうろつく街を武器を構えずに歩け、という方が無理だよな。

まだ俺はゾンビとケルベロスしか遭遇してないが、他にもまだまだいる筈だ、用心するに越したことはない。

しかし今日はやたらと頭がよく回るな、何時もなら持ち前の低血圧でボケボケなのに、例えば朝ごはん食べた後に「いただきます」と、言ったり。

まあ、理由は判ってるんだけどね。

実は昨日俺は寝ていない。

眠れなかったのでは無く全く眠くならなかったのだ。それに何だか

全く疲れない、これもタイラントになったからなのかな？

改めて自分が人間じゃ無くなった、って思い知るよ。

あ、でも腹は減るみたいだね、昨日缶詰め食べたし、けれども前も説明した通り俺はタイラントなんだ、余計なものは極力省かれている、

要するに味覚が曖昧になってた。

俺、ホントに人間辞めたんだね…

いかな、

何だか、頭は回るのが考える事が鬱だな…………

鬱になるな俺！

レベツカともお近づきになれたじゃないか！

それにもうすぐ警察署に行けるんだ、ジルやクレアに会えるじゃないか！

だけどもたお近づきの為に奮闘しないといけないのか……

もう、考えるのやめよ。

「ねえ、」

俺が鬱思考対策の為、思考を停止していると、突然レベッカが話し掛けてきた。

「今更だけど、何で警察署に行きたいの？」

本当に今更ですな、レベッカさん。

「あそこが避難場所になってるのをしってるの？でも貴方は守ってもらわなくちゃいけないようじゃないようだし。」

まあ、その通りだね。

今の俺に勝てるのは多分ウェスカークらいじゃないかな？それでも

数で押されたら流石に無理だろうが。

でも、ゾンビ程度ならどうってことない。

うーん、どう説明しよう？まさかジルとクレアに会いたいからです、なんて言える訳がない。

それにレベッカはジルは知っててもクレアは知らないだろうし。

疑われちゃ不味い。

俺は段ボールに（倉庫から持ってきた）に、

「脱出する方法が警察署にはある、それと証拠も。」

と、書いた。

これなら良いだろう。

仮に疑われたとしても、俺のプログラムの中にあった、と言えはい。

「証拠は分かるけど、脱出する方法が警察署にあるの？」

まあ、そりゃ疑うだろうな、レベッカは実際に勤務してた訳だし。

「警察署には地下がある、そこならラクーンから脱出できる。」

俺としては、出来れば脱出方法はバイオ2パターンにしたい。

バイオ3のヘリコプターで脱出する方法だと重すぎて俺が乗れないかも知れないからだ。

レベッカを見下ろすこの身長なら、体重は軽く百五十キロはある筈だ。

そうになったらマジで笑えない。

だから体重制限が緩い列車で脱出したい。

バイオ2の列車はGの最終形態を乗せて走れたんだから、俺くらい余裕だろう。

「警察署に地下が……知らなかったわ。」

「納得した?」

「ええ、納得したわ。」

そりゃ良かった。

その後も俺はレベッカと会話（といっても俺は筆談だが）しながら

警察署に向かっていた。

途中レベッカは色々なことを話してきた。

好きな歌

好きなテレビ

好きな食べ物

好きな動物

好きな服

本当に色んなことを話してきた。

こうしていると、レベッカも普通の少女にしか見えない。

普通のお喋りをする女の子（といってもよく考えたらレベッカの方が年上じゃん）だ。

ちよつとそのお喋りに飽きてきたが。

そうこうしていると、

「もうすぐ警察署に着くわ。」

もうすぐ警察署に着くみたいです、ハイ。

「…前言撤回、もう！何でこんな所にバリケードがあるのよ！」

あ、撤回されちゃった。

そして叫ぶな、レベツカ。

確かに目の前には、バリケードが築かれている。

それも沢山の車で。

「ごめんなさい、道を迂回しないといけないからまだかかるわ。」

大丈夫、俺、良いこと考えた。

段ボールに、

「問題ない、少し離れて。」

と、書いた。

「どうするの？」

「考えがある。」

俺はバリケードの一部の車に近づき、

思いっきり、

蹴り飛ばした。

ガッシャン！！…………ガコンガコンガコガコ……………

車は10メートル程飛んだ。

俺は振り返った。

レベッカと目が合った。

「……………それ、多分考えじゃ無くて、単なる力技だとおもう……………」

たしかに。

バリケードを吹っ飛ばしたのがいけなかったのかも知れない。

呆れ顔のレベッカと共にバリケードにできた間から通ろうとした時

だった。

「スタアアアアズ!!!」

.....マジか。

10話 警察署に行こう（後書き）

感想お待ちしています。

11話 はじめてのかくとう(前書き)

初本格的な戦闘シーン
あまり期待しないで下さいね

11話 はじめてのかくとう

sideレベッカ

スタアアアアズ!!!!

何かが叫んでいた。

無論私やカズサではない。

叫んでいる、ソレを確認する為、私は振り向いた。

そして酷く後悔した。

恐ろしく醜惡な怪物が居たからだった。

身長はカズサと同じくらい、体は普通のボディービルダーの何倍も筋肉がある、だが、これはタイラントであるカズサも同じだ。コートを着ていることも。

だが決定的に違うの所があった。

顔だ。

右目は手術跡で潰れ、唇が無く、齒はむき出しだ。

そして何より、

その猟奇的な目だった。

カズサもほとんど表情が変わらないが、その目はなんとなく理性的だ。

ソレの目はまるで猟奇殺人者だ。

一目で、これがアンブレラの狂気の作品の一つとわかった。

s i d e 上総君

マジか。

いきなりネメシスか。

そういえば忘れてたけど、レベッカってSTARSだったね。

って、暢気に考えてる場合じゃ無かった！

いきなりネメシスがロケットランチャーを撃ってきた。

俺は咄嗟にレベッカを抱えて伏せる。

ヒューン……ドカーン!!

今まで俺とレベッカが居た場所にロケットランチャーが撃ち込まれ、ちよつと先にあった俺が蹴り飛ばした車に当たった。

勿論車はスクラップと化した。

スタアアアアアズ!

チッ、近づいてくる。

戦うしかないか。

「ケホッコホッ、っくく何なのアイツ!」

ネメシスです、STARSキラーです。

あーたにとってはかなりの脅威です。

どうしよう?

今のレベッカの持つてる武器ではネメシスには対抗は難しいな。

レベッカには逃げといってもらおう。

主に火力の問題から。ベレッタしかレベッカは持ってないし。

それに巻き込まれかねん。

俺は直ぐに起き上がり、同時にレベッカも起き上がらせた。

そして口パクで「逃げろ」と警察署の方向を、バリケードの先を指差しながらレベッカに伝えた。

レベッカは内容は理解したようだが、

「カズサはどうするの！？あれと戦う気！？」

納得はしなかったらしい。

ズシン

ズシン

ズシン

着々とネメシスは近づいてくる。

ああ、頼むから言うこと聞いてくれ！

俺は焦る気持ちを抑えて口パクで、「早く」と伝えた。

「でも…」

スタアアアアアズ！

ブン！

うお！？

俺は、突進しながら拳を振り上げ殴りかかってきたネメシスを辛うじて避けた。

どうやらネメシスはレベッカより先に俺を潰すつもりらしい。

だが、その方が俺には都合がいい。

俺は再度レベッカに「逃げろ」と口パクで伝えた。

肝心のレベッカは、

「……………わかったわ、警察署はこの先すぐだから、警察署で待っているわ!」

ようやく納得した様だ。

レベッカはバリケードを抜けて走っていった。

一瞬、ネメシスがレベッカの方向を向いたが、俺が近くの車のとれかけていたドアを投げつけた事で再び俺の方を見た。

正直、俺には勝つ自身は無い、負ける気もないが。

スタァァァァアズ!

うるさいな、心配しなくても相手してやるさ。

バックステップで距離を稼いだネメシスがロケットランチャーを撃つ。

俺がそれを猛ダッシュでかわす。

そのまま俺はネメシスに突進して、その勢いのまま膝蹴りを放つ。

ロケットランチャーを撃つ姿勢をとっていたネメシスは、俺の膝蹴りがモロに顔に決まった。

勢いで吹き飛ぶネメシス。

だがこんなので終わる筈がない。

ネメシスはゴロゴロと地面を転がってバリケードの一部の車にぶつかって止まった。

案の定起き上がった。

そして起き上がると同時にロケットランチャーを撃ってきた。

余りに急過ぎて俺はロケットランチャーを避けることは出来たものの、少し体勢が崩れた。

いきなりネメシスが突っ込んできた。

俺は体当たりを受け、バリケードの車に叩きつけられた。

そこへネメシスが掴みかかってきてコートの襟をつかまれ、何度も車に叩きつけてきた。

同時に触手が俺の脇腹を貫く。

痛みはある。

だが、どこか遠くで感じるような痛みだ。

耐えられない痛みじゃ無い。

俺は、何度もぶつけられてボロボロになったサイドミラーをもぎ取り、ネメシスの顔に思い切りぶつけた。

上手く破片が刺さったのか、それとも頭部への衝撃が大きかったのか分からないが、襟を掴む手が緩んだ。

俺は襟からネメシスの手を払いのけ、ネメシスの顔に渾身の右ストレートを叩き込んだ。

あまりの衝撃でよろめくネメシス。

俺はそこでネメシスに、タイラントのお馴染みの技、リアアットを放った。

きれいに歯を折りながら転倒するネメシス。

歯は脇腹のお返しじゃ！

今のは効いたらしく、立ち上がる速度が遅くなっている。

と、思ったら再び起き上がると同時にロケットランチャーを撃ってきた。

ロケットランチャーを避ける俺。

そして突っ込んでくるネメシス。

同じ手は二度は喰わん！

俺を掴もうとする手を逆に掴み返し、もう片方の手も同じように掴んだ。

直ぐに触手が俺を貫く。

だがこれは想定内だ。

ガン！

俺はネメシスに頭突きをかます。

ガン！

ネメシスが低い唸り声をあげた。

ガン！

もういっちょ！

ガン！

遂にネメシスが俺の手を振り払い、頭を抑えて激しくよろめいている。

俺は直ぐにネメシスの首を掴むと思い切り捻った。

ゴキリ

鈍い音が響く。

その瞬間ネメシスの腕がだらりと下がって、ネメシスが俺に倒れ込んできた。

俺はネメシスを投げ捨てた。

今の俺ではネメシスに止めを刺せない。

ネメシスを殺すには重火器がいるだろうから、体術だけの俺では無理だ。

俺は、横たわるネメシスに近くの標識を突き刺した。

これで何もしないよりいいだろう。

いやゝしかし処刑って使えるね、流石ハンク、ネメシスが頭抑えてたから思わずやってみたけどこれ程とは、お兄さんビックリ。

ネメシスに標識をもう一つ追加した後、俺は警察署に向かった。

早くレベッカに合流しよう。

ネメシスが回復して起き上がられても困るし。

11話 はじめてのかくとう（後書き）

プロフィールとか書いた方がいいんだろうか？

感想お待ちします。

12話

何かデジャヴ（前書き）

長めです。

12話

何かデジャヴ

sideレベッカ

今、私はイライラしている。

カズサをアレの前に置いてきてしまった。

アレは完全にヤバイものだ。

やはり残るべきだった。

私も戦うべきだった。

「もう、しっかりさなさいよ！」

マイナス思考を振り払う為、自分に言い聞かせる。

もし、私がカズサと共にアレと戦ったとしても、私は足手まといにしかない。

それは私も分かっているし、カズサも知っているはずだ。

アレに対処出来るのはカズサだけだ。

だからカズサは私に逃げろと言ったんだろう。

でも、

もし、アレにカズサが勝てなかったら？

カズサでも対処出来なかったら？

カズサが負けてしまったら？

カズサが死んでしまったら？

……………もう止めよう……………

今はいくら考えても、答えは最も最悪なものしか出ない。

今私が居るのはカズサが目指していた警察署の中の中央のロビーだ。
ここへ来るまで何体かのゾンビがいたが、見た限りここには居なかった。

このラクーンシティ警察署の歴史は結構古く、私が子供の頃は図書館だった。

その後市役所になり、改修が加えられ今の警察署になった。

私は腕を組んで壁に寄りかかっている。

まだなのカズサ、早く。

カズサとはたった1日前に出会ったばかりだというのに、今は大切な友人だ。

カズサは外見こそ無表情だが優しく、とても人間らしい所がある。例えば昨日寝るときに、カズサは寝ないで辺りを警戒していたし、缶詰めを食べて首を傾げ、

「これってポークだよね？」

と、聞いてきた。

私が、

「嫌いなのか？子供みたいね。」

と言うと、カズサはそんなこと無いとばかりに缶詰めをがつついた。

ここに来る途中、私の話に耳を傾けてくれたりした。

私は、カズサは良い奴だと思う。

例えばタイラントであっても、彼は人間らしい心を持っている。

彼を作り出したのは、あのアンブレラだが、カズサは例外らしい。

突然玄関のドアが開いた。

私がカズサに対する考察をまとめていた時だった。

全く遅かったじゃない。

私は顔をドアに向けた。

ドアを開けて入ってきたのは、

「……レベッカ！何でここに居るの？」

STARSの同僚、ジル・バレンタインだった。

「ジル！無事だったんですね！」

彼女はアークレーの研究所から私と共に脱出した仲間の一人だ。

ジルは私と同じベレッタを持ちながら、扉を閉め入ってくる。

「あなた、クリスとヨーロッパに行ったんじゃないの？」

「その筈だったんですけどアンブレラに気づかれてしまったんです、

アンブレラから妨害を受けて二人では行けませんでした、だからヨーロッパにはクリスマスしか行ってません。」

「そう、大変だったわね。」

「今より大変な問題なんてありませんよ。」

私は笑顔で返す。

ジルも微笑んでいた。

「それよりレベッカ、あなたどうしてここなんかにいるの？ 街のゲートには行かないの？」

「ここには地下があってそこから街を脱出する事が出来るそうなんです。」

「地下？ 地下なんてここにの？ 私、ここにそんなに長く勤めてないけどそんな話一度も聞いた事無いわよ？」

「私も教えてもらったただけなので詳しくは知らないんです。」

そうだ、カズサが居ないとどうやって脱出するのか分からないじゃない。

「その話、誰から聞いたの？」

「ええと、「ガチャリ」

いきなり扉が開いた。

そこには、カズサがいた。

パン！パン！

9ミリの、ベレッタの発射音が響いた。

音源を探ると、

「クソッ！何でタイラントが！」

いつぞやの私の様な台詞を言いながらベレッタを撃つジルがいた。

side上総君

パン！パン！

ベレッタの発射音が響く。

なんかすっぱーデジャヴ。

えゝ今俺はジルに銃撃されてます。

ベレッタだから別にダメージはほとんど無いが、弾はゲームみたい

に無限じゃ無い、というかレベッカ、止めてよ。

俺の意志が通じたのかレベッカが、

「ジル！止めて下さい！」

「何だよ！？コイツはタイラントなのよ！？」

「彼は危険じゃ無いです！」

「危険じゃない生物兵器っているの！？」

ジル頼むからレベッカの言うこと聞いてあげて？ね？
いや、リロードすんなって。

弾が勿体無いだろうが。

ほら、レベッカももうちょっと頑張って！

「止めて下さい！レベッカではタイラントを殺せません」

そういう問題じゃねえ。

「だけど何もしない訳にはいかないじゃない！」

「タイラントにベレッタを撃つなんて殺して下さいと言っている様なものです、でも、彼は、カズサは何もしないでしょう？」

「そうだけど…」

そうなら撃つなや。

「撃つのを止めてもカズサはなにもしませんよ、私が保証します。」

「……………わかったわ。」

ようやくか。

ジルはようやく撃つのを止めた。

でもメチャクチャ俺撃たれたぞ？ 確実に16発以上は撃たれたぞ？

「……………」

ジルはまだ俺を警戒している。

ベレッタの引き金から指が離れてない。

ハア……………また俺が危険じゃないって事を理解してもらわないといけないのか…………

俺はボールペンを取り出した。

否、元ボールペンを取り出した。

バッキバキに折れてただのインクの着いたプラスチック片になってました。

まあ、あんだだけ暴れればこうなるわな…………

俺は何か書くものを探そうとした、が、

レベッカきに

「大丈夫なの？」

と、聞かれた。

レベッカ、顔に心配だってかいてあるよ。

俺は首を縦に振った。

「そう、良かった。もう！心配したんだから！」

何ですかレベッカさん。

俺を萌え殺す気ですか？

いまのレベッカ、超可愛かった。

そんなレベッカと俺とのやりとりを見ていたジルは、ようやく表情を緩めた。

いやゝジルも可愛いねえ。

レベッカとはまた違った可愛さがある。

おっと、いかんいかん、鼻の下が伸びそうになった。

鼻の下伸ばしてるタイラントとか、シニールすぎる。

何かバイオ世界に来てから1日の内容が濃い気がする。

あ、しまった。

ネメシスのロケットランチャー回収しとけば良かった。

しまったあああああ！！！！

俺のバカアアアアア！！！！

12話

何かデジャヴ（後書き）

感想お待ちしています。

13話 相談（前書き）

何かぐだぐたになってきた気がする

13話 相談

side 研究員ズ

「T005の受信機はまだ復帰しないのか!？」

「今やってるって!」

てんやわんや

side 上総君

そういえばあの研究員ズ、今頃どうしてるかなあ？

まあ、今頃真っ青だろうな、受信機最初に投げ捨てたもんね。

「怪我したの?」

何ねレベツカ? いきなり。

「血がついてる…それにコートも破れてるし。」

俺は自分の姿を確認してみた。

確かにコートは所々破れているし、分かりにくい血がついている。でも、ネメシスに触手で刺された所は、もう痛く無かった。

「ねえレベッカ、それって嫌み？」

そうなんだよねえ、ネメシスとの戦闘で出来た傷はもう大丈夫けども、先刻ジルに撃たれた傷はまだ残ってるんだよね。

「9ミリくらいじゃどうもならないわよ、そうよね？そのタイラント？」

……何気に酷いな、ジル。

まあ、平気なんだけどね。

「ちょっとジル！それは酷いですよ！」

うんうん、もっと言ってやれレベッカ。

「彼にはちゃんと名前があります！」

いや、何かずれてるから。

俺が撃たれた事についてだな

「彼にはちゃんとカズサっていう名前があるんです！」

あの、だから俺が撃たれた

「カズサ？聞かない名前ね。」

元日本人だから当たり前だろ、じゃ無くて俺が

「何でタイラントに名前があるの？」

「彼が教えてくれました。理由は分かりませんが……」

……もう良いや。

ずれたまま流れちゃったし。

「何故貴方には名前があるの？教えてくれないかしら？」

何でって言われても……

今はタイラントだけど、元々は人間だったんだから名前くらいあるわい。

かといって、元々は人間でした、なんて言っても信じてもらえそうにないし。

……ジルって慎重みたいだからレベッカみたいのに、名前を覚えてい
る理由は分かりません、じゃ何か説得力に欠ける。

いや、レベッカが単純って訳じゃないんだけどね。

俺がどう言い訳しよう、と考えていると、

「なんか話がずれてます、カズサ、怪我は無い？」

と、レベツカが言った。

あーたがずらしたんだって。

でも、そういえばそんな話だったね。

怪我は有ると言えば有るが……

ジルに撃たれた傷とか、まあダメージはほとんど無いけど。

俺はレベツカの質問に首を横に振ることで答えた。

「そう、良かった。」

ほうっ、とため息をつくレベツカ

そんなに心配してくれたんだ、

なんか嬉しいな。

俺の目頭がちょっと熱くなり始めていると、

再びレベツカが、

「カズサ、アレはどうなったの？」

と、聞いてきた。

ネメシスねえ、首の骨折って標識で串刺しにしといたけど、あれでは死んでないだろうしなあ。

俺はレベッカに何か書くものが無いかジェスチャーで聞いてみた。

するとレベッカは近くの机から、紙とボールペンを持ってきてくれた。

さんきゅー、レベッカ

俺は、

「アレはタイラントの改良型だと思う、かなり強かった、とりあえず首の骨を折って動けなくしたが、それで死ぬとは思えない。」

と、紙に書いた。

「タイラントの改良型……じゃあアレはカズサより強いのか？」

「戦闘なら何とか互角だけど、アレが改良型なら他に俺より優れた所があると思う、例えば回復力とか。」

レベッカが聞いて来るので俺が答えていると、

「ちょっと良いかしら？アレ、ってなんなの？」

いきなりジルが聞いてきた。

「ここに来る途中、襲ってきたやつです。」

「どんなやつだった？」

「ええと、みた感じはほとんどタイラントなんですけど、武器を使ってきたり、スターズ！って叫んでました。」

「スターズ？じゃあアレはSTARSを狙ってるの？」

「それはまだ分かりません、出来れば違うの事を祈りますが……」

残念、違うんじゃないんだな、これが。

ネメシスはSTARSを抹殺する事が目標だからかね、絶対に戦わないといけない。

本来ネメシスはジルとかのバイオ3メンバーが戦う筈なんだが、一回俺がダウンさせたからね、少し楽だとは思うけど。

でもまあ、先刻の戦闘で多分俺も敵認定された思うし、心配しなくても大丈夫でしょ、多分。

次にネメシスに遭遇したらロケランを回収しなければ！

ようやく俺を警戒するのを止めたジルを含めて、今後どうするかを話し合った。

結果、ジルが別行動を主張したが（ジルは町のゲートを開けたいらしい）
ネメシスのこともあるので一緒にいてもらうことになった。

ジルにいてもらう理由はまだある。

これは非常に個人的だが、ジルをTウィルスに感染させたくないんだ。

13話 相談（後書き）

感想お待ちします。

14話 求ム、飛び道具（前書き）

何か終わり方が微妙

14話 求ム、飛び道具

side上総君

ハイ、今俺はジルとレベッカと共に警察署の銃器保管室に向かっています。

理由は、ジルとレベッカの武器がベレッタ（ハンドガン）だけっていうのは正直心細いし、火力不足だからだ。

この先はゾンビの他にもハンターとかいるだろうから、せめてショットガンくらい欲しい。

欲を言えばグレネードランチャーもほしいけど。

そんな訳で警察署の中を移動している俺達一行だが、やはり警察署の中にもゾンビはいる訳で、

アゝ……

ふん！

グシャツ！

と、こんな感じにチマチマ潰しながらすすんでいます。

ジルとレベッカには弾薬が勿体無いから、俺の後ろで待機してもらっています。

もういまさらでどうでも良いけど、

ゾンビってスゲーきじゃない！

今まででもう数えるのも面倒なくらいのゾンビを潰してきたが（ホント文字通り）に俺が攻撃するとゾンビがどこかしらが吹き飛ぶ、そんで腐った肉とか色々グロいものを撒き散らすんですよ。

ちょっと離れてれば別に問題ないが、俺はタイラントだから近接攻撃、しかも体術しかない、だからゾンビを潰す度に汚物スプリンクラーをもろに受けてしまう。

ああ、武器欲しい。

飛び道具欲しい。

ゾンビに近づきたく無い。

ホントネメシスからロケラン回収しとけば良かった。

アゝアゝゝ…

もうやだ…

「あれ？ドアに鍵がかかってる」

目の前のドアを開けようとしてドアノブを捻ったレベッカが呟く。
（本来俺が最前列なのだが、一番初めのドアを開けようとしてノブを捻ったらねじ切ってしまった、その後蹴破ったが。それ以来ドアの前に来るとレベッカが前にでる。）

「このドア、何時もは開いてるのに……」

遂にきたか、バイオハザードでお馴染みの鍵探しが、
ハア、面倒くさいなあ、チマチマ探さなきゃなんないのか。

「ちょっと見せてみなさい。」

そうやってレベッカと交代したジルは、鍵穴になんか針金っぽいのを差し込んでカチャカチャやっている。

カチャッ、

「開いたわ。」

「え！何したんですか？」

「ピッキングよ、これくらいなら簡単だわ。」

うわお、ジル頼もしい、そういえばジルってピッキングできたね、助かるわ！

「さ、行きましょ。」

ジルが促す。

今の、ジルかつこええゝ

俺達はジルのピッキングによって次々開いていくドアを進んでいった。

「はい、開いたわ。」

ジルが言う。

レベッカがドアを開けた。

「銃器保管室はこの先ッ！……」

ドアを開けたレベッカが絶句して固まった。

固まったレベッカを見て、ジルがドアにむかった。
そして、

「……………何これ……………」

ジルも固まった。

何だろう、と思い俺もドアのむこうを見た。

ドアの先は廊下だった、それだけなら別にレベツカやジルだって驚きはしない、

問題はその廊下が血塗れで、バラバラの死体があったからだ。

俺は固まった二人をおいて、バラバラ死体に近づいた。

死体はまるで獣に食い荒らされたみたいだ。

スッゲー嫌な予感。

明らかなんか来るな……

ポタッ

俺のすぐ近くに粘液みたいなのが落ちてきた。

ポタッ

(汗) ……

「な、なにあれ……」

レベッカがまるで信じられない様なものを見た時の声で言った。

俺は恐る恐る上を見た。

「ハアアアアア……」

何かいた。

形は人間を四つん這いにしたような形だ、だが、全身がてらと光り、まるで全身の皮を剥がれたみたいだ、口からはあり得ない程長い舌がくねっていて、手には鋭い爪があった。

リッカーだった。

ヒュン！

いきなり舌でなぎはらってきた。

俺は、その舌を掴むと思い切り引っ張った。

掴んだ時、ヌルツとしたが今は気にしてられない。

ブチッ！

舌が千切れ、その衝撃でリッカーが天井から落ちてきた。

俺はリッカーに対して踵落としを放った。

グシャ！

リッカーの頭が砕け散った。

辺りが静寂に包まれる。

「し、死んだの？」

レベッカが震えた声で言う。

「回りを警戒して、まだいるかもしれない。」

ジルが慎重に言った。

その時だった。

ガシャンッ！

廊下の窓を突き破って少なくとも2体のリッカーが飛び込んできた。

ガシャンッ！

更にもう一体が飛び込んできた。

前後を塞がれてしまった。

状態は最悪だった。

14話 求ム、飛び道具（後書き）

感想お待ちします。

ここで読者の皆様に質問です、

各キャラクターとかの紹介って書いた方がいいんでしょうか？

15話 汚物は要らん（前書き）

作中のベレッタという表記をハンドガンにしました

15話 汚物は要らん

side ジル

この地獄の様な街にまだ生存者がいた。

レベツカだった。

とても嬉しかった。

この地獄を味わっているの私だけじゃ無いんだ、他にも味わっている人がいるんだ、と思った。

正直、警察署に来るまで出会った人間は、トレーラーに隠った中年男性だけだったからとても心細かった。

レベツカは私よりも先に警察署にいた。

彼女は誰かを待っている様だった。

もつとも、その待っている誰か、というのは人では無かったが。

レベッカが待っていたのは、なんとタイラントだった。

思わずベレッタをそのタイラントに向けて連射してしまったが、驚くべき事にそのタイラントは何もしなかった。

そのタイラントは私やクリス、レベッカが洋館でカムフラージュされた研究所で遭遇したものとは大きく違った。

まずモスグリーンのトレンチコートを着けている。

研究所で遭遇した奴のは服なんて着けて無かった。

もう一つは、このタイラント、いや、カズサは爪が無かった、両手は手袋をしているものの、ちゃんと人の手だった。

まあ、サイズはグローブみたいに大きいが。

そしてこれが一番印象的だが、カズサに表情はほとんど無いものの、顔に意志が、自我が現れていた。

自分の意思など必要無い生物兵器にはあり得ないことだ。

カズサ、という名前はカズサ自身が名乗ったらしい、

凄く疑問だ、何故本来は自我など無いタイラントが自分の名前を知っているのだろうか？

私はカズサに聞いてみた。

だが、レベッカに話題をずらされてしまい、彼に何故、彼がカズサ

なのかは聞くことが出来なかった。

よほどレベッカはこのタイラント、カズサの事を気にかけているらしい。

私は、レベッカとコミュニケーションをとるタイラント（こちらは筆談だが）を見て、そんなことを思った。

その後したこれからどうするかを、相談した結果、私は避難ルート確保の為、街の封鎖されたゲートの開放を提案したが、多数決でカズサが提案した、警察署の地下からの脱出ルートに決まった。

私ははっきり言って気が乗らないが、（私はここに勤めて長い訳では無いが、地下が在るなどという話は噂ですら聞いた事が無かったからだ、カズサは絶対にと主張していたが）もし地下が無かった場合、心置きなく街のゲートの開放に尽力出来るだろう、この二人の協力を得て。

早速レベッカが探索を始めようとしたとき、カズサが、

「探索を始める前に銃器保管に行こう。」

と、筆談に使っていた紙に書いた。

「それは良いけど、ああ、武器の補充をするのね。」

「ご名答、その通りだ。」

彼は、私達の武器がハンドガンだけなのを心細く思っているらしい。

確かに武器はたくさん有っても困らないし、今まではゾンビとケルベロスにしか出会わなかったが、他にもアークレーの研究所で出会った様なものも居るかもしれない。

私達はカズサの提案に直ぐに賛成した。

今、提案に賛成したついさっきの自分を張り倒したくなっている、理由は、

「ハアアアアア……」

これだ。

ここまで来るのはとても簡単だった。

ゾンビは全て、カズサが文字通り潰してしまったからだ。

私や、レベッカは後ろで待機していた。

たまに私は鍵をピッキングで開けたりしたが。

それでも、これはとても楽だった。

カズサが、一番最初のドアのノブをねじ切るというアクシデントもあったが。

「ハアアアアア……」

ピンチだ。

化け物に前後を塞がれた、しかも、カズサと私やレベッカとの間に化け物が二匹いる、そして私達の背後にも一匹。

不味い、とても不味い。

「ハアアアアア……!!」

前の二匹が耳をつんざくような叫び声をあげた。

ガンッ！ ヒュンッ！ ドカッ！ ゴンッ！ 「ハアアアアア！」 ドゴ
オン！

前の二匹はカズサが乱闘を始めたようだった。

つまり、対応するのは後ろの化け物だけで良い。

「レベッカ！後ろの奴を撃つわよ！」

目が覚めたようにレベッカがハンドガンを構える、

そして、

パン！パン！パン！パン！

後ろの化け物に向かって銃弾を叩き込んだ。

side上総君

パン！パン！パン！パン！

レベッカとジルがハンドガン撃つ。

ようやくですか、てかハンドガンでリッカー倒せんのかなあ？

「キシヤアアアアア！」

ヒュンッ！

おおっと！

俺はリッカーのしなる舌を紙一重で避けた。

今は考え事してる場合じゃ無いな！

お返しだ！

ガンッ！

俺はリッカーに蹴りをいれる。

吹き飛んで壁に叩き付けられるリッカー

俺はそいつの胴体にアッパーを見舞った。

ゴキヤッ！

リッカーがくの字になって床に沈む。

「ハアアアアア！」

突然俺の首がしまった。

ヌルヌルしたものが首に巻き付いている。

明らかにリッカーの舌だ。

思わずブルッと体が震える。

汚ねえもん巻き付けてんじゃねえ！！！！

俺は舌を掴んで強引に、

ブチッ！

引きちぎった。

そして、そのままちぎった舌を掴んで、

ゴンッ！

ガンッ！

壁に二回程叩き付け、

ガシャンッ！

割れて無かったガラスから放り投げた。

汚物は退場したまえ。

s i d e レベッカ

ジルに言われてハンドガンの引き金を引いた。

「く！、当たりなさいよ！」
思わず眩く。

化け物のスピードは、かなりの早く、なかなか当たらない。

「キシャアアアアア！」

ドンッ！

「キャアッ！」

突然の体当たりに対応出来ず、ジルが壁に叩き付け叩き付けられた。

ヤバイ！

私は、ジルが起き上がる為の時間を稼ぐため、ひたすらハンドガンを撃ち続ける。

だが、なかなか当たらない。

当たれ！当たれ！当たれ！当たれえ！

アドレナリンが分泌されているのが分かる。

化け物が少し距離を取った。

私はチャンスとばかりにハンドガンを撃ちます、だが、化け物はそれを全て避け、私に飛び掛かってきた。

化け物の鋭利な爪が迫る。

思わず目をつぶった。

何かデジャヴだな、と思いながら。

「ハアアアア「ドゴォン！」

痛みは訪れなかった。

目を開けてみた。

カズサが居た。

腕は壁に突き刺さっている。

ついさっき私に飛び掛かってきた化け物を突き刺しながら。

化け物はピクリとも動かない。

この時程、カズサが居た事を感謝したことは無いと思う。

15話 汚物は要らん（後書き）

感想お待ちします

16話 遭遇 その2 (前書き)

何かどんどん原作から離れてきた。

16話 遭遇 その2

sideレベッカ

ようやく武器保管室へ着いた。

廊下での化け物との戦闘で、弾薬を結構使ってしまったが、保管室には弾薬くらいあるだろう。

化け物の体当たりを受けてしまったジルだったが、幸い、軽い打ち身程度で済んだ。

私やカズサには、全く怪我は無かった。

保管室には、思っていたよりも武器は残っていた。

見つけたのは、

レミントンM870ショットガンが一つと、MP5A3サブマシンガンが一つ、PSG-1スナイパーライフルが一つ、後はそれらの弾薬と9ミリのマガジンがいくつか見つかったくらいだった。

これはとても満足すべき結果だ。

今までのハンドガンだけに比べたら、大分ましになったと思う。

外のバリケードにはパトカーも混じっていた、ということは警察が事態の鎮圧の為、武器を持ち出した筈だ、だからこうして武器を手に入れる事が出来たのは幸運だった。

見つけた武器の内、サブマシンガンは私が、ショットガンをジルが持つ事になった。

ライフルは初め、カズサが持とうとしたが、彼の手の大きさではトリガーガードに指が入らず、引き金を引く事が出来ない事が分かり、結局私がライフルを持つ事になった。

トリガーガードに指が入らないと分かった時のカズサは、物凄く項垂れていた。

そんなに銃器を使いたいのだろうか？

タイラントには必要無い気がするけど。

s i d e カズサ

残念だ。

ああ、残念だ。

非常に残念だ。

バイオ世界にきて、俺は初めて自分がタイラントである事を恨んだ。

まさかの銃の引き金が引けない、というこのアクシデントよ。

俺には体術だけで充分ということか……

久々に俺をバイオ世界に飛ばした神様を殴り飛ばしたくなってきた。

結局俺が使おうとしたライフルは、レベッカが使う事になった。

RSはスナイパーも兼ねてるし、まあいいか。

ショットガンの方はジルが持って、サブマシンガンはレベッカが持つようだ。

何気にレベッカ重装備だな。

これでリッカーくらいならなんとかなるだろう。

不意打ちされたら分からないが。

ショットガンに弾を装填しているジルが、

「ねえ、探索を始める前に私達のデスクに寄っていいかしら？」

と、言った。

「デスクに……別に良いですけど、何しにいくんですか？」

俺も同じく、デスクに何しにいくの？

「私のキーピックがあるのよ、今まで針金で開けてたけどやりにくいし、時間がかかるわ、それにバリーのコルトが残ってるかも知れないし。」

む、それは行かねば、ジルのキーピックは最悪無くても良いが、バリーのコルト、多分マグナムだろう、これは欲しい。マグナムがあればゾンビは勿論リッカーやハンターくらいなら簡単に殺せてしまおうだろう。

「それにウエスカーのデスクに何か残ってるかも、アンブレラとの書類とか。」

え、ウエスカーのデスクってそのままなん？

撤去とかされて無いの？

「バリーのコルトにキーピック、アンブレラの証拠ですか……確かにあった方が良いでしょう。」

うん、まあ良いんじゃない？

デスクまでは銃器保管室への道をほとんど戻るだけだったから、特にゾンビやリッカー等の化け物に出会う事は無かった。

ホントゾンビと出会わなくて良かった、主に俺の精神衛生上。

「キーピックキーピック、あったわ！」

自分のデスクをさがさそしていたジルが言った。

「レベッカ、そっちはどう？」

「うーん、バリーのデスクにもウェスカーのデスクにも特に何も入ってないですね。」

「ロッカーはどう？」

「鍵がかかってて開きません。」

「じゃあ開けるわね。」

そう言ってロッカーの鍵穴にキーピックを差し込むジル。

カチャカチャとやって僅か数十秒で開けてしまった。

スゲーな、ジル。

ロッカーを除き込むジル、そして、

「バリィ、貴方って本当にいい人だわ。」

と言った。

その手には鈍く光るコルトパイソンが握られていた。

お、ありましたかマグナム、これでかなり安心だね。

俺がそんなことを考えていると、

レベツカが、

「ジル、アレは開けられますか？」

金庫に指を指して言った。

金庫にはダイヤルが付いておらず、「書類保管用」と書かれている。

「やってみるわ。」

と、ジル。

早速カチャカチャやり初めた。

その様子を俺が眺めていると、レベッカが近づいてきて、

「いくらダイヤル付いてない金庫でも、開けちゃえたらジルってすごいよね。」

小声で言った。

確かに、ジルのキーピック能力は凄いと思う、でも、何故ジルがピッキングなんて出来るのか凄く疑問だったりする。

ノベル版ではジルの親父さんは、その方面で有名な泥棒だったそうだが……

カチリ、

「開いたわよ。」

ジルってスゲエ。

「うーん、無いですね。」

「無いわね。」

無いみたいです、金庫から出てくるのは、どうでも良い報告書ばかりだった。

その中でクリスの報告書には笑った、俺が中1の時レベルのミスを連発していたからだった。

その時だった、

「誰か居るのか？」

声がした。

レベッカやジルの声では無かった。

それは男性の声だった。

やや疲れた声だ。

「誰！」

ジルとレベッカ、そして俺が振り返える。

「……ジル？、それにレベッカ？じゃないか！」

「マーヴィン！無事だったの？」

そこに立っていたのはラクーン警察の制服をきた警察官、マーヴィン・ブラナーだった。

マーヴィンは肩を押さえていて、肩は血塗れだった。

16話 遭遇 その2（後書き）

感想お待ちしています。

17話 決断（前書き）

ちよつと長め

17話 決断

sideレベッカ

そこにいたのは、マーヴィンだった。

彼はラクーン警察では優秀な部類に入る、ベテランの警官だ。

私がここに勤め始めたばかりの時、彼にはかなり助けられた、彼は制服組だが、実力的には私達S T A R Sとほとんど変わらない程優秀だ。

彼はこの地獄をなんとか生き抜いたらしい、だが、その肩からは激しく出血していた。

「レベッカ、ジル、生きていたんだな…」

「ええ、なんとかね。」

ジルが答える。

マーヴィンがカズサに顔を向けて言う。

「そっちのでかいのは知らないな。」

「彼はカズサ、私達の脱出を手伝ってくれるわ。」

「そうか…」

マーヴィンは顔をしかめながら肩を押さえている。

酷い怪我なんだわ。早く手当しないと！

「マーヴィン！大丈夫？その肩はどうしたの？」

「ああこれか、ハハハ、もう良いんだ。」

「もう良いって……出血が酷いわ、手当しないと。」

マーヴィンは自嘲するように薄く笑っている。

「奴らに噛まれたんだ…俺も奴らと同じになっちまう。」

マーヴィンは弱々しく答える。

「そんな……」

「なあ、頼みがあるんだがきいてくれるか？」

「もし生存者がいたら生存者を避難させて欲しい、もっとも、まだ安全な場所があるか解らないが……とにかく生存者を安全な所に避難させてやってくれ。」

マーヴィンは本当に良い奴だと思う、こんな状態になりながらも、まだ自分の責務を果たそうとしている。

マーヴィンは本当のプロだ。

「……分かったわ。」

「もう一つ頼みがある。」

「何？」

マーヴィンは決心した様に言った。

「俺を殺して欲しい。頼む！」

私は一瞬時間が止まった様に思えた。

しばらくして我に帰った私は、

「そんなこと出来ないわ！」

と、言った。

マーヴィンは何を言うのだろう、私にはそんな事出来ない、いや、
できる筈が無い。

「マーヴィン、貴方何言ってるの？」

どうやらジルも同じ意見のようだ。

「どのみち俺は助からない、奴らに、ゾンビに噛まれたら、もうお終いなんだ!」

「だからって死に急ぐ事無いじゃない! 助かる方法があるかも知れないわ!」

「助かる方法があるとは思えない、少なくとも俺が見た限り、噛まれて助かった奴はいない。」

「で、でも……」

「何度も、何度も普通の人間がゾンビになるのを見てきた、俺は人間のままでいたいんだ、だから、俺が人間である内に殺してくれ……」

「……分かったわ。」

「な! ……ジル! 何をしてるんですか!? 本当にマーヴィンを殺してしまうんですか!?!」

「そうよ。彼の願いだもの。」

「ダメです! 絶対に!」

「私が彼の立場でも同じ今の彼と事を言うわ、ゾンビになってしまふより、人間でいたまま終わりを迎えたい、そう考えるわ。」

「レベッカ、わかってくれ、どのみち君らは俺を撃たなきゃならない、それがまだ人間の時か、ゾンビになった後かの違いだ、もつと

も、結局は辛い思いをさせてしまうだろうが。」

確かに私だって、ゾンビにはなりたくない、それくらいならいっそ死んだ方がましだ、マーヴィンだってそう思うだろう。

「レベッカ、私は彼の意思を尊重すべきだと思うわ、それに、私はゾンビになった彼を見たくない。」

長い沈黙の後、

「……………分かりました。」

私は決心した。

「君らの銃を使わせる訳にはいかないな。」

マーヴィンはそう言って自分のホルスターからハンドガンを抜き、ジルに渡した。

「ジル、君がやってくれないか？」

「そうね、今のレベッカでは難しいでしょうし。」

決心したものの、多分私は引き金を引くことが出来ないだろう。

今だって涙を抑えるのに精一杯だから。

「何か言い残す事はない？ マーヴィン。」

「特に無いな、家族にはメールで遺言を送ってある。」

「そう。」

ゆつくりとハンドガンを構えるジル、

その狙いは真っ直ぐにマーヴィンにむいている。

「さよならマーヴィン、貴方良い警官だったわ。」

「そりゃありがとう、そう言ってもらえて嬉しいよ。」

ジルはゆつくりと指をかけ、

「さようなら、マーヴィン。」

引き金を引いた。

ガシッ！

side上総君

ガシッ！

俺は今、ジルが今まさに引き金を引いたハンドガンのスライドを握って、弾が撃てない様になっている。

「何をするの？」

ジルが言う。

いやあ、シリアスな雰囲気ぶったぎって悪いんだけどさ、

俺、マーヴィン助ける方法知ってるよ。

「貴方さっきの話聞いてた？」

ジルが、お前空き読めや、って顔をしてる。

俺は、シリアスが展開してる間に書いた紙を見せた。

「ラクーン病院にはTウィルスのワクチンがある、それを使えばマーヴィンを助けられる。」

一同、ポツカーン

「何でもっと早く教えてくれないのよ!」

レベッカが怒鳴る。

いや、レベッカよ、そんな涙目で怒ったって可愛いだけだから。

それに、遅れたのにはちゃんと理由があってだな、まあ要するに、書くものと紙を置いてきちゃってここで探してる内にあーた達が話を進めちゃってた、という訳。

だってここ、紙は山程有るけどペンが無いんだもん。

「それは確かなの?」

ジルが確認してくる。

当たり前でしょ、無かったらジルが死んでるっての。

俺は首を縦に振った。

それを見たレベッカは、

「なら、早く行きましょう! ジル、マーヴィンの手当をお願いします。」

俺の手を引っ張り、俺を拉致りながら行ってしまった。

17話 決断（後書き）

やっぱりシリアスは無理だったZ E

感想お待ちします。

18話 道中（前書き）

特に進展は無いです

18話 道中

side上総君

体調が思わしくないマーヴィンは、警察署にジルと共にいてもらう事になり、俺とレベッカで病院に行く事になった。

マーヴィンに残された時間は一時間、長くて一時間半だろう、少し急がないといけない。

俺は今、レベッカを背負って病院への道を爆走している。

体力と歩幅が、俺とレベッカでは違い過ぎるからだ。

初めは渋ったレベッカだったが、

俺が、

「マーヴィンに残された時間は余り長くない。」

と伝えた（デスクにあった、バインダーを持ってきた）ところ、

「……分かった。」

渋々納得した。

何回も言うが余り時間が無い、だからゾンビは極力無視していた。

無視出来ないゾンビは、肉片がレベッカに行かない様に蹴り飛ばし

た。

急がないと。

s i d e レベツカ

まさか18才にもなって他人に背負われるなんて、とてつもなく恥ずかしい。

だが、これもマーヴィンの為だ、我慢しよう。

私は今カズサに背負われている。

私の足じゃカズサの足手まといになるし、カズサならゾンビやその他の相手にしたくないものを振り切る事ができる。

その上での判断だった。

もつとも、提案したのはカズサの方だけど。

「次の角を右ね。」

カズサは、この街の道が分からないらしい、（役に立つ情報は知ってるくせに）まあ、アンブレラがタイラントに事前に教育をしてる筈なんて無いと思うけど。

だから私がナビゲートしないといけなかった。

「次の通りを渡って直ぐ左、そこがラクーン病院よ。」

カズサが頷く、

そして、ややスピードが上がった、

彼も今は急ぐべきだと理解しているのだろう。

カズサが物凄いスピードで通りを横断する、

実際、足音が、足音と思えないレベルだし、後ろを見ると地面のアスファルトに足跡がくつきりと続いている。

ゴシャッ！

ふいに衝撃が伝わった。

まるで何かを踏み潰したみたいな衝撃だった。

どうやらカズサがゾンビを踏みつけるか蹴り飛ばすかしたらしい。

今はゾンビの相手をしている場合では無いから、仕方ないが、吹き飛ばす死体を見るのはあまりいい気分じゃない。

私が目を伏せていると、カズサがまたスピードを上げた。

スピードが上がったせいでカズサから伝わってくる衝撃が増大する。しっかり捕まっていけないと振り落とされてしまいそうだ。

「カ、カズサ、もうちょっと、ゆっくりに、出来ない？」

本気で落そうだ。

これはいくら急いでいると言ってもこれはキツイ。

だが、カズサはスピードを落とさない、

ヤバイ、落ちる

そう予感した私は、

「カズサ！スピードを落として！」

割りと必死な声で言った。

だが、カズサは一瞬首で後ろを指しただけだった。

もう！一体後ろに何が「バウバウ！」

私は直ぐに振り返った。

そこには、

「バウ！ガウ！」

数体のケルベロスが追いかけていた。

side上総君

「バウバウ！」

あゝ、やっぱりケルベロスだったか。

さっき蹴ったとき、何か嫌な予感がしたんだよね。

「ガウガウ！」

「もっと早く！追い付かれちゃうわ！」

レベッカのかなり必死な声が聞こえた。

さっきまで、スピード落として、って言ってた癖に。

「バウバウ！」

チッ！音が近づいて来てやがる、元が犬だから、足も速いな。

急ぐ俺、段々近づいてくるケルベロスの唸り声、そしてレベッカの割とマジな「速く！！」という声。

「もうすぐ病院よ！」

やっとか。

俺は更にスピードを速める。

病院の入り口が目前に迫る。

ケルベロスも直ぐ側に迫る。

俺は扉を壊れない程度に蹴り開けて中に飛び込んだ。

直ぐ扉を閉める、

外から、キャンとか、ギャンとかが聞こえてきた。

ホントギリギリセーフだな。

18話 道中（後書き）

感想お待ちしています

19話 病院（前書き）

進展はありません

19話 病院

side ジル

マーヴィンの体調は相変わらず良くない、むしろ悪くなっている。

レベッカ達はもう病院に着いたかしら？

そうなのだとしたら、早くワクチンを見つけて戻ってきて欲しい。

「すまないな、こんな死に損ないのために……」

「そんな事ないわ、貴方にはまだ生きる権利があるもの、ワクチン
っていうね。」

私は苦い笑顔のマーヴィンとは対称的に笑顔で言った。

笑っていないと押し潰されてしまいそうだったからだ。

お願い、レベッカ、カズサ、早くワクチンを持ってきて。

side上総君

俺とレベツカはなんとか病院に着いた。

途中、ケルベロスと鬼ごっこしたため最後の方はかなり焦ったが。

ちょっと疲れたな。

それでも少し息があがっていたくらいだが。

「つ、疲れた…」

床にへたりこんだレベツカが呟く。

レベツカは俺の背中に背負われていた筈、何でそんな疲れきってるん？

人間ナビってそんなに大変なのかな？

「落ちるかと思った…」

あ、そういう事ね。

確かにケルベロスに追いかけてらる間、物凄いスピードで走ってたな、それこそオリンピック選手も真っ青な速さで、きっとレベツカは振り落とされまいとしてしがみついていたんだろう、途中、スピード落として！、って何回も言われたし。

「ケルベロスに追いかけてたとはいえ、あれはこたえるわね…」

レベッカは凄くお疲れだな。

でも、ここであまり時間を費やすことは出来ない。

残り時間はそう長くない。

帰ってきて間に合いませんでした、じゃ済まされない事だ。

マーヴィンが死んでしまおうし俺の信用も失われるだろう。

それだけは避けたい。

それによく考えたら、本来病院にワクチンを取りに来るのはカルロスの筈、だが、未だにカルロスとは出会ってないし時系列だって2日程早い、そしてこれが一番の障害なんだが、ここグリーン病院にはアンブレラが送り込んだ監視員が居る可能性が非常に高い、その監視員が障害になる可能性もまた非常に高いんだ。

まあ、俺が居るからそこまで困らないとは思うが。

ニコライの事もある、奴は他の監視員を殺そうとする筈、だからあまり監視員に近づきたくない。

それにグリーン病院にはハンターがいた筈、確かハンターβかγのどちらかだったと思う、だがどちらにせよ厄介なのは変わらない。

俺はハンター程度なんて楽勝だろうがレベッカはそうは行かない。

だから余裕がある内にワクチンを回収しておきたい。

俺はレベッカに行動開始を告げるべく、

「そろそろ行こう。」

と、書いた紙を見せた。

sideレベッカ

「そろそろ行こう。」

ちょっとイラッとした。

私がへばってるのはカズサが原因なのに、それを彼はわかっているのだろうか。

まあ、正確にはカズサが原因では無いのだけれど。

あの状況では仕方無かったのだろう、でも本当に爆走するカズサの背中から落ちない様にするのはとても大変で、同時にとんでもなく疲れるものだった。

私がへばってるのに、全く何時もと変わらないカズサを見ると本当に、本当に少しだけイラッとした。

「悪いけど手を貸してくれない？」

カズサは直ぐに手を差し出した。

仕方ないわよね、彼に悪気があった訳じゃないんだし。

私はカズサの手をとり、立ち上がった。

そう言えば、カズサはワクチンはラクーン病院に有る、って言うってたけど病院の何処にあるんだろう？

私はカズサに、

「ねえ、カズサ、ワクチンって何処に有るの？」

聞いてみた。

「ワクチンは極秘の筈だし、もしかしたらまだ合成されて無いかも知れないから、多分研究室に有ると思う。」

研究室、ね。

嫌な響きだわ。

どうやら、私は洋館事件以来「研究室」という単語が嫌いになった様だ。

「それじゃあ研究室に向かいましょう。」

私は、さつきカウンターをあさって見つけた地図を見ながら言った。

19話 病院（後書き）

何時になったらバイオ2組がだせるだろう

感想お待ちしております

20話 病院その2（前書き）

何時もより多めです

20話 病院その2

side 研究員ズ

プルルル：

「なんだこの忙しい時に！」

「悪いが電話お前が取ってくれないか？ 今手が離せないんだ。」

「私も忙しいんだ！」

「だからって無視する訳にいかないだろ。」

「君が出れば良いだろう！」

「だから手が離せないんだってば、それにお前の方が俺より電話の対応とか得意だろ。」

「…………まあ、良いだろう、貸しは高いぞ。」

「出来るだけ負けといってくれ、でないと破産しちまう、というか早く出ないと切れるぞ。」

「そうだな。」

ガチャッ

「いつまで待たせるかと思ったよ。」

「すみません、故障した受信機の回復、修理を行っていましたので。」

「私が聞きたいのはそんな事じゃない、それよりもまだ動かせるタイラントはあるかね？」

「あるにはありますが……それはまだ各種テストは愚か稼働テストすらしていません、恐らく満足に機能しないと思いますが……」

「もう一度だけ言うが、私が聞きたいのは動かせるタイラントがあるかどうか、だ、とにかく有るんだな？」

「……あります。」

「では今からそのタイラントを使う、目標はラークンシティ研究所のバーキン博士が作ったGウィルスの入手だ。」

「な！、ですが、今から準備を行うと1ヶ月は掛かります。」

「だめだ、あと二時間でやれ。」

「無茶です！」

「無茶だろうがやるんだ、これは決定次項だ、君らが口出し出来ることじゃない。」

「……………はい。」

「君らは私達の言うことを大人しく聞いていればいいんだ、私が今

君に求めているのはこれと君が失敗しない事だ。」

「……………分かりました。」

「さっきも言った通りに私は成功を求めている。」

「……………」

「聞いたが、タイラントが一体、操作出来なくなったそうじゃないか。」

「……………」

「次は失敗しない事だ、でないと私達は君に失望する事になる。」

「……………黙れ」

「は？」

「黙れと言ったんだ、このクソジジイ！！失敗するなだと！？貴様らが無理矢理動かしたんだろうが！それを私の責任にするな！テスト無しでは失敗するに決まってるだろう！貴様らの言ってる事を聞いている限り失敗し続けるだろうな！」

「お、おい！何言ってるんだよ！相手は幹部様だぞ！」

「うるさい！もう我慢出来ないんだ！」

てんやわんや、前回よりも規模増大

side 上総君

病院の中には結構な数のゾンビがいた。

まあ、俺が見つけ次第潰してるけど。

グシャッ！

俺は、白衣を着た恐らく医者だったであろうゾンビを踵落として粉砕しながらそう思った。

もう結構進んでいる。

まだ、お目当ての研究室に着かないのかな？

俺は背後に居るレベッカに、

「研究室まであとどれくらい？」

と、聞いた。

「もうすぐ、次の曲がり角の突き当たりよ。」

地図を見ながらレベッカは答えた。

これなら間に合いそうだな。

俺とレベツカは病院を進んでいった。

s i d eレベツカ

目の前には「研究室」と書かれたドアがある。

ここまで来るのは非常に楽だった。

警察署内を探索した時と同じく、ゾンビはカズサが全て潰したからだ。

ゾンビを意図も簡単に潰すカズサを見て思った。

これ、私が銃持ってる意味あるんだろうか？

私は警察署で舌の長い化け物に発砲してから一度も銃を使って無い。確かに警察署の化け物には必要だったが、ゾンビを次々と潰していくカズサを見て銃の必要性を感じなくなっていた。

カズサがドアの前で立ち止まり、私の方を振り返った。

そうだった、確かカズサはドアを開けられないんだっけ。

私はドアに近づいた。

カズサの力だとノブをねじ切ってしまう、だから代わりに私が開けないといけないのだ。

私はドアを開けようとした。

が、

ガチャリ

鍵が掛かっていた。

もう！時間が無いっていうのにこの上鍵探しまでしないといけないの！？

私はカズサに、

「鍵が掛かってるわ、鍵を探さないで。」

と、いうと、

カズサは、

「考えがある。」

紙を見せてきた、

あれ、？何だろう？なんだか前にもこんなことがあったような…

カズサは、私を下がらせドアの前に立った。

そして、

ドゴォン！！！！

ドアを蹴り破った。

何だか凄いデジャブ感じるわね…

カズサが研究室に入っというとした時、

「だ、誰だ！」

声がした。

side上総君

研究室にはまだ生きている人間が居た。

でも、それが歓迎すべき事なのかはまだわからない。

そこにいた人間は男だった。

だが、俺はバイオの主要なキャラクターをほとんど覚えているが、どれも一致しない。

ということは、こいつは主要キャラクターでは無いか、もしくは完全なイレギュラーだということだ。

「だ、誰だお前らは！」

再度そいつが言う。

「私はレベッカ、STARSよ」

レベッカがそれに答える。

「貴方は？」

「わ、私はアキノ、医者だ。」

アキノ、か

そう言えばバイオ3の監視員にそんな奴いたな。

アキノは白衣を着ている、そして顔真っ赤にして汗をかいていた。

「な、何でここに来た？」

「私達はウィルスのワクチンを探しにきたの、貴方何か知らないな？」

「ワクチン？そ、そんな物私は知らん！」

アキノは明らかに狼狽している。

どんだけ嘘つくの下手やねん。

「それは本当なの？」

レベッカも怪しいと思ったらしく、怪訝な顔をしている。

「ああ、ウィルスのワクチンなんて無い。」

さっと手を自らの後ろに回すアキノ。

よく見たらアキノは何かを後ろに隠し持っている。

バレバレだって。

「本当に無いの？」

アキノににじり寄るレベッカ。

「あ、ああ、無い。」

ジリジリと後ろに下がるアキノ。

「本当に知らないの？」

「し、知らん！」

更ににじり寄るレベッカ。

アキノは机に阻まれてもう後ろに下がれない。

「本当に？」

「し、しつこいぞ！無いものは無いんだ！」

「あ、何か落としたわよ？」

「な、何！？」

あたふたとして背後を向くアキノ、そして無警戒になったアキノの手から紙を抜き取るレベッカ。

「ッ！か、返せ！」

慌ててレベッカから紙を取り戻そうとするアキノ、だが俺が間に入った事でそれは阻まれた。

紙を一読したレベッカが、

「ふうん、貴方嘘ついてたわね？」

と言った。

「ぐ……」

凶星だねえ。

「確かにワクチンはないけど作れるじゃない、ここにある物で。」

レベッカがアキノに言う。

残念だな、アキノ。

近くの机によろめくアキノ、

その姿は非常に哀れだ。

まあ、俺はそんな事感じてやる義理は無いが。

「く、クソッ！」

突然アキノは何かをレベッカに投げつけた。

俺はレベッカにむかって飛んでいく何かを叩き落とす。

それは注射器だった。

幸い注射器には何も入っておらずレベッカと俺は無事だったが、アキノは俺達が注意を注射器に向けた隙に逃げてしまった。

「何なのよ、アイツ。」

レベッカが呟く。

俺はレベッカに、

「ワクチンの合成は出来る？」

と聞いた。

レベッカは、

「ええ、出来るわ、材料は全部ここにあるだろうし。」

「じゃあ早く取りかかろう。」

「そうね。」

そう言ってレベッカがワクチンの合成に取りかかろうとした時だった。

キシヤアアアアアア！！！

叫び声が聞こえた。

爬虫類の様な感じだが、人間の様な感じでもある。

「不味いわ……」

どうやらレベッカには心当たりがあるらしい。

「何でこんな時にハンターが……」

……………アキノの野郎腹いせにハンター逃がしやがったな！

だが、逃げる訳にはいかない、まだワクチンを手に入れてない。

仕方ないな。

「ワクチンの合成を急いでくれ、ハンターは俺がなんとかする。」

俺はレベッカにそう伝えた。

「……分かったわ、出来るだけ早く終わらせるから、貴方も無事でいてね！絶対によ！」

レベッカはワクチンを合成するため、俺にはよくわからない機械を動かし始めた。

キシャアアアアア！

声は段々近づいてくる。

俺はハンターを迎撃すべく廊下に向かった。

20話 病院その2（後書き）

感想お待ちしています

21話 病院その3（前書き）

なかなか話が進まないあ

21話 病院その3

sideレベッカ

キシャアアアアア!

「何でこんな時にハンターが……」

私は思わず呟いていた。

ハンターというのは、私達が洋館で出会った中でかなり厄介なアンブレラの生物兵器の一つだ。

それは爬虫類と人間を掛け合わせたような姿をしていて、両手には鋭い爪がある。

奴らの瞬発力や破壊力はかなりの脅威だった。

キシャアアアアア!

声は段々近づいてくる。

ヤバイ、どうしよう。

カズサが教えてくれた様に確かにワクチンは有ったが、初めから有るわけでは無く合成しなければならない、だが今こうしている間もハンターは迫ってくる、かといって逃げる訳にはいかない、それだところまで来た意味が無いし、この部屋から出るドアはさっきアキノがでて行ったドア、つまりドアが一つしか無い、どうしても奴ら

に出会ってしまう。

どっちにしろ逃げ場は無い。

どうしよう、一体くらいなら今はサブマシンガンを持っているし対応は可能だ、だけどハンターが複数なら恐らく無理だろう。

そんな事を考えていると、

「ワクチンの合成を急いでくれ、ハンターは俺がなんとかする。」

そうカズサに伝えられた。

確かにカズサならこの状況をなんとか出来るだろう、警察署の化け物もほとんどカズサが潰したような物だし。

私は了解の意を示した。

side 上総君

レベッカは機械をいじっている。

恐らくあれがワクチンの合成に使う機械なのだろう。

動画で見た事あるけどこのワクチンの合成って謎解きみたいな感じで、スッゴい難しそうだった。

俺なら多分、一時間真面目にやっても解けないと思う。

まあ、ゲームと全部同じじゃ無いにしろ、それを使えるレベッカって凄いな。な。

いや、今まで馬鹿みたいに思ってた訳じゃ無いけどさ。

だってレベッカって見た目普通の女の子だし。

見た目普通の女の子で大学飛び級で卒業してて現役の警察官、しかもエリート部隊所属してるとかわからないって。

キシヤアアアアア！

おっと、考えるのに時間を使い過ぎたな。

俺は俺が蹴り破ってガタガタになったドアに向かった。

無理矢理開けたせいでかなりガタガタだったが、そこは力に物を言わせてこじ開けた、それでハンターが入らないようきつくドアを閉めた。

つかアキノのはどうやってこのドアあけんだろう？

キシヤアアアアア！

俺が研究室前の廊下に出ると同時に俺はハンターの姿を視認した。

第一印象、

何かキモいわあ。

いやね、警察署にいたリッカーも相当キモいけどもよ、何かこのハンターキモい。

身体中に赤い瘤がある。

この瘤が一段とキモい。

何故なら俺はブツブツしたものが最高に嫌いなんだ！

例えばフジツボとか、おわあ、考えてたら気持ち悪くなってきた。

でも赤い瘤があるって事はハンターβかな。

まあ何にせよ、俺が負ける様な相手じゃない。

キシャアアア！

ハンターβが突っ込みながら俺に斬りかかってきた。

ドカツ！

俺はハンターβが斬りかかる前に自分から近づき、蹴り飛ばした。

蛙が潰れる様な音をさせながら吹き飛ぶハンターβ、そいつは壁に叩きつけられて動かなくなった。

1体撃破ね。

キシャアアア！

更にもう一体が俺に飛び掛ってくる。

お前らの鳴き声にレパートリーは無いんかい？

俺は飛び掛かってくるハンターβを拳を叩きつけて落下させ、思い切り踏みつけた。
グシャッ！

湿った破裂音と共に内臓やら骨やらあまり見たくないものが飛びだしてきた。

2体目撃破。

刹那俺の左腕に何かに挟まれた様な感覚が襲った。

咄嗟に左腕を見ると、

グウウウ……

何これ？

でかい蛙っぽいのがかじりついていた。

キシヤアアア！

俺が左腕に注意を向けている隙にハンターβがまた飛び掛かってきた。

俺はでかい蛙がかじりついたままの左腕をハンターβに叩きつけた。

吹き飛ばハンターβと、叩きつけられた衝撃で俺の左腕から飛んでいくでかい蛙。

吹き飛んだハンターβが起き上がろうとしたので近くにあった待ち合い用の長椅子を叩きつけた。

ガンッ！

ついでにでかい蛙にも、

ガンッ！

体液と内臓を撒き散らして動かなくなるハンターβとでかい蛙、

4体目撃破、と。

今更だがこのでかい蛙、確かハンターγとかいうやつじゃなかったか

な？

まあ、どうでもいいか。

グシヤツ！

床に転がったハンターVを俺は踏み潰した。

これで11体目か。

どうでもいいけど何か数多くない？

ちょっと飽きてきたよ？

アイツら一気に纏まってくれば良いのに、何で一体ずつ来るのはかな、各個撃破されるのが落ちなのに。

まあ、ここの廊下があまり広くないから、一度に沢山これないってのもあるんだけどね。

キシヤアアア！

またハンターβが飛び掛ってくる。

ドカツ！

俺はそのハンターβを殴り飛ばした。

背骨をあり得ない角度に反らせながら吹き飛ばすハンターβ。

12体目撃破。

廊下の先を見るとまだまだハンターβやγがいる。

………何かめんどくさくなってきた。

俺は何かないかと辺りを見回す。

周りにはあるのは、俺が殺したハンターの死骸、ハンターの血がついた長椅子、あとは割りと大きめの消火器が2つ……

あ、良いもん見つけ。

俺は消火器を一つ掴むと　ハンターらが寄っている場所に、

ブンッ！

思い切り投げつけた。

消火器はハンターのいる手前の床にぶつかった。

別にハンターに当てようとした訳じゃない。

消火器は床にぶつかるとその衝撃に耐えきれず、

ドカアアアン！

破裂した。

辺りに消火材が舞う、中まだハンターらの鳴き声がした。

もう一発！

俺は消火器を再び投げる。

ドカアアアン！

辺りに凄い量の消火材が舞う。

俺は耳を澄ました。

だが、もうハンターの声はしなくなっていた。

21話 病院その3（後書き）

感想お待ちしています

22話

病院その4（前書き）

短めです

22話 病院その4

sideレベッカ

さつきから廊下で凄い音がしている。

その合間にハンターの鳴き声が聞こえる事から、カズサがハンターと戦っていることが分かった。

まあ、カズサならハンター程度では相手にもならないだろう。

何せ警察署の化け物はおろか、ゾンビの大群でさえ挽き肉にする力をカズサは持っているからだ。

私達が洋館で出会ったタイラントでさえコンクリートを木っ端微塵に砕く位の力を持っていた。

洋館のタイラントの改良型であろうカズサにだってそれくらいの力はあるだろう。

要するに心配はいらないということ。

警察署に来る途中出会った新型のタイラントにもカズサは負けなかったんだから多分大丈夫だろう。

「ここを、こうしてっと……」

幸いワクチンは材料もこの研究室にあったし、合成の方法もアキノが落とした紙に詳しく書いてあった。

ただ、合成に使う機械だけは私は一度も使った事が無かったが、少しいじってみると難なく使う事が出来た。

もうすぐワクチンの合成も終わりそうだ。

「よし、出来「ドカアアアン！」な、何!？」

突如廊下から爆発音が聞こえた。

ドカアアアン！

「キャッ!？」

更にもう一回爆発音が聞こえた。

それらはどちらも廊下から聞こえた。

カズサの身に何かあったの!？

私はさっき完成したばかりのワクチンを、ワクチンの材料を探す時に見つけた頑丈なケースに注射器や鎮痛剤と共に入れてバックパックに入れた。

そして急いで廊下に向かった。

ドアが歪んで開きにくかったが、体当たりをして無理矢理開けた。

ダンッ！

歪んだドアが開きそのままの勢いで放り出される私。

そして、

カズサに受け止められた。

side 上総君

俺がハンターを全て掃討した事を確認し終わると、

ダンッ！

急に研究室のドアが開き、レベッカが飛び出してきた。

レベッカがかなりの勢いで飛び出してきた、そのままだと床に転がりそうだったので、俺は慌てて受け止めた。

俺に受け止められたレベッカ、といっても抱き抱えている訳ではなく腕で支えているだけだが。

今思うとレベッカって小さいねえ、いや俺がでかいだけか、今の俺って滅茶苦茶巨漢だし。

俺がそう考えていると、体勢を直したレベッカが、

「凄い音が聞こえたけれど、何があったの？」

と、聞いてきた。

レベッカの顔には「とても心配です」と書いてある。

何か癒されるわゝ

さっきまでのスプラッタが嘘のようだぜ。

俺はそんなレベッカに癒されながら、

「消火器を破裂させた。」

と、消火剤が舞っている方を指差しながら答えた。

ちなみにバインダーとボールペンは壊れなかった、何故なら俺に届いた攻撃がハンターVに左腕をかぶり付かれたただけだったからだ。

「消火器を？」

レベッカは俺が指差した方を見ながら更に聞いてきた。

「ハンターの数が多かったから纏めて吹き飛ばした。」

俺がそう答えたときレベッカは安堵の表情になった。

というかレベッカよ、ワクチンは？

「ワクチンはどうなった？」

俺が聞くと、

「え？ ああ、出来たわ、ほら、これよ。」

レベッカはバックパックからケースを取りだし、中身を見せた。

中には注射器と茶色い瓶、多分鎮痛剤だろう、試験管っぽいのが入っている。

レベッカはワクチンを無事合成出来たようだ。

「じゃあ早く警察署に戻ろう。」

今は一秒でも惜しい。

そうレベッカに伝えると、

「ええ、じゃあ行きましょう。」

同意した。

早く警察署に戻らないと。

22話 病院その4（後書き）

感想お待ちします

23話 帰り道（前書き）

もうすぐバイオ2組が出る！

……かもしれない

23話 帰り道

sideレベッカ

どうやらあの爆発音はカズサがハンターを一掃する為に消火器を爆発させたものらしい。

何にせよ、カズサが無事で良かった。

まあ、カズサが無事でなくなる状況なんてなかなかないと思うけど。

私達はワクチンを手に入れる事が出来た。

後は警察署に戻るだけだ。

待ってて、マーヴィン、絶対助けるから…

カズサが屈んで背を向けている。

乗れ、という事なのだろう。

げ、またあの振動地獄を味あわないといけないの?……

はつきり言わせて貰うと私は、カズサに背負われるのがあまり好きではない。

別にカズサが嫌いな訳では無いが。

確かにカズサに運んでもらった方が普通に走るより遥かに速い、それは認める、けれど乗っている方はとんでもない負担がかかるのだ。落ちない様にしがみつかないといけないし、カズサが爆走した時には揺れが半端じゃ無いくらい揺れる、私は乗り物酔いはしない方だが、あれはきつい。

「どうかした？」

私が考え込んでいると、カズサが振り返って聞いてきた。

はあ、わかったわよ、あまり時間も無いし、現実逃避してる場合じゃ無いわね。

「何でもないわ、いきましょ。」

私は諦めてカズサの背中に乗った。

side上総君

レベッカから物凄い葛藤を感じたが何だったんだろうか？やっぱり俺の背中に乗るのが嫌なのかなあ、でも急がないとマーヴィン死んだら困るし、途中で何かに襲われたらレベッカの足じゃ振り切れないし、そこはレベッカに我慢してもらう事にしよう。

何かレベッカが背中に乗る時、溜め息が聞こえた様な気がした。

スマン、レベッカ。

病院の外には、来る途中に散々追いかけられたケルベロスらは居なくなっていた。

うむ、好都合で良い。

俺は急ぐため結構速めのスピードで走った。

背中から悲鳴が聞こえる気がするが多分気のせいだろう、いや、そうに違いない。

俺は走りながら、最初にレベッカを介抱した倉庫で見つけた腕時計

をみた。

普通の人間がゾンビになるまでの間は一時間、長く見積もって一時間半。残り時間は大体あと二十分くらい、か。

間に合うかな。

というか腕時計よく壊れなかったな、ネメシスと戦った時にも確か付けてた筈、俺のラリアットを耐えきったというのか？腕時計最強じゃん。

何か話がずれたが、マーヴィンが間に合うのか、というのは凄く不安だ。

マーヴィンをワクチンでなら助けられると言った言い出しっぺが何を言うのか、と言われるかもしれないが、助かるといっても100%助かるという訳では無いし、このまますんなりと警察署に戻るかもわからない。

失敗する要素は無い訳じゃ無い。

俺やレベッカが如何に尽力しようとも不安なのは不安なのだ。

だからこそ急がないといけなかった。

改めてスマン、レベッカよ。

俺は警察署までの道程を疾走して行った。

残り時間は後十五分。

ようやく警察署が見えてきた、といっても俺の驚異的な視力で遠くに見えたただだからまだまだ遠い、でも脚力も驚異的だから遠くてもそう時間は掛からない筈だ。

そう俺が思い、心持ちスピードを上げようとした時だった。

何かが飛んできた。

それは細長い形に一方からオレンジ色の炎が噴き出している。

それがロケットランチャーだと気付くのに、俺は一秒も掛からなかった。

ロケットランチャーは俺達に向かって真っ直ぐに飛んでくる。

俺は即座に左に進路を変えロケットランチャーの着弾地点から離れた。

ドカアアアン！！！！

ロケットランチャーの爆発によって道路に大穴があく。

レベツカが爆風でむせる。

俺は視界の端にもい一発のロケットランチャーが飛んでくるのを捉えた。

俺は前に大きく跳躍する事で二発目のロケットランチャーを避けた。

ドカアアアン！！！！

爆発音が辺りに響く。

だが、それを打ち消すように、

スタアアアアアズ！！！！

血を求める怒声が響いた。

そろそろ来るとは思ってたけど何でこんな時に来るんだよ、タイミング悪すぎるぞ、ネメシスよ。

警察署までは、まだ近いとは言えない位の距離がある、かといって

このまま戦ったとしても、いくらレベッカがいるとはいえ十分かそこらではネメシスを倒す事は無理だろう。

俺がどうするべきか、一瞬迷った時だった。

「カズサ、私を降ろして、私はこのまま警察署に行くわ。」

レベッカが言った。

俺が振り返るとレベッカは、

「別に貴方を見殺しにする訳じゃ無いわ、マーヴィンにワクチンを投与したら私は直ぐ戻って来るから、それで良いわよね？」

と、さらに言った。

俺は直ぐ様首を縦に振った。

いくら危機的状況でもレベッカは嘘をつかないだろう、何せレベッカは、タイラントである俺を心配して扉を体当たりで破る様な人間だ、嘘をつく筈が無い。

俺から飛び降りて警察署にむかって走るレベッカを背に俺はネメシスに向き直った。

ネメシスは俺から割りと離れた建物の屋根に居た。

俺が向き直ると同時に、

スタアアアアアズ！！！！

ネメシスが叫ぶ。

それじゃあ、第二回戦を初めようか。

俺は地面を強く蹴り、駆け出した。

23話 帰り道（後書き）

感想お待ちしています。

24話 帰り道その2 (前書き)

T H E、中途半端

24話 帰り道その2

side上総君

ネメシスがロケットランチャーを撃ってきた。

ネメシスの居る建物にダッシュで接近していた俺は、大きく跳躍する事でそれを避けた。

ドカアアアン！

轟音と共に爆発の衝撃が地面を抉る。

だが、俺は既にその爆発の爆風が及ぶ範囲から離れていた。

正直ネメシスの持つてる武器がロケットランチャーだけで良かった。

俺のこのタイラントになって素晴らしく向上した動体視力だと、飛んでくるロケットランチャーがバッチリ見える、だから簡単に避けるなり防ぐなり対処が出来た。

もし持つてるのが大口径の大型マシンガンや小型の対戦車砲だったら、俺はネメシスに近づく事すら出来ないと思う。

いくらロケットランチャーが強力でも当たらなければ意味は無いのだ、まあ、逆に言うとうたれば目も当てられない事になる、という事だか。

更にロケットランチャーを撃つネメシス。

それを避けながら確実にネメシスに近づく俺。

避けきれなかった爆風で少しコートが焦げたが、今はそんな事は気にしない。

ネメシスとの距離が数メートルまで迫った。

ネメシスが乗っている建物は小さな倉庫みたいな感じでそこまで大きく無い。

俺は猛ダッシュの勢いそのままにジャンプした。

幸い、ネメシスはいさつきロケットランチャーを撃ったばかりで対応が出来てない。

俺はネメシスの顔に全力で拳を叩きつけた。

いくらネメシスとはいえ、ダッシュの勢いとタイラントである俺の全力の力が合わさったパンチに耐えきれず、建物の屋根から吹っ飛んだ。

まあ、俺も屋根に乘ろうとしたんだけどバランス崩して落ちたけどね。

落ちるで途中身を捻り着地する俺と、そのまま落下して地面に激突するネメシス。

だが、無論それくらいでくたばる筈も無く平然とネメシスは起き上がった。

俺は直ぐに身構えた。

ネメシスは唸り声を上げる。

その叫びはまるで獣が獲物を求める様な感じだ。

ネメシスの叫びが終わると同時に俺とネメシスは同時に駆け出した。

s i d e レベッカ

もうすぐ、もうすぐだ。

私は、ほんの数週間前まで使っていたデスクへのドアを勢いよく開けた。

「レベッカ！ワクチンはあったの？」

ジルが問う。

「ちゃんとありました！マーヴィンの様子はどうですか？」

「俺か？…気分は……最悪だな……」

マーヴィンは弱々しく答えた。

「急いでワクチンを投与しましょう、彼の様子からしてあまり時間がありません。」

「ええ、そうして。」

私は急いで投与の準備をした。

私のSTARSでの役割はRS（リア・セキュリティ、主に監視や狙撃を担当、負傷者が出た場合にはその治療にあたる）だ、こういう事は手慣れていた。

私がマーヴィンにワクチンを打とうとすると、彼は、

「注射は嫌いなんだ……」

と、言った。

私は、

「大丈夫です、直ぐに終わりますから、それにゾンビなるよりかはましでしょう？」

となだめた。

彼は苦笑し、ジルは微笑した。

私はマーヴィンにワクチンを投与した。

これで彼は救われる。

ワクチンを打つとマーヴィンは眠り込んでしまった。

初めは少し心配したが、ちゃんと息もしてるし顔色も良くなっていった。

私が彼の顔を覗き込んでみると、ジルに声をかけられた。

「ちゃんとワクチンが効いてるのね。」

「ええ。」

「そういえばカズサはどうしたの？」

「……ああッ！忘れてた！」

マーヴィンが助かったという安堵ですっかり忘れてしまっていた。

ああ、急がないと！

私があたふたと武器の準備をしていると、

「レベッカ？どうしたの？」

再びジルに聞かれた。

「カズサは今戦ってるんです！ここに来る途中に襲ってきた化け物と！ああ、どうしよう直ぐに戻るって約束したのに！」

私は答えながら直ぐ様ドアから出ようとした。

が、

「まって。」

ジルに呼び止められた。

「すみませんけど用なら後にして下さい！今は急がなきゃならないです！」

「私も行くわ。」

ジルはショットガンを手にとって言った。

「ワクチンの事を教えてくれたお礼よ、私も行くわ。」

「マーヴィンはどうするんですか？」

「ドアに鍵を掛ければいいわ、さっきウェスカーのデスクから見つけたの。」

そう言って鍵をひらひらとして見せるジル。

「……わかりました、じゃあ急いで行きましょう！」

私達は急いでカズサが戦っているであろう場所に向かった。

side?????

俺は動かなくなったアキノの死体を投げ捨てた。

ラクーンに来る前に研いでおいたナイフの切れ味はとても素晴らしかった。

アキノもその事にさぞや感謝したことだろう。

この街に降り立ったとたんゾンビの襲撃を受け自分の率いる小隊はおろか、部隊自体が壊滅してしまった、だが、こうして早々と監視員の一人葬る事が出来たのは幸運だった。

何故病院に居る筈のアキノが病院から離れたこの場所に居るのかはわからなかったが。

今やラクーンシティは死の街だが、俺にとっては金の街だ、何せ俺は後数人の監視員を殺せば大金持ちなのだ。

それにまだこの街にSTARSが居るのなら、そいつらを消せばアンブレラはもっと金を積むだろう。

出発前のミーティング前にアンブレラからトラブルがあったと連絡を受けたが、それは俺にとって大した問題じゃ無かった。

俺は込み上げてきた笑いを堪えきれなかった。

24話 帰り道その2（後書き）

感想お待ちします

25話

帰り道その3 (前書き)

長めです

25話 帰り道その3

side上総君

俺は、ネメシスの拳を抑え、脇腹へ蹴りを放つ。

ネメシスは俺の肘をつかんで触手で俺を突き刺す。

お互いに攻撃を決めると俺はバックステップで距離を取った。

同じ様にネメシスも距離を取る。

俺とネメシスの間が開いたところで、ネメシスはロケットランチャーを撃ってきた。

銃弾と違い飛翔する速度が遅い（といっても普通の人間には充分速い）ロケットランチャーを避けるのは対して難しく無い。

俺は高速で横にダッシュする事でそれを避けた。

そしてダッシュの勢いそのままにネメシスに突進する。

俺の体当たりを受け俺もろとも吹き飛び、近くの建物の壁を粉碎するネメシスと俺。

だが、そんな事で終わる筈も無くネメシスは素早く起き上がった。

少し距離が開いている、俺はネメシスにロケットランチャーを撃たせないためダッシュで急接近し掴み掛かる。

殴り合いをしてるのも少し飽きてきたな、いくら殴り合っても痛覚が抑えられてるのかあんまり痛く無いし。

少し趣向を変えよう。

俺はネメシスに掴まれ触手での攻撃を受けるのを覚悟でネメシスの肘と胸元を掴んだ。

当然ネメシスも俺を掴んでくる。

肩に何かで刺された様な痛みが襲ってくるが、今は無視だ。

俺はネメシスの掴んだ肘と胸元を思い切りつり上げると同時に、右足でネメシスの右足を払った。

バランスを崩して勢い良く転倒するネメシス。

見たかネメシス、これこそがニッポンの心、柔道だ！

いやあ、やってみるもんだねえ。

さっき心がどうのとか言ってたが、俺が実際柔道をやったのは中学と高校の体育の授業だけだったりする。

熱血とは程遠い俺は、体育の授業なんざそこまで真面目に聞いているが、とりあえずやり方は覚えていた。

まあ、体育が嫌いな訳では無いがさっきも言った通り俺は熱血とは程遠いし、何しろ自分でも分かるくらい飽きっぽい性格なのだ。

そんなチャランポランな俺がやたらと熱い体育教師の方々と仲良くなる訳が無いのだ。

うろ覚えだったが、大外刈、うまく決まったよ。

ネメシスは受け身を取らなかったせいだと思いつきり頭を強打している。

俺はラッシュを掛けるべく転倒しているネメシスに馬乗りになり、ひたすら拳を振るった。

次々とネメシスに拳を叩き込む俺。

痛みに悶えているのか分からないが、低い唸り声を上げるネメシス。

ふと思った。

あれ？何か結局殴ってない、俺。

趣向を変えたつもりだったが柔道で調子乗ってる内に忘れてしまったみたいだ。

俺とした事が、不覚。

ま、別にいいや、こうやってタコ殴りに出来た事だし。

俺はネメシスに両手の拳を振り上げ、渾身の一撃を放とうとした。

だが、

ガシッ！

ネメシスに受け止められた。

それめ片手で。

な、さっきまで殴られるままだったのに、何処にそんな力が！

更にネメシスは、俺の拳を受け止めたて無い方の手を俺に突きだした。

刹那、俺の腹部に鋭い痛みが襲った。

痛覚が抑えられてる分、そう痛くは無いが、痛みや衝撃が今までの比じゃ無かった。

俺は視線を下げた。

ネメシスの腕とコートの間から無数の触手が出ていて、それらは俺に突き刺さっていた。

今までネメシスの触手攻撃を何回も受けてきたが、これは規模が違った。

俺の力が緩んだのか、ネメシスは俺の拳を払い、

ドカッ！

俺の顎にアッパーを放った。

拳を振り払われた俺は何も対応が出来なかった。

俺は背後の壁を突き破りながら吹き飛んだ。地面に落ちてもゴロゴロと転がり中々勢いは止まらない。

さっきのアップパーのせいかな、壁を突き破った時に頭を打ったのか分からぬが、意識が薄れてきた。

あー、ヤバイ、これはヤバイ。

でも体は動かない。

最後に見たのは勝利の雄叫びを上げるネメシスの姿だった。

俺、終わったな……

そこで意識が途絶えた。

sideレベッカ

カズサと化け物が争っている証であろう爆音を辿っていると、

ドカアアア……

突然近くの建物を突き破ってカズサが吹き飛んできた。

「カズサ！」

「待って、あれを見て！」

私がカズサに駆け寄ろうとするのを止め、ジルが言った。

ジルはカズサが飛んできた方を示している。

そこには

スタアアアアアズ……！！

カズサを負かし、勝利の雄叫びを上げる化け物がいた。

私は無意識の内にサブマシンガンをその化け物に向かって撃っていた。

よくもカズサを！………

サブマシンガン特有の高い発射音が鳴り響いた。

「何なのよあれ！」

ジルが叫ぶ。

「警察署に来る前に襲ってきた化け物ですよ！間違い無く敵です！」

私が答えるより速く、ジルのショットガンが火を吹いた。

化け物に弾丸の嵐が降り注ぐ。

だが化け物は、それをものともせず、ロケットランチャーを構えた。

私は化け物の馬鹿みたいに大きいロケットランチャーに狙いを着けた。

ロケットランチャー目掛けて放たれる銃弾。

その内の一つが、奇跡を起こした。

ドカアアアン！！！！

ロケットランチャーの発射口に飛び込んだ弾丸は、今まさに発射されようとするロケットランチャーを爆発させた。

爆風に包まれる化け物。

思わず顔を覆った。

爆発によって出来た煙が晴れると、

方膝をつく化け物がいた。

化け物の右手は爆発によって肘から先が吹き飛んでいて、右半身のコートはズタズタに破れていた。

化け物が唸り声を上げながら起き上がった。

私達は武器を化け物に向けたが、化け物は右半身を庇いながら後ろの屋根に飛び乗り逃げてしまった。

化け物が去ったら後には銃を構えたままの私達と地面に横たわるカズサ、そして静寂だけが残った。

どれくらい時間が経っただろうか、

「ちょっと良い？……カズサの事だけど……」

ジルが問う。

「わかってます。」

カズサの腹には穴が空いていて、ぴくりとも動かない。

もうわかっている。

カズサはもう居ない。

「私達だけでも生き残らないと。」

しばらく沈黙が場を支配し、

「ええ、そうね。」

ジルが言った。

私達はその場を去った。

生物兵器だが、人間の心を持ったあのタイラントはもう居ない。

25話 帰り道その3（後書き）

感想お待ちします

26話 出会い（前書き）

副題って考えるの大変

26話 出会い

side???

「クソッ!どうなってんだ!」

思わず悪態をつく。

本当に今日は最高にアンラッキーな日だ。

初勤務に大幅に遅刻し、急いで来てみたら勤務場所が地獄になっていた。

街一つがゾンビの巣窟になっているなんて予想もしなかった。

多分予想出来る奴なんて居ないと思うが。

アア……

考えている内にもゾンビは迫ってくる。

俺は自前のデザートイーグルをゾンビに向かって撃った。

射撃は割りと得意だったから弾丸は真っ直ぐにゾンビの頭に当たった。

弾丸はゾンビの腐った頭を、床に落としたスイカの様に吹き飛ばした。

頭部を失った腐った体が地面に倒れ伏す。

その屍を踏み越えて更にゾンビが迫ってくる、その数は数えるのが面倒なくらい膨大だ。

ダメだ、弾が足りない。

装填されてる弾が四発、後は七発入りのマガジンがフルで四つだ。

一体や二体なら充分だが、無数のゾンビに対しては火事を水鉄砲で消そうとするくらい無力だ。

ゾンビは動きは鈍いが確実に、正確に追いかけてくる。

クソッ！落ち着け、俺は警察官なんだぞ！

背後にいる若い女性を助けるためにも、俺が何とかしなきゃならないんだぞ！

俺は、何かこの場を切り抜けられるものはないかと辺りを見回した。

周りはゾンビと、恐らくバリケードに使われたであろう車しか無い。

もっと良く探すんだ！

自分に言い聞かせる。

もう一度辺りを必死に見回した。

パトカーだ！パトカーがある。

考えている暇は無い。

あれが多分この場を切り抜ける唯一のチャンスだろう。

「あれだ！あのパトカーだ。」

背後に居る女性に向かって叫びながら走る。

女性は頷きながらパトカーに向かって走った。

幸いパトカーにはキーが付いたままだった。

俺は女性を乗せると直ぐ様アクセルを踏んだ。

パトカーに乗ってからお互いに無言だ。

まあ、こんなん状態で楽しくお喋りしようって方が無理なんだろうが。

どう話題を振ろうかと俺が考えていると、

「クレア」

唐突に女性が呟いた。

「クレア・レッドフィールドよ、貴方は？」

「あ、ああ、俺はレオン、レオン・ケネディだ。」

「貴方は警察官よね？」

更に女性、クレアが聞いてくる。

「ああ、そうだ。」

「なら、何か知らない？例えば何でゾンビがいるのかとか。」

思わず溜め息を付いた。

「今日配属される筈だったんだ。」

そう言ってクレアに辞令の紙を見せた。

「そう、じゃあクリスの事も知らないわね。」

彼女は溜め息をつき、そう言った。

「クリス？」

「私の兄よ、探してるの。」

「お兄さんは何かしたのか？」

俺が聞くと彼女は険しい顔付きになって説明してくれた。

どうやら彼女の兄はS T A R Sで数週間前に活動停止を受けた後、連絡が取れなくなっているらしい。

彼女は兄を探しにこの街に来たらしい。

「兄を探したいの、手伝ってくれない？」

彼女は懇願してきた。

確かに俺は街の平和を守る警察官だ、

だが、無数のゾンビを蹴散らせるほど俺は強く無い。

けれど困っている女性を放っておける程、冷血漢じゃ無い。

「わかった。」

「ありがとう。」

そう言って彼女は微笑んだ。

彼女にも何か武器が必要だ。

幸いこの車はパトカーだから何かしらあるだろう。

「クレア、すまないがダッシュボードを見てくれないか。」

彼女はダッシュボードを開ける。

そこにはラクーン警察で支給されるハンドガンが入っていた。

「銃があるわ。」

俺が、君のだ、と言おうとした時だった。

「前！何かあるわ！」

クレアが叫ぶ。

ほんの数メートル先にライトで照らされ人形がある、この距離では避けきれそうになかった。

ああ、不味い！

「掴まれ！」

刹那、

ガン！

とんでもなく大きい衝撃が襲ってきた。

side上総君

目が覚めた。

自分の部屋じゃ無かったし、自分の布団ですら無かった。

ここどこ？

いや、混乱するんじゃない、落ち着くんだけ俺。
深呼吸、深呼吸。

すーはー

すーはー

すーはー

よし、落ち着いたぞ、うん落ち着いたんだ、落ち着いた落ち着いた。

異論は認めない、俺は落ち着いたんだ、そういう事にしよう。

と、とにかく周りの状況を確認しよう。

俺は辺りを見回した。

道路だった。

しかもやたら瓦礫とかが散乱してる。

俺はそこに寝転がっているようだ。

よし、全く意味がわからない。

何故に道路で大の字になって寝てるのか？

俺の頭にクエスチョンマークが山程浮かんでる時だった。

散乱した瓦礫の中に紙を留めてあるバインダーを見つけた。

その紙に、

ワクチンを使えばマーヴィンを助けられる。

という一文が見えた。

英語だったがすんなり読めた。

あ、

頭の中で全てが結び付いた。

全部思い出した。

そうか、ネメシスとやり合って殺られちゃったんだったな。

その時、視界の端にライトが映った様な気がした。

残念ながらその時俺は寝起きで頭があまり回らず対応が遅れた。

ガン！

衝撃と共に吹き飛ぶ俺。

な、何じゃ！？

ゴロゴロと道路を転がる俺。

幸い、体重が重い俺は直ぐに勢いが止まった。

俺は直ぐ様起き上がり、辺りを見回す。

パトカーが一台、歩道に突っ込んで止まっていた。

あれか、

俺はバインダーを拾いに行った。

中に乗ってる奴とコミュニケーションを取るなら喋ることが出来ない絶対必要だし、今はレベッカ達がいらないからすべて自分で俺が危なく無い奴だと説明しないといけない。

俺はバインダーを拾い上げた。

それと同時にパトカーのドアが開いた。

そこから出てきたのは若い男の警察官だった。

服装は、警察官の制服にRPDとかかかれている。

髪は茶髪だった。

もう片方のドアが開いた。

降りてきたのは赤毛でポニーテールの赤いジャケットを着たこれまた若い女性だった。

「クレア、大丈夫か？」

男の方が聞く。

「少し頭を打ったけど、何とか大丈夫だわ。」

女の方が頭を抑えながら答えた。

「レオン、貴方は？」

「何とかな。」

おお、遂に来ましたか、レオン&クレアのバイオ2組の方々！

これは絶対にお近づきにならねば。

俺はバインダーを持ち、二人のいる所に歩き出した。

26話 出会い（後書き）

やっと出せた…長かった…

感想お待ちしております

27話 第二回お近づき作戦（前書き）

ラクーンシティから抜け出せてないのに、もう27話……

バイオ5まで一体何話掛かるんだろう。

いや、ちゃんと続けますけどね。

27話 第二回お近づき作戦

sideクレア

信じられなかった。

いや、信じたく無かった。

兄の居る街がこんなことになっているだなんて。

私は今、レオンという若い警察官と共にラクーンシティという地獄にいる。

ラクーンに着いて早々、ゾンビに襲われた私を彼は助けてくれた。

最初、彼の警官服を見てクリスの事を何か知ってるかもしれないと思ったが、残念ながら彼は今日ラクーンに配属されたく事情は何も知らない様だった。

でも、彼は兄を探すのを手伝うと言ってくれた。

どうにかしてクリスを、最悪無事だけでも確認したかった。

キキィー！

甲高いブレーキ響く。

ライトに浮かび上がった人形は動く素振りが無かった。

「掴まれ！」

レオンが怒鳴った。

その瞬間、

凄まじい衝撃が体を突き抜けた。

「最悪……」

大破したパトカーの中で思わず悪態を付いた。

結局、人形は避けられなかった。

「とりあえず出よう…」

レオンが言う。

そうね、爆発する前に出なくちゃね。

ドアは衝撃で湾曲し、開きにくかったが、足で蹴り開けて何とかパトカーから這い出た。

「クレア、大丈夫か？」

私と同じ様に這い出たレオンが聞いてきた。

「少し頭を打ったけど、何とか大丈夫だわ。」

シートベルトがあっただとはいえ、本当はかなり痛かったがそれは彼も同じの筈だ。

私だけが我が儘を言う訳にはいかなかい。

見ればレオンも頭を押さえていた。

「レオン、貴方は？」

私もレオンに声をかけた。

「何とかな。」

レオンが頭を押さえながら答えた。

どうやら彼も私と同じような状態らしい。

ホント、幸先良いわね、最高だわ。

「クソッ……」

レオンが大破したパトカーを見て毒づく。

「奇遇ね、私も同じ意見だわ。」

レオンは苦笑しながら答えた。

「俺は警察署に行こうと思うんだけど、どうかな？」

「賛成だわ。」

私は即答した。

少しでも兄の足跡を追いたい、そんな思いからだった。

「それじゃ行こう、確か警察署は此方だったと思う。」

「あら貴方、ラクーンに今日配属されたんじゃない無かったんだっけ？」

彼は微笑して答えた。

「ラクーンに来たのは初めて来た訳じゃ無いんだ、何回か下見に来たことがあるんだ。」

「配属場所に下見？」

「アパートの契約とかさ、後自分が守る街を知っておきたかったのさ。」

「ああ、そう言うことね。」

私達がいかにも場にそぐわない談笑していた時だった。

パーー！！！！

激しいクラクションの音が鳴り響いた。

私とレオンは揃ってクラクションのした音の方向を見た。

「ああ、なんてこと！」

思わず悲鳴の様な声をあげてしまった。

大型トレーラーが猛スピードを出し、しかし酒気帯び運転の様にふらつきながらこちらに走ってくる。

ここは両側を建物が建ち並んでいるいて曲がり角や側道といった逃げ道が無い。

正に絶体絶命だった。

パーー！！！！

クラクションが再び鳴り響いた。

s i d e 上総君

パー！！！

そう言えばこんな展開だったね。

バイオ2の最初ムービーでパトカーが事故った後、トレーラーが突っ込んでくるんだだったね。

ギリギリでパトカーから待避するんだけどトレーラーが爆発、それでレオンとクレアが別行動になるんだ。

ブルルル！！！！

トレーラーかエンジン音の聞こえる距離まで近付いていた。

この近くに逃げられる場所はない。

唯一例外として、俺がネメシスに殴り飛ばされて開けた穴があるが、それはトレーラーが走ってくる方向にあった。

多分そこに向かう前にトレーラーに跳ねられるだろうな。

レオンとクレアはどうすることも出来ず、狼狽えるばかりだった。

ちなみに俺にも気付いて無いです、ハイ。

確かにこのコートって暗緑色だから見えにくいんだけどね。

言い忘れてたが、今はとつぷりと日が暮れて夜になっている。

どうやら俺が回復する為に寝込んでいた時間が長かった為、日が暮れた様だった。

ネメシスから受けたダメージは意外と大きかったらしい。

更にトレーラーが近付いてくる。

少し考え過ぎたみたいだな。

俺は駆け出し、

「な、なんだ！」

「キャアッ！」

レオンとクレアを抱えて思い切り飛んだ。

保険として途中壁を蹴り、更に高く飛んだ。

ほんの少し前まで俺やレオン、クレアが居た場所をトレーラーが猛スピードで通りすぎていった。

静かに惰性で落下する俺＋レオンとクレア。

俺は彼らに負担をかけない様に途中壁を蹴りつつ地面に降りた。

地面に降りると同時にレオンとクレアをおろした。

「……………」

「……………」

ザ・沈黙。

何か喋ろうや。

俺がバインダーの紙にこの雰囲気を開く為の何かを書こうとした時、

「「あんた誰？」」

レオン、クレア両名とも声を揃えて言った。

シンクロ率百パーセントだな。

27話 第二回お近づき作戦（後書き）

感想お待ちします

28話 第二回お近づき作戦その2（前書き）

最後にお知らせがあります。

28話 第二回お近づき作戦その2

side上総君

銃を向けないまでも、もっそいこちらを警戒するレオンとクレア。

二人に共手にはハンドガンを、って何故にレオンはデザートイーグル？あれ？バイオの初期武器って全部ハンドガンじゃ無かったんだっけ？

何でレオンはいきなりマグナムとか装備してんのよ。

俺が考えている間も二人は俺を警戒したままだ。

しゃあない。

「俺の名はカズサ、君らは？」

ここはオーソドックスに自己紹介というこ。

警戒をとくためにはこちらから名乗らないとね。

「……レオンだ。」

「私はクレアよ。」

怪訝な顔をしつつ答える二人。

「助けてくれた事は礼を言う、ありがとう。」

レオンが言った。

いや、いいって事よ。

「だが、あんたは一体何なんだ？」

むう、いきなりそれ聞いちゃいますか、レオンさん。

俺的にはもうちょっとフレンドリーになったところで、「実は、俺人間じゃ無いんだ。」「いや、わかってたさ。」みたいな展開を期待していたんだが、まあ、聞かれたからには仕方がない。

考え込む俺を見てクレアが言った。

「気を悪くしないで。」

クレア、あんたイイ人だ。

「何て言うかその、貴方は、ええと人間とは少し離れた姿をしてるから……」

でも何か必死なのが伝わってくるぞ。

大丈夫だって君らには危害は加えないから。

怒って暴れたりなんかしないから。

うーん、しかし人間じゃ無いと思われている以上、ここで人間です、って言っても信じてもらえないだろうし、どうしようかな？

仕方ないか、この二人には多分長く付き合う事になるだろうし、ホントの事を伝えよう。

俺はバインダーの紙に、

「俺は生物兵器だ。」

と、書いたのを二人に見せた。

「生物兵器？」

レオンがそれを声を出して呼んだ。

「どういう事なの？」

クレアが聞いてくる。

ま、ここはありのまま話すしかないだろうさ。

「俺はアンブレラ社の製品だ、製品名はT103、人間をベースにした生物兵器だ。」

「な、ちょっとまで、人間をベースにした生物兵器だって！？じゃあお前には人間が使われているのか！？」

レオンが興奮した様にした。

まあ、レオンは警察官になるほど正義感が強いから、こういう話は許せないんだろうね。

「俺の様なTシリーズは人間と特殊なウィルスを融合する事で作られている、もっとも、俺に使われた人間というのはウィルス適合者のクローンだが。」

いやあ、ここで最初の研究員ズの会話が役に立つとは思わなかったよ。

確かセルゲイ・ウラジミール大佐のクローンだった筈だ。

……そう言えばセルゲイってド変態だったな、痛みは神の贈り物だ、とか言ってたし、そんな奴のクローンが使われたとかちよつとショック。

「アンブレラ社が貴方を作ったの？」

その通りの意味を込めて俺は首を縦に振る。

「さっき言ってた特殊なウィルスって何なの？」

お、クレアは冴えてるね。

あ、いや、レオンが冴えてる無いつていう意味じゃ無いからね、今レオンはなんかショックで項垂れてるし、まともな反応が出来る状態じゃ無いからね。

「ラクーンを地獄に変えた元凶だ、このウィルスに感染すると二時間もかからない内に人はゾンビになる、この街の地下研究所からウィルスが漏れたんだ。」

「じゃあアンブレラが元凶なんだな？」

お、レオン復活したね。

まあ、その通りだね。

「1つ気になるんだが。」

何ねレオン。

「生物兵器って全部お前みたいな意思があるのか？それだったら兵器として成り立たないんじゃないのか？」

「俺は完全なイレギュラーだ、何故俺に自我があるのかはわからない。他の生物兵器には知能はあっても自我は無いだろう。後お前じゃ無くてカズサね、呼ぶんなら名前で。」

だってさっきからお前お前って言われるんだもん。

ちゃんと名前で呼んでくれないとお兄さん悲しいわあ。

……よく考えたらバイオキャラクターの中では俺って年下の方じゃん。

「おま、じゃなくてカズサ、何でここにいるんだ？」

「アンブレラが証拠を回収する時間を稼ぐ為、軍や警察組織を妨害する為に派遣された、勿論妨害なんて事はしてないが。」

だってラクーンに來た時から自由だったもんね。

「何で俺やクレアを助けたんだ？」

愚問だな、レオン。

「困ってる人間を助けるのに理由がいるのか？」

黙り込むレオン。

「ね、ねえ。」

クレアがおずおずと聞いてくる。

こう見るとクレアも中々美人だな。

はい、すいません真面目にやります。

「貴方は私達より先にこの街に来たのよね？」

まあそうだね。

俺は首を縦に振る。

「じゃあクリスって人に会わなかった？私の兄なんだけど……」

クレアが期待半分、心配半分の表情で言った。

カー！クリス！この幸せ者め、今のクレアの表情みたか？どんだけ可愛かったと思ってやがる！庇護欲とか、いろいろ刺激されたぞ！

俺が悶えていると、

「カズサ……？」

あ、ゴメンゴメン。

クリスの話だったね。

「クリスは、君の兄はこの街には居ない。」

「じゃあ何処にいるの！教えて！」

クレアが掴みかからんばかりの勢いで聞いてくる。

おおう、クレアさんそんなに迫って来なくても。

顔が近すぎますぜ。

「いまはヨーロッパにいる。」

「そう、良かった……」

安堵の表情を浮かべるクレア。

「カズサ、何でそんな事を知ってるんだ？」

レオンが問う。

「生き残ったSTARSに出会った時に聞いた。」

そう言えばレベツカらは何処に行ったんだか、出来るだけ速く合流しないといけないな。

「そうか……」

考え込むレオン。

「カズサ、1つ頼みがある。」

なんでしょ？

「この街から脱出するのを手伝って欲しい。」

なんだ、そんな事か、

俺は首を縦に振った。

「ありがとう。」

そう言って右手を出すレオン、

握手って事かな？

俺はレオンの手を力を調節して握った。

「これからよろしく。」

こちらこそ。

28話 第二回お近づき作戦その2（後書き）

お知らせ

新連載の原案を募集します、詳しくは活動報告まで。

ここからはいつも通り

作中で出てきたデザートイーグルについてですが、分類上ハンドガンなのですが、使用する弾丸が強力なためこの作品ではマグナムとします。

感想お待ちしております

29話

行動中（前書き）

短めです

29話 行動中

side上総君

とりあえず武器の補充をしたい。

今の二人の装備が心細すぎる。

レオンはマグナムを持っていてまだましだが、クレアはハンドガンしか持っていない。

それに多分予備弾薬はあんまり持ってないだろうし。

レベッカからもそうだったが、ハンドガンではゾンビくらいにしか有効に使えない。

ハンターやリッカーに対しては明らかに火力不足だ。

あ、でも確かバイオ2じゃハンターは出てこないんだっけ、まあでも用心するにこした事はない。

「まず武器の補充をしよう。」

そう書いた紙を二人に見せる。

「賛成だ。」

「賛成だわ。」

二人とも即座に賛成した。

「俺の記憶が間違ってたかったら、ケンド銃砲店って店が近くにある筈だ、そこへ行こう。」

レオンが提案した。

あれ？何でレオンがそんな事知ってるの？

レオンでラクーンに今日配属されたんじゃないかなったっけ？

「それは確かなの？」

クレアが聞いた。

「ああ、前に下見に来た時、案内してくれた奴から教えてもらったんだ、品揃えは良い店だった。」

レオンは答えた。

何だか凄いご都合主義の匂いがしてきたぞ、大丈夫か？変なところでストーリー変わんない？

「それじゃ行きましょう。」

「ああ、あまりゆっくりしてる時間も無さそうだしな。」

レオンが顔を俺達とは違う方をむけて言った。

見ればゾンビが数体こちらに向かって来ていた。

ゆっくりと、だが確実に迫るゾンビ。

「確かに速く行った方が良さそうね。」

その言葉をクレアが言うと同時に二人とも駆け出した。

え、ちょ、まってよ。

俺を置いていくな、つかその道であってんのか？

ゾンビがいる道の方が近いんなら俺が片付けるぞ？

そう伝えたいが紙に書く暇が無い。

その間も二人はすたすた行ってしまうている。

仕方なく俺は二人について行った。

その後、ゾンビから逃げた俺達は大通路に入り、ここからはレオンが道を覚えているらしく、レオンの案内でケンド銃砲店に向かっていた。

途中、バリケードが有ったが俺がどかした。

邪魔な車を蹴り飛ばして振り返った時に、二人から溜め息が聞こえた気がするがきつと気のせいだろう、うん気のせい気のせい。

クレアなんか顔がひきつっていた様な気がするが気のせい気のせい。

ほら、どうした？もっと明るく行こうぜ。

溜め息つくくなって。

無事ケンド銃砲店にたどり着きました。

今俺達はケンド銃砲店の前にいます。

レオン、クレアともに無事です。

何たってタイラントである俺が護衛してるんだから当たり前さ！

……なんだろう？さつきからテンションがおかしい。何故俺はこんなにハイテンションなんだろう？

俺がハイテンションになるのは二つパターンがある、一つは欲しか

った物が手に入った時などの非常に嬉しい時、もう一つは勉強で頭が煮詰まっている時や一夜漬けた時等だ。

だが今はその二つのどちらにも当てはまらない。

ドアの開く音がした。

俺が考え込んでいる間にレオンらは店の中に入って行った様だった。

本当に君らは放置プレイが特異だね。

俺も中には行った。

入るときちよつとドアが小さくて蝶番のそこからバキッて音がしたのは内緒だぜ？

中は結構きれいだった。

商品棚にはきちんと銃が並び、床には埃一つ落ちてない。

だが、カウンターに居るべきである店主の姿は無かった。

「誰も居ないわね。」

クレアが呟く。

「なんだか不気味だわ。」

確かに荒れきった外とは対称的で少し気味が悪かった。

「この街に不気味じゃ無い場所なんてもう無いさ。」

クレアの呟きにたいしてレオンが答えた。

なんか暗いぞお前ら。

「武器や弾薬を探そう、ここも完全に安全な訳じゃ無い。」

俺は紙に書いて伝えた。

「そうだな、手早くやろう。」

レオンとクレアは頷いた。

ここに俺でも使える銃があると良いなあ。

29話 行動中（後書き）

活動報告で募集している原案についてですが、たくさんのご意見が集まって来て非常に有難いです。

しかし残念ながら皆さんに出して頂く原案を、作者が知らない場合が多いようです。

作者はあまり漫画やアニメを見ないんです、意見出して頂いた方、ごめんなさい。

募集の方はまだ受け付けているのでじゃんじゃん送って下さい。

感想お待ちしております

30話 違い過ぎる(前書き)

やっぱり、やらなくちゃな……………

30話 違い過ぎる

side 研究員ズ

「ハア……………」

「んな溜め息ついて、そんなに落ち込むなって。」

「ハア……………」

「幹部様もお咎め無しって言ってたんだからさ、ほら、あんまり気にすんなよ。」

「無理だ……………」

「何でそんなに落ち込んでんだよ。」

「……初めてあんなに口汚く人を罵った。」

「あんなの普通だろ、まあ確かにお前にしちゃ結構過激な感じだったが。」

落ち込む彼の方に手をおいた。

「あれは何処からどう見ても無茶言ってた幹部様が悪いさ、お前が気にする事じゃ無い。」

「……ありがとう。」

彼は軽く微笑んだ。

名も無き研究員、お前良い奴だ。

s i d e ? ? ? ?

怖い

怖い

怖い

ハンドガンを握る手が汗で湿っている。

やっぱりあの時逃げとけば良かった。

「チキン？ああそうさ。」

思わず呟く。

チームの一部にそう呼ばれていたのは知っていた。

「うわっ！」

曲がり角からいきなり表れたゾンビに死ぬほど驚いた。

俺は必死に引き金をひく。

ハンドガン特有の射撃音が辺りに響く。

ゾンビは頭を砕かれ力なく地面に倒れた。

心臓がはや金をうつ。

俺はその場を立ち去った。

怖い

ただひたすらに怖い

やっぱりあの時逃げとけば良かった。

side????? (さっきとは別の人)

静かな街だ。

初めはそう思った。

ヘリから降下した時俺はそう思った。

腐った死体どもが現れるまでは。

奴らの襲撃によって部隊は壊滅した、全て奴らに喰われてしまった。

俺は一瞬頭に浮かんだその猟奇的な場面を打ち消す為、頭を左右に振る。

やめろ、思い出すんじゃない。

俺は今、ミーティングの時に一瞬だけ見たラクーンの地図を必死に思いだしながら避難場所であろう警察署に向かっていった。

俺の仕事は市民をこの地獄から救助する事だ、まあ俺自身がその地獄にはまっちゃったが。

警察署には何らかの情報があるだろう。

避難ルート、ゾンビの弱点等々。

もしかしたら生存者もいるかも知れない。

俺はそんな希望にすがっていた。

速足で警察署に向かう。

頼むから誰か生きていてくれ。

この地獄に一人だけで居るのは嫌だった。

side 上総君

結論から言おう。

たいした収穫は無かった。

レオンやクレアと協力して武器を探したら、あまり良いものは見つからなかった。

デザートイーグルや九ミリの弾薬はそれなりの量が見つかったが、肝心の武器が見つからなかった。

武器はあるにはあるが、同じ九ミリや45口径のコルトくらいだった。

おんなじ物を何個も持っても仕方がないし、何よりそんなに沢山もつ事が出来ない。

現に二人のポケットは弾薬で一杯だし。

レオンは二挺拳銃も考えたらしいが、それだと両手がふさがり弾の再装填が出来ない、なので諦めていた。

ちなみに俺が使えそうな銃も無かった。

「……………」

マガジンに弾を込めるレオンの顔が曇っていた。

レオンは多分期待していたんだろう、ここには弾薬と武器があると。

だが、無かった。

その事で落ち込んでいたらしかった。

期待していたのはクレアも同じだったらしく、彼女の顔色もあまりよろしく無い。

二人とも無言で見つけた弾薬をマガジンに込めている。

勿論の事、俺は喋れないからその場は静まりかえっていた。

暗い。

暗すぎる。

なんかドヨーンて感じがする。

俺が何とかこの雰囲気を開く術を考えていたときだった。

ア………

永遠に満たされない餓えの叫びが聞こえた。

とっさに叫びが聞こえた方向に顔を向けた。

いた。

ショーウィンドウの向こうに何体かのゾンビがいる。

ゾンビはゆつくりとショーウィンドウを叩いていた。

「長居し過ぎたか……」

レオンがぼやく。

二人が行っていた弾薬込めはもう終わっていた。

「そうみたいね、速く行きましょう。」

クレアが立ち上がった。

その視線は店の裏口に向けられている。

「勿論裏口からね。」

仕方ない、ここからは立ち去るしか無い様だった。

原作ならショットガンとかが手に入る筈なんだが、まあ良いだろう。

俺達は裏口から店を出た。

それから俺達はゾンビ以外に襲われなかったので弾薬を使う事は無かった。

ええ、全て俺が叩き潰しましたとも。

ホント銃欲しい。

主に俺の精神衛生上。

クレアにもちよっと引かれたし。

今俺らはようやく警察署の前にやって来ていた。

「ここなら何かある筈だ。」

そう言って俺達を見るレオン。

よっぽどさっきの気にしてるんだろうな。

クレアと俺が頷き警察署に入ろうとした。

「あ、あんた達、ゾンビじゃ無いのか？」

震えた男の声が聞こえた。

俺達は振り返った。

そこに居たのは、恐怖で見開かれた目をしたあまり背の高くない男だった。

「ああ、」

レオンが答えた。

「俺達は見ての通りゾンビじゃ無い。あんただってそうだろう？」

男は心底安心した、というような表情をした。

俺はこの男が誰なのかも目星はついていた。

「俺はブラッド」

やっぱりな。

警察署に向かうまでの間、たまに銃声が聞こえていた。

恐らくそれはブラッドだったんだろう。

「あんた達は？」

ブラッドの問いにレオンが答え様とした。

そう、様とした。

でも、レオンは口を開けたまま声が出せなかった。

理由は簡単。

銃声と共にブラッドの頭が弾けたからだった。

悲鳴をあげるクレア、呆然とするレオン。

俺も混乱していた。

バイオでは確かにブラッドは死ぬがこんな死に方じゃ無い、ネメシスに殺られる筈だ、そしてネメシスなら俺がある程度対処できる、だが今ブラッドを殺したのは明らかに銃、つまり人間だった。

遠距離からの射撃には対応できない。

不味い。

スナイパーがレオンとクレアも殺す気なら、俺では防いでも対抗出来ない。二人が持っている銃も遠距離狙撃が出来るような銃では無い。

ピンチだった。

その時だった。

突然別の人間がとび出してきて、やや離れた建物の一角に向かって持っているアサルトライフルを発射した。

人間、体格からして多分男はしばらく銃を撃った後に悪態をついた。

「クソッ！ニコライめ！」

男は更に悪態をつく。

それから固まっている俺達に向き直った。

あ、良かった男で合ってた。

「私はUBCSのミハエル・ヴィクトールだ、君らを助けに来た。」

……………なんかもう、原作から離れすぎだろ。

30話 違い過ぎる（後書き）

すまぬブラッド、どんなに頑張ってもブラッドが生存するルートが
思い浮かばなかった。

合掌。

感想お待ちしてます

31話 暗躍（前書き）

あんまり進展しません

31話 暗躍

sideニコライ

屋上から移動の邪魔になるゾンビを排除しようとして、建物の屋上に登った。

俺がいる建物はこの辺りでもそこそこ高く、回りを遮るものはほとんど無かった。

一度回りを良く見渡してから銃を構えた。

通りをよたよた歩くゾンビに標準を合わせる。

パンツ

アサルトライフル特有の高い射撃音が響くと同時に、ゾンビの頭が弾けた。

次のゾンビに標準を合わせた。

パンツ

崩れ落ちるゾンビ。

俺は次々ゾンビを排除していった。

ふと自分口の端がつり上がっているのに気付いた。

理由は分かっている。

堪らなく楽しいんだ。

あの間抜けな腐った死体を粉碎していくのは思ったより楽しめた。

幸いな事に弾はたっぷりとある、まだ楽しめそうだった。

ついて早々アキノを葬れた事や、予定通りに監視員を処理出来ているなど、俺はこの街にやっきてから非常にツイていた。

まあ、部隊は壊滅してしまっただが、それは予定通りの事だった、そう予定通りに。

そうだ何もかも予定通りだ。これはゲームなんだ、そして俺が必ず勝つ最高のゲームだ。そしてゲームが終わったら俺は億万長者になる。

アンブレラも俺という優秀な監視員を送り込んでいた事を感謝するだろう、何せ送り込んだ監視員はほとんど死に、俺だけが情報を持ち帰るのだから。そして俺だけがアンブレラと取り引きする、奴らも情報を持っているのが俺だけとなれば山程金を積むだろう。

込み上げてくる笑いが止まらなかった。

声を出して笑う訳にはいかないので声は何とか抑えたが。

それでもにやつくのを抑えられなかった。

突然銃声が聞こえた。

俺は直ぐに戦闘態勢に入り、銃声がした方に銃を構えた。

それに掛かった時間は僅かに一瞬だ。

そうさ、俺は優秀だからな。

にやつきながらも銃声の原因を探す。

通りで男が拳銃をゾンビに向けて発砲していた。

男はあまり腕が良くないらしく、ゾンビに何発も銃を撃っていた。

唐突に俺は遊びたい、という感覚に襲われた。

俺とあの男、どちらが優秀かを比べるゲームだ。無論俺が勝つだろうが。

俺はスコープを覗き、男を見た。

男は恐怖で顔を歪め、必死に拳銃をゾンビに向けている。

俺は再び笑いだしそうになった。

男の姿が余りにも哀れだったのもあるが、大部分は違う理由だ。

あの男、STARSだ。

俺はラクーンでの予定以外にちょっとした小遣い稼ぎをする為に、アンブレラが煙たがっているSTARSの顔写真を全員覚えてきた。

理由はよく知らないが、アンブレラが奴らを消したがつているのは事実だ。俺がその手助けをしてやればアンブレラはもっと金を積むだろう。

男はちょこまかと動き回り狙いが付けにくかった。だが、男が急に動きを止め、驚くべき事に、偶然見つけた生存者に話し掛けたところで勝負は決まった。

その男の頭に完璧に標準を付けた弾丸は、男の頭を吹き飛ばした。

相手が悪かったのさ、残念だったな。

俺は三度笑いを堪えなければならなかった。

刹那、俺がもつアサルトライフルと同じ銃声が響き、俺の近くのコンクリートに弾痕が刻まれる。

クソッ

俺は身を翻した。

少し遊びすぎたようだ。

ゲームを邪魔されたせいでいくらか苛ついたが、これはあくまでゲームだ。ちよっとしたお遊びというやつだ。

そろそろ本来の予定に戻るとするか。

俺は屋上から降りる為の階段に向かった。

side 上総君

ここでミハエルと遭遇かよ、まあ良いけどさ。

ミハエルは確かUBCSっていうアンブレラの私兵の隊長格だった筈だ。原作では、ネメシスに襲われたジルを助ける為に手榴弾で自爆したというアンブレラ側の人間にしては珍しく良い奴だ。

でも確かミハエルはニコライに撃たれている筈なんだが、目の前に颯爽と現れたし顔色も良い、少なくとも大きな傷を負っている訳では無さそうだ。

「助けに来た？ あんた一人でか？」

レオンが問う。

可哀想だぜレオン、数千単位のゾンビを武装しているとはいえたかが数百人で相手出来る訳が無いじゃん。

ほら、ミハエルもめっちゃ苦い顔してるし。

「目的はそうだ、だが街に着いて早々、部隊が壊滅してしまった。」

ミハエルは苦々しげに言った。

「じゃあ私達をどうやって助けてくれるの？」

クレアがミハエルに遠慮がちに言う。

「時計台の鐘を鳴らせば助けが来る、鐘に電気信号が組み込まれているんだ。」

ミハエルが答えた。

この辺はバイオ3と同じだな、原作ではネメシスに救助に来たヘリ撃ち落とされちゃうけど。

「君達の他にも生存者は居ないのか？」

今度はミハエルがレオンに問うた。

「分からない、けど警察署が避難場所になっている筈だ、もしかしたら生存者がいるかも知れない。」

レオンが答えた。

「ふむ………」

顎に手を当てて考え込むミハエル。

よく見たらミハエルって中々ダンディーで良い感じなオジサマだな。

「頼みがあるんだが、」

「何だ？」

「君達に警察署内の生存者の搜索を手伝って欲しい。頼めるだろうか？それに彼女とこのデカイのは違うが君は警察官だろうか？」

あ、俺に気付いてたんだ、一向に俺に関して何も言わないから気付いて無いのかと思った。

「良いだろう。固まって行動した方が安全だろうしな。」

「決まりだな。」

レオンとミハエルが握手をする。

次いでミハエルはクレアとも握手をした。

そして俺とも普通に握手をした。

「よろしくな、デカイの。」

ミハエルってホントに良い奴だ。

31話 暗躍（後書き）

お知らせ

作者は学生です、そして残念ながらテストが近付いて来ましたので更新が停滞すると思います。時間があれば出来るだけ更新はしていこうとは思いますが、今までのように毎日更新は難しくなりそうです。

本当にすいません。

感想お待ちしております。

32話 仲間side (前書き)

ようやく更新できた。

32話 仲間side

sideレベッカ

「ハア……」

溜め息がでた。

これでもう20回目だ。

原因はわかっている。

カズサを死なせてしまった事だ。

あの時、私がマーヴィンへの手当てを手早くして、もう少し早くカズサの元へ行っていたらカズサは死ななかったかもしれない。

「ハア……」

21回目だ。

どんなに悩んでも考えても死んでしまったものは戻らない。

カズサはもう居ない。

どんなに自分を責めても時間は元には戻らない。

「分かってるわよ……」

そうだ、分かってる、だがそれでも悩まずにはいられなかった。

第一あの化け物がアンブレラが作った生物兵器で、バカみたいに強いということは分かっていた筈だ、それなのにあろうことか私は少しの間とはいえ、カズサと化け物が争っているということを忘れてしまった。

「私のせい、よね……」

何度考えても同じ結論にたどり着く、分かっているのに何度も何度も考えて、結局は同じ結論にたどり着いた。

でも、きつとあの優しいタイラントは決して怒らないだろう、理不尽に攻撃を受けてもそれが誤解だと分かると、何一つ咎めない彼なら決して怒らないだろう。

今、彼に許すと、怒っていない、と言ってもらえたらどんなに楽だろう。

でも、もう彼は、カズサは居ない。

思わず涙が滲んだ。

「ごめんなさい、カズサ……」

抑えていた感情が一気に溢れだした。

「ごめんなさい、ごめんなさい！」

もう止まらなかった。

sideジル

今私は街に数あるレストランの一つにいる。

何故そんなところに居るかというと、警察署で見つけた報告書の中に、ゲートを開くための宝石をこの店の主人が持っている、というのを見つけたからだった。

カズサが死んでしまった以上、彼が主張していたルートは使えなかった。

私は警察署の何処に地下への道が有るのか分からなかったし、何より見つけたとしてもカズサの言葉を信じるなら、そこはアンブレラの研究所だ、どんな仕掛けがあるとも分からないし、そこで事故が起こっていないという保証は何処にもない、カズサが居ればある程度の事には対処出来るだろうが、もう彼は居ないのだ。

あるかどうか分からないものを探すより、今ある最善の方法をとるべきだった。

幸い、レベッカも賛成したのでこうして探しに来ているのだ。

レベッカにはマーヴィンを見てもらおう為に警察署に残ってもらっている。本当の所、それだけでは無いのだが。

レベッカは自分を責めているのだ、自分がもう少し早くカズサの元に着いていたらカズサは死ななかった、と。

私もそうだがレベッカは洋館でもほとんどの仲間を失っている、カズサの死は彼女にとってかなりの衝撃だったのだろう。

今はそっとしておいた方が良さだろう。でも私はめげるいけなかった、きっとカズサは死ぬ間際ですら私達の事を思っただろう、だから私達だけでも生き残らないといけない。

カズサの為に、生きてこの地獄を脱け出さないといけなかった。

私がレストランの厨房を物色していると、不意に扉が開く音がした。

私はマグナムを構え身構えた。

ゆっくりとして、尚且つ辺りを警戒するような足音が聞こえた。

足音はこちらへ向かってきている。

私は、そいつが厨房への曲がり角に現れると同時に足音の主にマグナムを向けた。

そいつは直ぐに私を捉え、

「銃を下ろしてくれ、俺はゾンビじゃ無い。」

努めて冷静に言った。

sideカルロス

目の前にレストランの看板があった。

この街に来る前に食事は済ませてあったがこの状況では、いつまともな食事にありつけるか分からなかった、それにこれから出会う奴に歓迎されるため、缶詰の一つや二つの土産があった方が良好だろう。

俺はレストランの中に入って行った。

扉が軋む音を響かせながら開く。

中はそこそ綺麗だった。少なくとも腐った死体どもは居ない。

だが、扉が開く直前、俺は何かが動くような音を聞いた、音はそれきりだったが何があるとも限らない、充分に警戒して進んだ。

そして厨房への曲がり角を曲がった時に、

チャキッ

銃を向けられた。

不味いな、今俺はM16アサルトライフルを構えているが素早く銃を向けられた為、銃口は下を向いている、俺が銃口を上げて撃ち始めるまでに確実に相手の方が先に引き金を引くだろう。

何とかしないと。

俺は素早く相手を観察した。

そして銃を構える人間が女性で、その目が必要とあれば何の躊躇いもなく引き金を引くと物語っていた。だがその目に狂気は無い。

話を通じるかも知れなかった。

通じ無かったらそれでゲームオーバーだが。

「銃を下ろしてくれ、俺はゾンビじゃ無い。」

出来るだけ冷静に言った。

女性は少しだけ銃口を下げた、だがまだ直ぐにでも撃てる位置にある。

「貴方は誰？」

女性が警戒しながら聞いてきた。

「俺はカルロス、カルロス・オリヴェイラだ、君らを助けに来たんだ。」

出来るだけ、誠意を込めて言った。

「何処の所属？」

「UBCSだ、アンブレラ、バイオハザード対策……」

途中で言葉が引っ込んだ。

何故なら女性が今まで下げていた銃口を、再び俺に向けたからだ。そして目には明らかな怒りが宿っている。

「へい、落ち着けよ、俺は君らを助けに来たんだって。」

「どうだか、それが本当って確証はあるの？ アンブレラは人助けについては成績が悪いわよ。」彼女は吐き捨てるように言った。

「この事態を引き起こしたのはアンブレラなのよ？ それが助けるですって？」

「アンブレラが？」

「そうよ、知らないとは言わせないわ。」

彼女の目には明らかに侮蔑がこもっている。

少しだが腹が立ってきた。

彼女は俺を悪い人間だと思っている、だが自分で言うのもなんだが俺はそこまで悪い人間では無い。

「俺はただアンブレラに雇われた兵隊の内の一人だ、スーツ着てる奴らのしてる事なんて知らない。それに俺達は何も知らされずにここに送り込まれたんだ。あんたの言うような事は知らない。俺は生きてこの街から出たいだけだ。」

こればかりは不機嫌なのを隠せなかった。

俺は吐き捨てるように言って彼女目を見た。
彼女も俺の目を見ている。

俺も彼女も黙っている。

どれくらいの時間が経っただろうか。

「いいわ、信じましょう。」

そう言って彼女は銃を下ろした。

「私はジルよ。もしさっきの言葉が本当に貴方が協力してくれるのなら、私も手を貸すわ。」

「ああ、お互い仲良くしよう。」

俺は気さくな感じで言った。

ジルは微笑している。

彼女とは仲良くやれそうだ。

少なくとも今はそう思った。

32話 仲間side(後書き)

感想お待ちします

33話

再び（前書き）

作者復活！

33話 再び

side???

どうやらアンブレラはラクーン研究所での失態に続き、また何かミスをやらかしたらしい。

郊外から専用の車両を使い、アンブレラの無線を傍受しているが、今日にかけて無線の通信量がゾンビが街に歩き始めた最初の何日かよりも何倍も多くなっていた。

「所詮、この程度か……」

思わず呟いた。

始祖ウィルスの発見やそれを使つてのTウィルス創造、多数の生物兵器を造り上げたアンブレラだったが、この組織はここぞという時に必ず致命的なミスをする。

このラクーンでの失態にしても同じ組織内にいるバーキンが造つたGウィルスをアンブレラが無理に回収しようとして起きたらしい。いくらバーキンのGウィルスが欲しくなったからといって無理矢理回収し、それで街一つ潰すなど馬鹿にも程がある。

一時期とはいえこんな組織に自分が所属していたとは。

スペンサーの考える事は私には一生分からないのだろうな。

少しサングラスがずれていたため指で直す。

もうこれ以上傍受や監視をしても役には立たないかもしれない。

事実、マイクから聞こえるのはラクーンとは正反対の陽気なラジオ番組とアンブレラが必死に隠蔽し、買収したであろうニュース番組くらいだった。それでも数日前までは救援を求めるものや、アンブレラが送り込んでいた特殊部隊の無線などが入っていたが、それももうほとんど聞こえなくなっていた。

モニターの方も、市内の監査カメラからの映像を送っているがそこに映るのはゾンビしか居ない。

もう役に立つ情報は入ってこないな。自分が送り込んだスパイとの回線だけでも問題無いだろう。

そう判断して機材のスイッチに手を伸ばした時、

「タイラントの一つが操作出来なくなっただと？」

車両内の数あるマイクの一つから見知った声が聞こえた。

その声は僅かな苛立ちと、しかし何処か余裕を含んでいた。

「原因は分かっているのか？」

思わず鼻で笑ってしまった。

「分からないだと！」

やはりな。

わかる筈が無い、事態の收拾が壊滅的に下手なアンブレラには、突然のアクシデントへの対応など到底無理な話だろう。

お前も気苦労が絶えないな、セルゲイ大佐。

まあ、哀れとは思わないが。

結局はそのような組織に所属した自分の問題だからな。

「他のタイラントは正常なんだな？ならそれで良い、どうせ復旧の目処などたっていないのだろう。ああ、間違ってもタイラントを追加で投入しようとするな、あれは来るべき再興の時に必要だからな。」

セルゲイの言葉に笑ってしまった。

アンブレラに再興の時など無い、いくら巨大な企業とはいえこれだけの惨事を引き起こしたのだ、奴らは生き残ろうとするだろうが無駄な努力だ、何故なら私が潰すのだから。

今、口の端は自分でも抑えられないくらい上がっている。

今後自分が為すであろう計画の余韻に浸って合間に、通信は途切れていた。

しかし、タイラントが暴走したか……

思わず顔を歪めた。

アークレーでの事はあまり思い出したく無かった。

計画の内とはいえ、タイラントに一度殺されたのだ、勿論偽装だが殺されたという事実は変わらない。

暴走したタイラントは本能のままに暴れ、破壊しつくすだろう。

まあ、それでも警察に流してやる証拠にはちょうど良いか。

くだんのタイラントを探すべく、モニターのスイッチを操作し、探す事にした。

side上総君

ミハエルと合流し、生存者の搜索の為、警察署を探索する事になった。

戦闘を俺とレオン、真ん中にクレアを挟んで一番後ろにミハエル、という並びで探索している。

この中で一番弱いのはクレアだから当たり前だね。何せクレアはハンドガンしか持っていないし。

警察署内を探索している俺達だが、案の定生存者は中々見つからない。

出会うのはゾンビばかりだ。

たまにリッカーとも遭遇したが俺が叩き潰した。

ほんとタイラントって無双だな。つくづくそう思うよ。

レオン達是一向に生存者が見つからないもんだから、悲壮な顔になってきている。

俺は一度警察署を探索したから分かっていたが、やっぱり誰も見つからないってのはなんだか不気味だ。

ふと思いつく。

レベッカ達、今頃どうしてるかなあ。

俺がネメシスに殺られたとき、多分レベッカらはそれを見たんだろうな、じゃなきゃレベッカの事だから手当くらいする筈だ。それがされてなかったって事は多分俺の事を死んだと思ってるんだろう。

再会出来たらいいな。

でもそれはかなり難しいだろう。あの時のレベッカらの装備なら死ぬ事はないだろうが、この街で再会する可能性はかなり低いだろう。多分ジルは地下研究所以外の脱出方法を探すだろうし。

もう一度会いたいなあ。

そんな事を考えていたら不意にレオンの足が止まった。

「どうした？」

ミハエルがレオンに聞く。

「STARSのオフィスだ、ここも見えていこう。」

そう言ってレオンはクレアを見た。

「STARSの、兄のオフィス……」

クレアはレオンの言葉を受け、オフィスへのドアを見ている。

レオンはクレアに気を使ってるんだな。

レオンてなんか素っ気ない感じだったんだけど中々良い奴だな。

「行こう。」

レオンが微笑しながらドアを開けた。

「誰か居ないのか？」

ミハエルがそれに続き、声をかけながらオフィスに入っていく。

俺もクレアに続いてオフィスに入った。

ここに来るのは二回目だ。

レオンらはオフィスの引き出しを探ったり、ファイルを見たりしている。特にクレアはクリスのオフィスを熱心に探っていた。

余程兄の足跡を少しでも追いたいのだろう。

俺は既に探索されたのを知っているからバインダーに挟む紙を探していた。

あんだだけ熱心に探してんのに何も無いなんて言える訳が無いじゃん。

俺がドアの近くの書類入れから紙を探していた時だった。

ドアが急に開いた。

そして、何かに抱き着かれた。

え、何この急展開。

「何だ！」

ミハエルが叫びと共に、目にも止まらぬ速さでアサルトライフルを構えた。

勿論その銃口は謎の物体に抱き着かれた俺に向けられている。

レオンもミハエルに遅れてマグナムを構えた。

クレアは銃を構えていないが思いつきり警戒している。

怖えわお前ら。

いや、撃たないよね？

俺が軽くビビっている時だった。

「良かった……生きてたんだ。」

俺に抱き着く何かが呟いた。

俺はその声に覚えがあった。

「カズサ……本当に良かった。」

再び呟く何か。

俺はその頭を力を抑えて撫でた。

この場合、久しぶりって言うのかな。

レベツカ、会えて嬉しいよ。

33話 再び（後書き）

ようやくテストが終了しましたので、更新を再会します。

原案の募集はまだまだ受け付けています。

感想お待ちしております。

34話 お話し(前書き)

今回はちよつと暴走気味、原作崩壊が酷く、注意されたい
嫌な人は戻るをオススメ

34話 お話し

side上総君

しばらくレベッカにコアラの赤ちゃんみたいに抱き着かれてたが、レオンらが事情を理解しきれてないみたいなので一旦離れてもらった。

レベッカはなかなか離れようとせず、説得するのに時間が掛かったが、レオンらが警戒している事に気付くとうまく離れた。

俺はレオンらにレベッカを紹介し、彼女が味方であることを説明した。

レオンはレベッカがまだ若いのに警察のエリート of STARSである事に驚いていた。レオンは確か巡査だった筈、そりゃ自分より若い上司、しかも見た目が綺麗な女の子だったら驚くわな。

若干レオンは悔しそうだし。

クレアはレベッカにしきりにクリスの事を聞いていた。レベッカはクレアの問いに対して丁寧に答えていた。

クレアの質問は最初、何故クリスは突然居なくなったのか、的な事を聞いていたが途中から、体調はどうだとかなんだか母親みたいな質問になっていった。

本当に仲良いんだなこの兄妹は。

レベツカは最近までクリスと一緒にいたらしいからね。

ミハエルはミハエルでレベツカにまだ生存者が居ないかだけを聞いた。そして生存者が見つからない事を聞き、顎に手を当てて考え込み始めた。どうやら今後の事を考えているようだ。

さすがミハエル、やっぱり年季が違うのかね。

一通り挨拶が終わったところでレベツカが此方に向き直った。

そして、

「ごめんなさい！」

結構な勢いで謝られた。

レオンらはいきなりレベツカが大声で謝った事に驚き、全員が此方を見ている。

いや、皆さん、俺にそんなに注目しないでくださいよ、恥ずかしいですよんかゝ

「「「……………」」（レオン、ミハエル、クレア沈黙）

……………すいません、真面目にやります。

まあ、恥ずかしいってのは事実だが、実のところ、レベツカに謝られる理由が全く分からない。

レベツカに何かをされた記憶は全くありません、ええこれっぽっちも。

俺が心当たりを探していると、答えはレベッカから告げられた。

「あの時に私がもっと早く貴方の所へ行けていたら、貴方はあんなことに、あんなに傷付かずに済んだかも知れなかったのに……」

そう言ってレベッカは黙り込んでしまった。

その目には薄く涙が浮かんでいる。

あゝ……あの時の事か。

俺がネメシスに殺られた時の事ね。理解しました。

という事は、あの場にレベッカからは居たんだな、全然気付かなかった。

まあ、あの時は結構本気で戦ってたから気付けないのも無理ないか。事情を理解した俺だが、それでもレベッカが謝る理由が分からなかった。

だってさ、過ぎた事をとやかく言っても仕方がないし、きっとレベッカだって遅く行こうとした訳じゃ無いだろうからね。そんなレベッカを責められる訳が無い、怒れる訳が無かった。

俺は紙にそれを記してレベッカに見せた。

レベッカはそれを読むと困った表情になった。

「……そうかも知れないけど、カズサは一度死んじゃったんによ？
あの時貴方は息もしてなかったし脈も無かったわ！」

だんだんヒートアップレベッカ。

俺が不味いと感じ始めた頃にはレベッカの声は怒鳴り声になっていた。

「貴方が死んだという事実は無くならないの！そしてその原因は私なのよ！？」

レベッカは涙目、というか泣きながら怒鳴っている。

一頻り良い終えた後、レベッカは泣き出してしまった。

まあ、あれだろ。

レベッカは俺を死なせちゃった事に責任を感じてんだな。

レベッカ的には許すって言われるよりも、責められた方が楽なんだろう。

でもなあ、俺的には別に怒ってなんかいないし、責める理由が無いんだよなあ。

困った。

助けを求めようにもレオンらは沈黙したまんまだし、それに彼らは事情をわかってないしな、レベッカは問題外だ。

仕方ない、か。

俺はレベッカに近付き、

抱き締めた。

勿論力はかなり抑えている、タイラントの筋力で全力で抱き締めたら多分挽き肉になるだろうからね。

「え？」

すっとなきような声を上げるレベッカ。

いや、実に可愛い。

別に変な意味が合って抱き締めた訳じゃ無い、ただレベッカに俺が怒ってないって事を伝えたかったただけだ。

怒っている相手に何か抱き締める事は出来ない、つまり怒ってないって事を解って欲しかった。

俺がしばらくレベッカを抱き締めていると、

「ぐす……うえゝん」

レベッカが本気で泣き出した。

それでも俺に体重を預けてるから多分、俺の伝えたいことは伝わったんだな。

俺はしばらくレベッカを抱き締めつつ、優しく頭を撫でた。

無論力をセーブして、だ。

十分くらいするとレベッカは少し落ち着いた様だった。

レベッカは泣いたせいで赤くなった瞳で、

「ありがとう。やっぱり貴方は優しいのね。」

と言った。

レベッカと俺では身長差が激しいので、必然的にレベッカは俺を見上げる形になる。ましてや今のレベッカは目には涙の跡があった。

何このカワイイ生き物、今すんごくハートがキュンッてなった。

俺が悶えていると、

「ありがとう。」

と笑顔で言ってレベッカは俺の腕の中から離れた。

レベッカはレオンらに説明を始めた。

どうやらマーヴィンの事を言いたいらしい。

ついでに言うと、レベッカが警察署に残っている理由もマーヴィンがまだ目が覚めてないからだった。

レベッカ曰く、マーヴィンにゾンビ化の兆候は見られないらしい。

「マーヴィンは安全な部屋に居てますから、まずそこへ行きましょう。」

レベッカが提案する。

レオンらに異存は無い様だった。

「なら、行きましょう。」

レベッカの声に全員が頷いた。

34話 お話し(後書き)

夏に終わるんだろうか…

感想お待ちしております。

35話 合流（前書き）

ちよつと進展

かな？

35話 合流

sideクレア

今、私は途中出会ったレオンとミハエル、カズサ、レベッカ、そしてソファアで眠っているマーヴィンという警察官と警察署にある一室に居る。

初め、この街に来た時は大量のゾンビに襲われどうなるかと思ったが、何とか切り抜け今に至る。

しかしこれからどうするのだろうか？私はクリスを探したいのだが、兄は既にラクーンを去ったらしくもう用は無い、脱出するにはレオン達と協力するしかないだろうけど、まだこの街に脱出経路は残っているのだろうか？

今、ミハエルとレベッカとカズサがどうやって脱出するかを話し合っていた。カズサは筆談だったが。

私やレオンはこの街の事をよく知らないから、その話し合いには参加せずに、たまに意見を求められるだけにとどまっている。

だが、求められた意見を言うだけというのはなかなか暇だった。

余りに暇なので、レオンに話しかけてみた。

レオンは近くの机に寄りかかる様にして立っている。

「ねえ、レオン」

「何だ？」

「貴方、今日ここに配属されたのよね？」

レオンは体を机に傾けたまま答えた。

「ああ」

「なら、このマーヴィンて人は貴方の上司なの？」

「そうだ、この街に来る前に電話した時に出たのがマーヴィンだった」

「そう…」

私の返事以降、以降沈黙するレオン。

何となく気まずい雰囲気が始めてきた。

不味いわね、あっさり完結して会話が途切れちゃったわ、何とか話続けないと。話始めた以上なんか気まずい。

「ええと…レベッカとカズサって仲良いわよね？」

「ああ、そうだな」

「さっきも抱き着いたりしてたし、結構仲良いのかな？」

「仲が良いってのは確実だろうな」

レオンはようやく此方に顔を向けて言った。

「もしかして恋人だったりとかするのかな？」

何となく内容がアレだが沈黙するよりかはずっと良い。

「……………かもな」

レオンも乗ってきたかな？

そう思い、私が次の言葉を言おうとした時だった。

ズタンッ！

壁に何かが物凄い勢いで突き刺さった。

壁は突き刺さった何かを中心にひび割れている。

よく見るとそれはボールペンだった。

タイラントの聴覚を舐めないでもらいたい。

「もしかして恋人だったりするのかな？」

クレアよ、バッチリ聞こえたからな！

「……………かもな」

レオン、お前も乗るな！

俺は二人の会話を阻止するため、レベッカとミハエルとの筆談に使っていたボールペンを全力で投擲した。

俺の超人的な力で放たれたボールペンは、クレアとレオンが居るちようど真ん中辺りの壁に突き刺さった。

……スッゲー、ペンって刺さるんだ、初めて知ったわ。つーかタイラントの力で投げて尚且つ壁に突き刺さるて、ボールペン最強やん。レオンとクレアは突然の事に咄然としている、二人とも視線は壁に突き刺さるボールペンに釘付けた。あ、レベッカもめっちゃ見てる、つか驚いてる。

「どうした？」

唯一平静なミハエルが聞いてきた。

俺は近くの机から、新たにボールペンを取ってきて今まで筆談に使っていた紙に書いた。

ボールペンを取りに行く時、軽くクレア達を見るのを忘れない。

聞こえてんだからな。

「ちょっと虫がね」

ミハエルはそれを読むと、

「……………そうか」

とだけ言った。

その顔はなんだか少し疲れていた。

ミハエルは気苦労が絶えないポジションに居るんだね、きっと。

「…………えーと、話を続けましょうか？」

レベッカがおずおずと言う。

話が中断した文句なら彼処の二人に言ってね。

レベッカが一度溜め息をつき、話を始めようとした。

そう、した、なんだ。

レベッカが話し始めようとした時に、

「スタアアアアズ!!!!」

ネメシスの雄叫びが聞こえ、尚且つ、

バン！バン！

銃声も聞こえたからだ。

音の大きさからしてかなり近くだ。

俺達はレオンとクレアを部屋に残すと、急いでネメシスと戦っているであろう人間を助けに向かった。

sideカルロス

とりあえずジルに自分が敵ではないという事を解ってもらえたので、今は一緒に行動している。

彼女曰く、警察署にまだ生存者が居るらしく、しかもその内の一人はジルと同じくSTARSらしいのだ、彼女は那些人達と合流したいらしかった。

これには俺も賛成した。今は出来るだけ大人数でいた方が良いだろ

うし。

彼女はここの土地勘もあるらしく、警察署に向かうため、彼女に道案内をしてもらっていた。

道中、俺はジルからアンブレラの事を聞いていた。

正直、自分がいくら雇われてとはいえ、所属していた組織がそんな悪者だとは知らなかった、そして同時にそんな組織に所属している自分が恥ずかしくなった。

ジルの話したアンブレラの秘密は酷いものだった。

聞いている内に段々と恥ずかしさと同時に怒りを覚えた程だった。

ジルは話し終えた後、

「貴方はこの事実を知って何をするの？」

と、聞かれた。

俺は直ぐに、

「直ぐでも退職するよ」

と答えた。

彼女は笑って、

「それが正解ね」

と言った。

スタアアアアアズ！！！！

俺とジルは今、化け物と対峙している。

そいつは、俺達がもうすぐで警察署にたどり着くというところでいきなり現れた。

化け物はコートを着て、ボディビルダーの何倍もの筋肉が付いていて、とてもでかかった。だが、右腕が肘から先が無かった。

どうやら傷付いているらしい、しかしそれが手負いの野獣の様な雰囲気を出していた。

一目で理解した。

アレは危険だ、それも特大の。

俺はすぐさまアサルトライフルを構えると引き金を引いた。

アサルトライフル特有の高い射撃音が響く。

ジルもマグナムを撃ち始めた。

化け物に何発もの弾丸が当たっているが、化け物は少しよろめくだけではほとんど動じない。

それどころか此方に向かって歩き出してきた。

「クソッ、何なんだアレは！」

思わず悪態をつく。

「アレがアンブレラの作品よ！」

ジルがマグナムを撃ちながらそれに答えた。

喋っている間にも休まず撃ち続けているが、化け物の歩みは止まらなかった。

一つのマガジンを撃ち切り素早くリロードする。

何であるの化け物は倒れないんだ。確実にジルと合わせて20発以上の弾を喰らっている筈なのに。

化け物はゆっくりとその傷付いた体を引きずる様にして迫ってくる。

何時までも倒れない化け物に死を感じ始めた時、

バン！

俺のアサルトライフルやジルのマグナムとは違う銃声が聞こえた。

それを引き金にちょうど警察署の方向から弾幕が放たれた。

どうやら誰かがライフルを使っているらしく、化け物にライフル弾が当たるたびに、化け物の肉が弾ぜた。

2つの弾幕に化け物も耐えきれ無かったらしく、ようやく地面に倒れ付した。

「大丈夫ですか!？」

若い女性の声が聞こえた。

俺にはそれが天使に思えた。

35話 合流（後書き）

感想お待ちしています。

36話 合流その2（前書き）

キャラクター毎にかき分けるのって難しい……

36話 合流その2

sideミハエル

元々この作戦は不味いところがいくつかあった。

例えば脱出方法を格隊長しか知らなかったし、今から向かうラクーンで流行っている奇妙な病についても詳しく知らされていなかった。

しかしこの部隊は優秀だし、また自分の部下も優秀だ。

それに間違いは無い。

だから当然のようにこの作戦が成功するものと思っていた。

盲信に信じていた訳では無いが、失敗する可能性は限り無く低いと考えていた。

しかし、部隊は全滅した。

この部隊はアンブレラが合法、非合法な手段と莫大な金で造り上げた精鋭部隊だ、中には元軍人や、人には言えないような過去を持つ、という人間も沢山いる。

では何故このアンブレラが誇る精鋭部隊が潰滅したのか？

理由は簡単、相手が街一杯のゾンビだったからだ。

一体や二体ならどうという事は無かっただろう。

多少動揺はするだろうが、直ぐに冷静に対処するからだ。

だが、現れたのは何千というゾンビだった。

今になって気付いたが、奴らは頭を撃てば難なく倒す事が出来る。
しかしあの時の我々は冷静さを失っていた。

何せ普通の人間なら二、三発撃ち込んでやればそれで動けなくなる、
しかし腐った死体どもは銃弾を気にせず此方に迫ってきた。

死体どもが目前まで迫った時、誰かが逃げようとして隊列を乱した。

それを引き金に部隊は総崩れになってしまった。

混乱の極みだったあの状況で私が生き残れたのは恐らく偶然だった
のだろう。

不具合を起こし、投げたものの爆発しなかった手榴弾がいきなり爆
発して僅かだが道が開けたのだった。

もはや私以外に回りから銃声は聞こえない、私は全力でその隙間を
駆け抜けた。

その時見てしまったのだ。

他の小隊を率いていた、ニコライというロシア人が仲間をゾンビに
押しやり、自分だけ逃げた事を。

激しい憤りを覚えたが、今考えればそれだけならまだ良かった。

ニコライは逃げる途中私に振り返り、ニヤリと笑った。

そして、私に向かってアサルトライフルの引き金を引いた。

幸い、再び集まりつつあったゾンビがそれを遮ったが、ニコライが私に向かって攻撃を行った事に対して衝撃を受けていた。

私は複雑な思いを胸にその場を離れた。

市民を狙撃するニコライを見て、彼が正気では無いという事を改めて思い知った。

奴はあろう事か救出目標である一般市民を殺害したのだ。

しかもその直ぐ近くには他にも市民がいた。

私は思わず飛び出し、建物の屋上に陣取るニコライに向かってアサルトライフルの引き金を引いた。

それが効いたのが分からないが、ニコライは身を翻し屋上から消えた。

私は辺りを警戒しながら運良く奴に狙撃されなかった、市民らに話し掛けた。

それがカズサ達との出会いだった。

side 上総君

ネメシスはどうやら俺や、その後レベッカ達とやり合った時の傷が完全に回復しきっていなかったらしく、あっさり倒せた。

レベッカとミハエルで弾を弾幕の如く撃ち込まれ、反対側からも弾幕をはられたネメシスには少し同情仕掛けてしまった。

特にレベッカは狙撃用のライフルを使ってるから威力と命中精度が半端無く高いのだ。

ミハエルもミハエルでめちゃくちゃ正確な射撃をしてたし。

前後からの弾幕でボロボロになったネメシスはゆっくりと地面に倒れ付した。

それを確認したレベッカが先にネメシスと戦っていた人達に声を掛けた。

「レベッカ！レベッカなの！？」

今は夜だから姿は見えないが、見知った声が聞こえてきた。

あーやっぱりネメシスと戦っているからもしかしてと思ったけど、やっぱりジルだったか。

「レベッカです！怪我は無いですか！」

両名とも叫んでます。暗闇だから仕方ないんだろうけど、やっぱりうるさい。

「私達は警察署側の歩道に居る、此方に来てもらえないだろうか？」

レベッカとジルが叫んでの話し合いを遮って言った。

やっぱりミハエルは軍人だけあって冷静だね。

「ええ、わか「小隊長！？生きてたんですか！」」

え、誰？

いきなり誰かがジルの声を遮った。

バイオの主要なキャラクターには大体出会ったと思うんだけど、誰だったかな？

「D小隊のカルロスです！」

「UBCSか！まだ生き残っていたのか！」

「ハイ！隊長も無事で何よりです！」

カルロスか、成る程。

正直忘れてた。

いや、すまんカルロス

だってカルロスってバイオ3しか出てこないし、俺バイオ3やった事無いし。

仕方ないじゃん。

俺がそんな事を考えている内に、カルロスとジルは此方にやって来ていた。

再会を喜ぶジルとレベッカ、そしてミハエルとカルロス。

お互いに事情や解った事等を交換しているようだったが、不意にジルと目があつた。途端、

「カズサ！？死んだんじゃない無かったの！？」

叫ばれた。

思わず耳を抑える俺。

つか死んでねーわ、勝手に殺すな。

「確かに脈は無かったんですが、どうやら回復の為の一種の仮死状態だったみたいです。腹部の傷も無いですし。」

レベッカが俺の代わりに答えた。

うむ、ありがとうレベッカ。

「俺は大丈夫だから、頑丈だし。」

俺は紙にそう書いてジルに見せた。

ジルはそれを見ると、此方に寄ってきて、

「貴方は大丈夫でもレベッカがどれだけ心配したか分かってる？」

俺だけに聞こえるように小声かつどすの効いた低音で言ってきた。

「分かってます」

分かってるさ、大いにね。まさか抱き着かれて本気で泣くとは思わなかったけど。

「なら、後でちゃんと埋め合わせしときなさいよ。」

……………了解です。

俺はジルの剣幕に首を縦に振るしか出来なかった。

だって外見は厳ついタイラントでも、ハートは17歳だもん。一応レベッカより年下なんだよ？

俺とジルのヒ・ミ・ツのお話が終わると、ジルはさっさとレベッカの方に戻っていった。

戻った時に、

「何を話してたんですか？」

レベッカに聞かれたジルは、

「何でもないわ（笑顔）」

と、恐いくらい満面の笑みで返した。

「そ、そうですか……」

ほら見ろ、レベッカもちよつと顔がひきつってるじゃないか。

結局、一度レオンやクレアを残している警察署まで戻る事になりました。

36話 合流その2（後書き）

感想お待ちします

37話

議論（前書き）

短めです

37話 議論

side上総君

新たに合流したジル、カルロスと共に再び警察署に戻ってきました。

途中、カルロスから俺の事についていくつか質問されたが、レベルカやジルのフォローで何とか味方であると解って貰えた。

正直なところ、筆談きついな。

何せ急な事には対応出来ないし、文面だからどうしても冷たいような印象を受けてしまう。

それにずっとバインダーとボールペンを持ち歩いてないといけない。

そうなると何時もバインダーやボールペンが壊れないように気を付けて戦わないといけないし、そもそも邪魔だ。

あ、なんか自然と溜め息が。

まあ、それしかコミュニケーション手段がないから仕方ないんだけど……でもせっかく英語わかるようになったんだし、やっぱり普通に話したいなあ。

俺がもう一度溜め息をつこうとした時に、

「カズサはどう思う？」

ジルに話を振られた。

そう言えば今後どうするかについて話し合ってたんだっけ。

すっかり忘れてた。

「どうなの？」

ジルが再び聞いてくる。

どうやらさっきの間俺は考え込んでいた、と思われているようだ。

……どうしよう。

ジルってさ、スッゲー美人なのよ、いやホントに。でも怒ったらめちやくちや恐いんだよね。何処の大魔王ですかっけくらいに。

ヤベエぞ、これで聞いてませんでした、なんて言ったら戦車にパンツ一丁で挑むくらい悲惨な事が俺に起こってしまう。

なんとしてでも回避せねば！！！！

俺が減多に無いくらい頭をフル回転させて必死に考えてみる。しかし話の内容も分からないのに何か考えが浮かぶ筈も無かった。

「……カズサ？」

答えない俺にジルが再々度聞いてきた。

ヤベエ、ヤバイぞ俺。そろそろ答えないと本格的にヤバイ。主に俺

の命が、タイラントだから頑丈だけど、本能が危険だと最大音量で俺に告げている！

俺が人生のバッドエンドを回避しようと必死に考えている時に、

「だけど俺達だけで脱出してしまつて良いのか？」

救世主が現れた。

おお神よ！偉大なる救世主レオンを遣わした事に感謝します！

俺んちはバリバリの仏教徒なんだが思わず神に感謝を捧げてしまった。あ、でも仏教徒だったのって前世（？）の事だから別にいいか。俺自身敬虔な信者では無かったけども、まあ人並みというやつさ。

救世主^{レオン}が話に入ってきた事でジルがレオンに言った。

「もうこの街に生存者はほとんどいないわ、貴方も分かつてるでしょう？」

「そうかも知れないがそうじゃないかもしれない、まだ生存者が俺達以外にもいるかも知れないんだ、第一市民を助けるべき警察が先に逃げ出してしまつていいのか？」

「この街に起こっている事は既に警察で対処出来るようなものではないわ、アンブレラが情報を行き渡らない様になっている今は軍にアンブレラの悪行の証拠を引き渡すのが今の私達の仕事よ。」

「だが……」

「今この機会を逃してしまえば二度とこの街から出られなくなるかも知れないのよ？」

ジルの言葉を受けて沈黙するレオン。

救世主も大魔王には勝てなかったか……

だがレオンよ、俺に貴重な時間をくれてありがとう！君とジルとの会話で何となく内容がわかったぞ。

つまりあれだ、自分達だけで脱出するか、それともまだ生存者の探索を続けるかを議論してんだな。

判ったからには解答をしようではないか。俺の安全の為に。
俺は紙に、

「この街からの脱出は、出来るなら今すぐするべきだと思う。」

レオンとの舌戦に勝利したジルは俺の解答を見て、

「じゃあ貴方もミハエル達と言う脱出ルートで良いわね？」

こう言った。

あれ？何かずれてるような……まあ危険は去ったから良いか。

ミハエル達と言う脱出ルートというのは多分バイオ3の時計塔で呼ぶ事が出来るヘリではないかと思う。原作ではそのヘリはネメシスにロケットランチャーで撃ち落とされるが、さっき見たネメシスはロケットランチャーを持っていなかったしかなり傷付いていた、だ

から脱出出来る可能性はかなり高い筈だ。

もしかしたら議論してた内容って、今すぐ脱出するかでは無く、俺が言っていた警察署の地下から脱出するかミハエル達の言うヘリで脱出するかを議論してたのかな？

俺は首を縦に振った。

それを見たジルは、

「じゃあ決まりね。私達はこれから時計塔に向かうわ。」

そう言って議論を締めくくった。

まあ、今はマーヴィンもいるし出来るだけ早く、しかも距離が短いであろうヘリでの脱出の方が良いだろうな。

だが、俺には一つ不安があった。

37話 議論（後書き）

感想お待ちします

38話 時計塔（前書き）

なんだかなあゝ

いや、別に深い意味は無いんですけどね。

最後にお知らせがあります。

38話 時計塔

side上総君

俺達は今、時計塔への道を進んでいます。

俺以外全員が銃を構えて不測の事態に直ぐに対応出来るようにしています。

因みに先頭はジルとミハエル、最後尾はレオンとカルロス、真ん中に俺、それで俺の左右にレベッカとクレアが居る。

何でタイラントである俺を守るような陣形なのかと言うと、

「マーヴィンはまだ意識が戻らないわね……」

これだ。

つまりマーヴィンを俺が背負ってるのさ。

だってマーヴィンってそこそこ体格もいいし、背負うなり抱えるなりすると普通の人間ならかなり動きが阻害されてしまう。

というわけで、マーヴィンを背負っていても少なくとも逃げる事が出来る俺が自動的に背負う事になった。

それをフォローする為にこんな陣形をしているのだ。

「でも、ゾンビにはならないんだろう？」

先程のレベッカの呟きに、カルロスが返した。

「ワクチンを打ったからそれは無い蓮なんですが……」

レベッカが若干不安を滲ませて言う。

マーヴィンはワクチンを打った後に意識を失っていた。今まで一度も目覚めていない。しかし目覚めてはいないものの、ゾンビ化の兆候は見られなかった。

「止めて」

突如ジルが声を上げ、レベッカとカルロスの会話を遮った。

「マーヴィンは絶対に助かるわ。そんな話をしないで。」
ま、これはジルの言う通りだね。

今は気分を少しでも下げるような事を言うのは好ましく無い。

レベッカとカルロスが頷き、それ以降誰も喋らなくなった。

俺達は静かに時計塔に向かって行った。

道中、車で造られたバリケードや閉まっているゲートが幾つかあったが、何れも俺が力業で何とかした。

原作なら鍵やら回り道やらをしないといけないんだろうが、俺には知った事じゃない。ゲームではそれが面白いのだろうが、今は病人を抱えている。一々そんな話をしている余裕は無かった。

他にも、暗闇からゾンビがいきなり現れたり、虫っぽいBOWに襲われたり、途中抜けて行ったビルでリッカーに強襲されたりした。だが各個人かなり強力は武器を持っているのだ、それらは現れた瞬間放たれる弾幕の前に全て倒れた。

何か見ててゾンビとかが哀れになった。

姿見せたら瞬殺されるのに律儀に襲ってくるのだ。

それでもめげずに襲ってくる生物兵器達。

特にリッカーなんかは此方に気付く前に銃弾の嵐に見舞われ、まるでぼろ雑巾のようになって天井から落ちてきた。

かなり涙を誘う光景であった。

タイラントに涙腺が有るかは不明だが。

と、いう訳で誰も脱落せずに時計塔までやって来ました。

時計塔の前の広場は他とは違い、割と綺麗だった。

これならへりも降りられるかな。

「行くぞ」

ミハエルの短い合図と共に時計塔に入っていった。

最初にミハエルがアサルトライフルを構えながらドアを開けたが、特に危険は無かったらしく手で、入れ、の仕草をした。

それを見て次々時計塔に入っていく俺達、勿論銃を構えたままだ。

最後に俺が入った。

ドアが軋みながら閉まる。

中は外と同じようにこの街にしては綺麗だ。

まあ少しばかり腐った臭いがしたが、ゾンビが往来を歩き回るこの街ではましな方なのだろう。

「では打ち合わせ通りにやろう。」

皆が中を観察している時にミハエルが言った。

打ち合わせとは、警察署での議論の中で話し合って決めていた事だ。

まあ、そんな凄いものではなく、ただ時計塔の中を探索する時は、皆で固まって動く、というだけだ。

俺も含む全員が頷き、再び陣形を組んだ。

s i d e レ ッ カ

時計塔への道中ゾンビ達に出会った時は、カズサが動く前に私達が銃で対処をした。

そもそもカズサはマーヴィンを背負っているから、容易に動く事は出来ない筈だが。

どうもカズサは自分が頑丈だから無茶をする傾向がある。

確かにタイラントは生命力が非常に高く、滅多な事では死なないが、彼は自分を心配している人間がいる、というのを良く認識するべき

だと思う。

もうあんな思いは二度としたくない。

アークレーの森や洋館で味わった、「仲間を失う」という事はとても辛い事だった。

リチャード、エドワード、エンリコ、ケネス、フォレスト、STA RSじゃ無かったけどケビンも死んでしまった。

あの事件でブラヴォーチームは、私を除いて全滅したのだ。

もう仲間を失うのはごめんだ。

確かにカズサは強い、私のような普通の人間なんかよりずっと。

でも無敵じゃない。

カズサにはそれを片隅でも良いから覚えておいてほしかった。

私は今、時計塔の中を探索している。

カズサはマーヴィンを背負って無防備な状態なので、私とクレアの間に居る。

前後にはミハエルやジル、レオン、カルロスがいるから、まず大丈夫だろう。

ミハエルが一つのドアの前で立ち止まり、

「この部屋を探索する」

短く告げた。

私達は頷いた。

ミハエルはそれを確認すると、アサルトライフルを構えながらゆっくりドアを開けた。

時計塔自体が古いため、ドアの蝶番が軋む音がする。

開いたドアからミハエルを先頭に順番に入った。

カズサは体格がとても大きいから、体を折り曲げる様に入った。

カズサが小さな入り口を通り抜ける度に、凄くたいへんそうだなあ、と思う。

同時に凄くシニールだとも思うが。

部屋はそこそこ広く、休憩所のような感じで、自動販売機とテーブルと椅子がある。

そして、今では慣れてしまった臭い、死臭がした。

思わず顔を歪めてしまう。

ミハエルとジルは油断無く銃を構えながら奥へと進む。

ちょうどテーブルの向こう側に差し掛かった時に急に銃を構えた。

部屋に一気に緊張が張りつめる。

ジルが見つけたモノに何かをしているようだが、ここからではテーブルに遮られて見ることが出来ない。

しばらくするとジルは、

「大丈夫よ、完全に死んでるわ。」

と、言った。

その言葉を合図に皆が一気にテーブルの向こう側に移動した。

そこにあっただのは死体だった。

死体は頭を銃で撃ち抜かれたらしく、頭部の損傷が激しかった。

正直、あまり長々と見たいものでは無い。

それを察してか、

「大丈夫か？」

カズサが心配そうな表情をして紙を見せてきた。

「ええ、大丈夫よ、ちょっと気持ち悪くなったただけだから。心配しないで。」

優しいタイラントを安心させる為、私は出来るだけ気丈そうに言った。

「なら良いんだけど……」

まだ心配そうにカズサは言う。

「ねえ、あれなんなのかな？」

クレアが死体の直ぐ脇を指さして言う。

その死体の近くには、大きなバックがあった。

「UBCSの制服を着てるからなんかの武器じゃないか？」

カルロスが答えた。

「危険なものかも知れない、私が開けよう。」

ミハエルが冷静に言う。

ミハエルは優秀な軍人で人当たりも良い、それに仲間思いだ。それに射撃がとても上手い。なので必然的にリーダーの様になっている。

ミハエルは注意深くバックを引き寄せると、皆を少し離れさせた。

そしてファスナーに手をかけ、開けようとした時だった。

カサカサカサカサ……

激しく嫌悪感を感じる音が聞こえてきた。

38話 時計塔（後書き）

以前から募集している原案についてお知らせがあります。

詳しくは活動報告にて

感想お待ちしております

39話 時計塔その2 (前書き)

戦闘シーンで大変

39話 時計塔その2

side上総君

カサカサカサカサ……

……
(汗)

なんか物凄い嫌な予感がする。

思わず台所に現れる世界最強の黒い昆虫を思い浮かべてしまった。

「なに……虫？」

クレアが呟く。

クレアの顔が若干青くなっている。

考えている事は俺と同じのようだ。

「だとしたら最悪よ。」

レベッカがそれに返した。

カサカサ音は段々近付いてくる。

皆が銃を構えた。

俺は戦闘に巻き込まれない様に、マーヴィンをテーブルの近くにあ

った椅子に下ろした、一応クレアにジェスチャーでマーヴィンの近くに居してもらった。

音は段々近付くに従って大きくなっている。

たしかバイオ2で30センチのくらいの巨大なG（Gウィルス兵器では無い。）が登場してきたが、音から推測すると確実に1メートルを越えそうな感じである。

……1メートルのG（台所に現れる方の）とか、最強じゃないか。絶対戦いたく無い。

つか、もしそうだとしたらハンドガン位じゃ殺すのは難しいだろうな、まあ、銃器が通用しない事はさすがに無いだろうが、もし通用しなかったらその場合、何とかしないといけないのって確実に俺だ。

俺の場合、何とかする＝格闘戦闘、だ。

……おおう、今考えただけで背筋がゾクツとした。

1メートルのG（黒いカサカサする奴の方）とのガチンコなんて絶対にやりたく無い。

どうか、レベッカ達だけで対処出来るような奴でありますように。

俺は必死に願った。

カサカサ……

音が最大限まで近付いてきた時、突然音が止まった。

突然の事だったが、俺を含め全員が気を緩めていない。

皆ドアを凝視し、それぞれ銃を構えている。

部屋は完全に無音だ。

誰か分からないが、唾を飲み込む音がした。

それが合図だったかの様に、

ガタンッ！！！！

ドアが枠から外れ、吹き飛んだ。

その衝撃でドア付近に埃が舞い上がった。

そして、

カサカサカサカサ！！！！

先程の足音の主が部屋に侵入してきた。

埃でよく見えないが、レベツカ達は構わず銃を発砲した。

皆が弾幕を張っているので俺は今のところは待機中である。

人数が多い分、弾幕も当然規模が大きくなるから、あっという間に侵入者は蜂の巣になった。

蜂の巣にされたソレは床に倒れ込み、断末魔の声を小さく上げ、動かなくなった。

部屋を再び沈黙が支配した。

やがて埃が収まると、侵入者の姿が見えてきた。

俺はそれを観察してみた。

床にへばっているソイツをしげしげと眺める。

第一印象、キモい。

なにがキモいって形が想像の通り虫っぽいのだ、だが幸い巨大なGでは無かった。

全体の印象はノミみたいな感じだ。

そして何よりこれがキモいと感じる部分なんだが、

頭が二つあるのだ。

明らかに普通の生き物では無かった。

俺は基本的にバイオは4と5しかやった事はない。どうしても固定視点に慣れる事が出来なかった為だ、バイオ4、5にあんな奴はいなかった、だからバイオ2か3に出てきた奴だろう、だが俺は今床にへばっている死骸に見覚えがあった。

ブレインサッカー、それが奴の名称だった筈だ。

まだ人間のころ、たまたま立ち寄った古本屋でバイオ3の攻略本でみた事があった。

俺はその気持ち悪い容姿を何故だか覚えていた。

ブレインサッカーってのは、ノミみたいな寄生虫がウィルスの影響で大型化したものだ。

「何、あれ……」

俺が床のソレ、ブレインサッカーの情報を頭から引っ張り出している時、ジルが呟いた。

見てみるとジル顔には嫌悪感が現れていた。

奴の容姿はリッカーと並ぶ位に気持ち悪い、ジルが気持ち悪がるのも無理はなかった。

「警戒を怠るな」

「ああ、あれが一匹だけとは限らないしな。」

ミハエルが相変わらず冷静に、そしてその言葉にレオンが自分のデザートイーグルに新しいマガジンを装填しながら答えた。

二人とも僅かだが言葉から緊張がにじみ出ていた。

クレアが突然、焦った様に声を上げた。

「弾がもう無いわ!」

それは確かに焦るわな。

「新しいマガジンよ。」

ジルがクレアにマガジンを2個程わたした。

クレアは手に持つハンドガンから使いきったマガジンを抜き、新しいマガジンを入れた。

カチャリ

装填する音が静かな室内にやたらと響く。

ミハエルは一度回りを一瞥すると口を開き、そしてまた閉じた。

ミハエルは何かを言おうとしたが、しかしそれは言葉になる前に口が閉じられてしまった。

何故なら、

カサカサカサカサ！！！

先程と同じ様虫っぽい音が響いてきた。

だが明らかにさつきとは音の大きさが違った。

しかも聞き取りにくいのが、複数のカサカサ音が聞こえる。

いつ聞いても不快だな、このカサカサ音。

「ッ！まだいるの！？」

レベツカが半ば悲鳴のような声を上げる。

足音が段々近付き、それが最高潮に達した時、

キシヤアアアアア！！！！

ブレインサッカーどもが飛び込んできた。

女性陣から軽く悲鳴が上がったが、直ぐに弾幕が形成される。

ブレインサッカーどもは次々と弾幕に飛び込んでくる。だが何体かは先に飛び込んだ奴が盾になって接近してきた。

正直かなりヤバイが弾幕が形成されているから、飛び道具を持たない俺はどうする事も出来ない。

そうしている合間にも同族の死骸を盾に2体のブレインサッカーが

迫ってきていた。

奴等はレベッカのいる方に迫っている。

俺が被弾覚悟で飛びたそうとした時、

カルロスが近くにいたジルのベルトからマグナムを取りだし、

ダアンッ！ダアンッ！

重い銃声が響いた。

一体のブレインサツカーの二つの頭が落としたスイカの様に砕けた。

カルロスはアサルトライフルを左手に、マグナムを右手に構えている。

カルロスの右手のマグナムがさらに吼える。

マグナムから放たれた弾丸は、相変わらず突進を続けるブレインサツカーの双の頭を完全に砕いた。

頭の無い異形の死骸はレベッカの目の前に倒れ込んだ。

「大丈夫か！？」

カルロスは射撃音に負けないくらい大きな声で叫ぶ。

スゲーなカルロス、今のめっちゃくちゃかつこよかったよ。

キシヤアアアアア！

俺がそんな事を考えている合間も、ブレインサッカー達の突撃、いや特攻はまだ続いている。

「何かないの！？手榴弾とか！」

ジルが叫ぶ。

「生憎持ち合わせていない！」

ミハエルがそれに叫びで答えた。

状況はかなり不味い。

弾丸も無限にある訳ではないし、弾幕が途切れがちになってきた。その穴へブレインサッカーが飛び込み、それを排除する為に更に弾幕が薄くなる、そしてその薄くなった弾幕をブレインサッカーが突破する、という悪循環になりつつあった。

そして、

カチリ

弾幕を形成する上で中核を成しているレベッカのサブマシンガンが弾切れを起こした。

レベッカの顔に恐怖がにじみ出ているのが分かった。

サブマシンガンに新たにマガジンを装填する余裕など無いのだろう。

レベッカはハンドガンを取りだし、迫りくるブレインサッカーに銃口を向けた。

しかしハンドガンの連射力ではブレインサッカーの動きを止めるには力不足だった。

徐々に迫るブレインサッカー達、

俺自身、駄目かも知れないと思い始めた時だった。

「皆何かに隠れろ！」

レオンやカルロス、そしてミハエルでも無い声が聞こえた。

皆はその声に機敏に反応し、テーブルの陰等に身を隠した。

俺は図体がデカイ為、体を思いきり丸めてテーブルに隠れた。

全員が退避し終わると同時に、

ドカアアアアアン！

何かが爆発した。

ドカアアアアアン！

爆発は立て続けに起こっている。

数回の爆発の後、部屋は静かになった。

ブレインサッカー特有のあのカサカサ音はもうしていない。

俺は体を起こし、回りを見回した。

部屋は最初に入ってきた時とは対称的に、椅子やらテーブルやらが散乱している、ドア付近は爆発の影響でぼこぼこになっていた。

ふと疑問に思う。

一体誰が爆発物を投げた、もしくはわ放ったのだろうか？

俺は先程爆発が起こる前に聞こえた声の方向に顔を向けた。

そこには、

「キレイさっぱり掃除してやったぜ……」

巨大な銃、グレネードランチャーを構え、壁に寄りかかるマーヴィンが居た。

39話 時計塔その2（後書き）

感想お待ちします

40話 時計塔その3 (前書き)

終わり方が微妙

40話 時計塔その3

sideマーヴイン

激しい銃声が聞こえる。

俺はその音に目をさました。

どうやら今まで眠りこけていたらしく、頭が上手く働かない。

何故自分は生きているんだ？確かに奴等に噛まれた筈なのに。

いや、今はそんな疑問はどうでも良い、今考えるべきなのは何故銃声が聞こえるか、だ。

俺は辺りを見回した。

どうやら自分は何処かの一室にいるらしい、しかしこんな部屋は警察署には無かったから、恐らくここは警察署では無いのだろう。

キシヤアアアアア！！！

虫の様な威嚇音が聞こえてきた。

銃声も相変わらず続いている。

俺は銃声がする方へ顔を向けた。

何人かが銃を発砲している。その中にはレベッカとジルがいた。

他にも軍人が二人と警官の制服を着てるのが一人、ピンク色のジャケットを着てるのが一人、暗緑色のコートを着たとんでもなく大男が一人居た。

統一感はまるで無いが、一つだけ全員に共通している事があった。

全員が激しく緊張し、視線が一つの方向に向いている、という事だ。

明らかに危機が迫っている事が見てとれた。

俺は全員が顔を向けている方向を見た見た。

そして、

キシャアアアアアア！！！

かなり後悔した。

寝起きでぼうっとしていた頭が一気に覚める。

あれは一体何なんだ！？

今までゾンビやゾンビ化した犬、得体の知れないヌメヌメした化物物を見てきたが、今、部屋に侵入しようとしている虫の様な化け物を見たことがなかった。

心臓の鼓動が速くなっているのが分かる。

ジル達が形成する弾幕を突破し、虫の化け物がレベッカに迫った時、無意識の内に手がホルスターへと延び、ハンドガンホルスターから引き抜いた。

幸い、レベッカに迫った虫の化け物は、一人の軍人に頭を砕かれ、大事には至らなかった。

だが、まだ虫どもの突撃は続いている。

「何か無いの！？手榴弾とか！」

ジルが鳴り響く銃声に負けない様に大きな声で叫んだ。

そうだ、奴等を葬るには爆弾がいる、奴等を葬るには重火器が要るんだ。

「生憎持ち合わせていない！」

先程とは違うもう一人の軍人がジルの叫びに答えた。

ヤバイな。

俺は自分の手に握られたハンドガンを見る。

奴等はハンドガンなんかじゃ止められない。

そう思った。

なら、どうすれば良い？

今の俺に、何ができる？

俺は必死に考える。

どうすればこの状況を打開できる？

必死に考えた。

俺は何か無いかと辺りを見回す。

俺は部屋の中でも一番奥に居る。恐らく眠り込んでいたから安全な後方置かれたのだろう。

そこには俺以外にも何かがあった。

俺はそれに希望を見いだした。

そこにあったのは死体だった、だが俺が希望を見いだしたのはそれじゃ無い。

俺の目を引いたのはその死体の近くにあったバックだ。

その死体は軍服を着ている、先程レベッカを助けた奴や、ジルに答えた奴と同じ軍服だ。

なら、このバックに入っているのは何らかの装備かも知れない。

俺はバックに飛び付いた。

頼むから、何か入っていてくれよ。

緊張の余り手が震え、ファスナーが上手く開けられない。

ええい速く開け！

震える自分を叱咤し、何とかバックを開いた。

直ぐに中身を確認すべく、バックを除き込んだみたいだ

そこには、俺の思い浮かべた通りの希望の形があった。

グレネードランチャーだ。

バックにはかなりの量の40ミリ弾が入っている。

以前暴動の鎮圧の為、にこれと同じ型のグレネードランチャーを使った事があった。

使い方は分かっている。

俺は直ぐにグレネードランチャーに弾を込め、安定しない体を壁に預け、虫どもに狙いを付けた。

そして、

「皆何かに隠れろ！」

今出せる最大限の声でそう告げた。

皆は急いで何かに隠れている。

弾幕が消えた事で虫どもはどんどん部屋に入ってくる。

口の端が自然とつり上がる。

くたばれ、虫ども！

俺は引き金を引いた。

それからの事はよく覚えていない。

だが、気が付いたら虫どもは全て死んでいた。

「キレイさっぱり掃除してやったぜ……………」

思わずそう呟いていた。

side上総君

どうやら最初見つけたバックに、グレネードランチャーが入っていたらしく、マーヴィンはそれを使ってブレインサッカーの軍団を撃破したらしい。

まさかの展開だったな。ホントそう思うよ。

肝心のマーヴィンはブレインサッカーを撃退して、気が抜けたらしく、今はへばっていてレベッカに手当てされている。

「皆、どれだけ弾薬が残っている？」

アサルトライフルに新しいマガジンを装填したミハエルが言った。

「コイツのマガジンがあとフルで二つ、ハンドガンのマガジンが三つだ。」

カルロスが答える。

「マガジンがあと二つ、デザートイーグルにはまだ三発入っている。」

レオンがマガジンを確認しながら言った。

一様に表情は良くない。

レベッカとクレアは聞き流したが、二人とも同じ様な感じだ。

まあ要するに、弾が少なくなってきたって事だ。

ミハエルはその言葉を受けて苦い顔をしている。

ジルに至ってはため息をついていた。

やがてミハエルは、顎に手を当て考え込んでしまった。

そして、

「カズサ、君に前衛を任せたいのだが、引き受けてくれるだろうか？」

まあ、そうくると思ったけどね。

俺は首を縦に振った。

40話 時計塔その3（後書き）

感想お待ちします

41話

時計塔その4（前書き）

短めです

41話 時計塔その4

side上総君

皆さんの弾薬の数が少なくなってきたので、俺が前衛になりました。

マーヴィンは何とか立てる状態にまで回復したので、今はレオンに肩を貸してもらってます。

マーヴィンがブレインサッカー軍団を撃破するのに使ったグレネードランチャーは、今はジルが持ってます。今のマーヴィンじゃ多分ろくに狙いなんて付けられないだろうし。

カサカサ！

おっと！

いきなりブレインサッカーが飛び出してきたが、思いきり蹴り飛ばした。

壁にぶつかり、手足が色んな方向に曲がって動かなくなるブレインサッカー。

前衛が俺だから何らかの障害が出てきた場合、必然的に何とかするのは俺な訳で、「キシヤアアアアア！」ドカッ！（殴り飛ばされるブレインサッカー）こうしてさっきから懲りずに襲ってくるブレインサッカーやらやたらとでかい蜘蛛やらゾンビやらを叩き潰しているのだ。

正直、余り気分のいいものでは無い。

ゾンビもそうなのだが、汚いんだよ、奴等。

もう殴ると何処かしらから体液が吹き出してくるし、脚とか簡単にもげるからもう汚い汚い。そのもげた脚もピクピク動いてるからなお気持ち悪い。

でも、レベツカらの弾薬はもうあまり残っていないんし、なら体術だけで奴等を葬れる俺が何とかするのが一番良いんだろうけど、「カサカサ！」バキィ！（壁に叩きつけられる巨大な蜘蛛）

なんだかなあ……

なんか心がブルーだわあ。

「どうした？何かあるのか？」

ミハエルに聞かれた。

どうやら考え込んで立ち止まっていたようだ。

へーへー問題なんて無いですよ。

俺は再びある「カサカサ！」……………

ムキィ！！！！

sideレベッカ

なんだろう、カズサがもの凄くやさぐれてる気がする。

あの気持ちの悪い虫の襲撃で、弾薬がかなり消費してしまったから、カズサに前衛を担当してもらってるのだけれど……

なんかカズサの背中から哀愁が漂ってるし。

カズサって虫が嫌いなのかな？ いや、でもあのサイズの虫なら誰でも嫌いだよね……

カズサ、ファイト、私は応援してるから！

「歯車が欠けてるわね……」

ジルが残念そうに呟く。

私は思わずため息をついた。

またスペンサーの悪趣味な仕掛けに付き合わないといけないの？……

私達はなんとかカズサを鼓舞して、時計塔の中を探索していた、そしてようやく鐘を鳴らす機械のある部屋にたどり着いたのだった。

だが肝心の機械の歯車が一つ欠けている。

機械に強いらしいカルロスが動かせないか試しているが、多分歯車を手に入れない限り、動く事は無いはずだ。

「駄目だな。」

ほらね。

「歯車がないと動かない。」

カルロスが手を払いながら言った。

ラクーンシティにはアンブレラがかなり関わっている、何せ市民の大半がアンブレラに就職しているのだ。

なら、建造物がアンブレラの趣味で造られていてもおかしくは無い。

歯車を手に入れるには、一昔前のスパイ映画みたいな仕掛けを解かないといけないのだ。

洋館でも似たような仕掛けを何度か解いた、中には失敗すれば殺されるような仕掛けもあった。

ホントにスペンサーはどんな神経をしているのか、本気で問いただしたくなってきた。

「えっと、齒車を探さないといけないの？」

カルロスの言葉を受けて、クレアが確認する様に言う。

「そうよ、そうなんだけど……」

ジルが途中で言葉を切って、こちらを見ている。

私に言えって事なのかな？

「その齒車を手に入れるには簡単にはいかないって事よ。」

私が言うと、

「簡単にはいかないって、どういう事なんだ？」

レオンが聞いてきた。

「どこぞのスパイ映画みたいな仕掛けを解かないといけないのよ。」

ジルがレオンの問いに答えた。

「どんな仕掛けなの？」

クレアが聞く。

「言えるのは馬鹿みたいでホントに死ぬほど危ないって事ね。」

ジルの言葉が誇張では無い、というのは嫌と言うほど分かっている。

「どちらにせよ、我々は歯車を探さないといけないのだな？」

ミハエルが言う。

「ええ、そうね。」

ジルが答えた。

「多分歯車はこの建物の中にあるわ。」

「なら、探しに行こう。」

皆が準備を始めた。

カズサは何となく嫌そうな雰囲気を感じている。

「ほら、カズサ行くわよ。」

side上総君

「ほら、カズサ行くわよ。」

……分かってるさ

はあ、また虫どもとガチンコか、やだなあ。

「カズサ、行くぞ。」

ミハエル、そう急かすなって。

へーへーいきやいいんでしょ。

俺は前衛に着いた。

41話 時計塔その4（後書き）

感想お待ちします

42話 時計塔その5 (前書き)

ちよつと難産だったり

42話 時計塔その5

side上総君

再度探索した結果、なんか仕掛けみたいなものを見つける事ができた。

だが、それまでの道中で俺は何十体というブレインサッカーや大蜘蛛、たまにゾンビを潰してきた。

正直、メンタル面へのダメージがでかい。

うえ、思い出したら気持ち悪くなってきた。

……何か他の事を考えよう、何もしてないとさっきのR指定な映像がフラッシュバックしてしまう。

えーと、今仕掛けを解説する為に、ジルらがその仕掛けの前であーでも無い、こーでも無い、と唸ってます。ちなみにミハエルはこういう謎解きは苦手らしく、部屋の入り口を監視してます。

かくいう俺も謎解きは大の苦手だから、部屋の隅に腰を下ろして休憩してます。

俺の謎解きの苦手さは半端無いのだ。

初代のバイオ1を友達の家でやった時、3日掛けてもほとんど進まず、結局諦めた事があるくらいなのだ。あとバイオ4のパズルの仕掛けに四時間かかったり、正直ラスボスよりも謎解きにかかった時

間の方が長いくらいなのだ。

そんな訳で俺は謎解きに参加してません。

「ちょっと！それはそっちじゃなくてこっちよ！」

「絶対こっちだって！」

ジルとカルロスが相談(?)しつつ謎解きしてるけど、あれじゃまだ時間掛かりそうだな。

俺がジル達の奮闘をぼくっとながら眺めてると、

「カズサ、ちょっといい？」

レベッカに声をかけられた。

なんね？

俺が顔を向けると、レベッカは手をこちらに差し出していた。

その手には缶のオレンジジュースが握られている。

「ハイ、ご褒美よ。」

ご褒美？

俺ってなんかしたっけ？

俺が首を傾げると、

「ほら、貴方ここに来るまで前衛だったでしょ？それで疲れてるかな、と思って。」

そう言って微笑むレベッカ。

さっきまでのやさぐれてた気分が一気に晴れた。

安らぐってのはきっとこういう事を言うんだろな。

単純？美人の女の子に微笑まれて心が安らげない男子なんて、この世にいるのか？

俺は差し出されたオレンジジュースを受け取った。

つかこのジュースは一体どこからとってきたんかな？

「さっきの部屋に自動販売機があったでしょ、思いきり蹴ったら出てきたのよ。」

そんな俺の疑問を感じ取ったのか、手に入れた方法を明かすレベッカ、物凄くいい笑顔だ。

……STARSがそれで良いのかって疑問は心の奥底にしまっておこう。

俺はレベッカから缶ジュースを受け取った。

握力が半端無いから気を付けないと。

そうつと缶を持ちながら、プルトップに指をかける。

スカッ

あれ？

スカッ

スカッ

ゆ、指がプルトップに引っ掛からない！

タイラントである俺の手のひらは、普通の人間と比べてかなりビツクサイズで尚且つつ分厚い手袋までしているのだ。普通の人間でさえ手袋してたら開けにくいのに、俺の手で開けられる訳が無かった。

しかし、俺にはどうしても開けなくてはいいけない理由があるのだ。

レベッカのせつかくの好意を無下にする訳にはいかないのだ！

だから開け、開くのだ！缶ジュース！！！！

「……何してるの？」

俺が缶ジュースをひたすらかしかしやってるのを見たレベッカは、

「ああ、開けられないのね、貸して。」

手を差し出してきた。

はあ、バレたか、仕方ないな。

俺はレベッカに缶ジュースを渡し、開けてもらった。

「ハイ、開いたわよ。」

そう言って再び俺に缶ジュースを渡すレベッカ。

「ありがとう」

俺はレベッカにお礼を言い、レベッカからユースを受け取り、早速飲んでみた。

冷たくてよく冷えたジュースだ。

残念ながら俺はタイラントなので味覚が抑えられてるから、味はよく分からないが、今はそんな事はどうでも良い。

一頻り飲み終えると、

「さっきは大変だったでしょ？」

唐突にレベッカが言った。

「貴方一人で全部の敵に対処すごく大変だったんでしょ？」

そういつてこちらを見るレベッカ、その表情は少し心配そうだ。

「いくらタイラントだからって、あれは大変よね……」

段々トーンが下がっていくレベツカ。

バインダーどこいった？

今すぐなにか返事をしないとイケない気がする。

「仕方ないとはいえ、また貴方を危険な目に会わせちゃった……」

ぼそぼそ喋るレベツカ。

これは不味い。

バインダーマジでどこいった！？

「また、貴方を……」

あつた！

俺は直ぐにバインダーの紙に、

「別に危険じゃ無かった。」

と、書いた。

それを見たレベツカは、

「……危険じゃ無かった？でも貴方はなんだか大変そうだったし、
今も休んでるじゃない。」

俺の言葉を疑っている。

どうやら嘘を言って安心させようとしてる、と思われているらしい。

「あれには理由が有るんだ。」

本当は言いたく無いが、仕方ないだろう。

「理由？」

レベッカも俺の次にくるであろう答えを待っている。

俺は一呼吸置いて、

「虫が嫌いなんだ。」

と、紙に書いた。

s i d e レベッカ

「虫が嫌いなんだ。」

カズサの言う理由とはこれの事なのだろうか？

気付いたら笑っていた。

可笑しくてたまらない、生物兵器が虫が嫌いだなんて。

「それ、本当なの？」

一応だが確認してみた。

それを聞いたカズサは、バインダーに、

「本当だ。」

と、書いた。

その顔はいたって真面目だ。

ホント、可笑しくてたまらない。

カズサは本当にこういうところが人間らしいと思う。

「虫は気持ち悪いし汚いから嫌いだ。」

再びカズサが理由を紙に書いた。

「生物兵器なのに虫が嫌いなの？」

込み上げてくる笑いをどうにか抑え、もう一度確認してみた。

カズサは少し考えた後、

首を縦に振った。

直後私は思いきり笑ってしまった。

カズサが咎めるような目でこちらを見ている。

「ごめんなさい、我慢できなくなつて。」

幸い、ジル達は仕掛けを解くのに夢中な様で私の笑い声は聞こえなかったらしい。

「でもありがとうね、何だか清々しいわ。」

笑ったのは久し振りだった。

「あまり他には言わないでくれ。恥ずかしいから。」

「オーケー、秘密にしといてあげるわ。」

それを聞き、頷くカズサ。

「レベッカ！貴方はどっちだと思う？」

いきなりジルに声をかけられた。

「いや、絶対こっちだって！そう思うだろう？」

同じく叫ぶカルロス。

「呼ばれてるみたいだからちょっと行ってくるわね。」

私はカズサにそう告げてジルらの方に向かった。

42話 時計塔その5（後書き）

感想お待ちします

43話 時計塔と他の人（前書き）

何だかマンネリ化してきた様な……

不味いな

あ、でも出来るだけ更新はします

多分………

43話 時計塔と他の人

side上総君

「ほら！やっぱり違うじゃない！」

「えー、絶対にこうだと思ったんだけどな……」

「やっぱりこうじゃないですか？」

……終わんねえな。

side????

ゾンビじゃない普通の人が居なくなっってからどれくらい時間が経っただろう。

あの人は警察署に初めから居た人間じゃ無かった。あれ？でも一人は元から居たような……？

でも、あの人はゾンビじゃ無かった。

初めは救援隊かと思ったけど、どうやら違うようだ。

だってその中に明らかに人間じゃない大男が居たから。

何せあの大男は、警察署に居た大人を簡単にスライスしてしまう舌の長い化け物をあつという間にミンチにしまった。

その光景を見た時に、換気シャフトの中で叫ばなかった自分を誉めてやりたいくらいだ。

その大男はどうやら喋る事がらしく、他の人間とは筆談をして話をしていた。

その人達は警察署を行ったり来たりして、生存者を集めているらしい。

彼らは私を見つけたら直ぐに保護してくれるだろう。でもお母さんに警察署に居るよう言われていたし、何より私は手間の掛かる子どもでは無いのだ。一人でも大丈夫だ。

私は食べ終わったキャンディーの包み紙を捨て、新たにキャンディーを補充する為にシャフトの中を動き出した。

街がゾンビだらけになる直前にお母さんからもらったペンダントを握る。

大丈夫、私はきっと生き残る。だって私は子どもじゃ無いら。

それに、このペンダントはお守りだとお母さんが言っていた。

きつと大丈夫だ。

s i d e ニ コ ラ イ

俺は必死に怒りを抑えていた。

これはゲームだ、俺が必ず勝つという筋書きの。

奴等は絶対にたどり着く筈が無かった。

奴等は何人かの生存者を纏め、行動しているようだったがそれは逆効果だ。

何せ奴等の中にS T A R S が二人も混じっているのだ。

この街には、アンブレラが造り上げた究極の有機生命体、タイラントが使用されている。それらはどれも強力で、完全武装の兵士30人と戦える力をもつとカタログデータにある。

その中でも一際強力なものはS T A R S を排除するように命令されていた。

その一際強力なタイラントは、S T A R S がアンブレラに与えた損害への復讐の意味を込め、ネメシスと呼ばれている。

ネメシスは力の三割も使わずに成人男性を真つ二つに出来る。

ネメシスに終われる事になった奴等に、生き残る可能性等無い筈だった。

それがどうした事か、奴等は生き残っていた。

それも時計塔というもう少しで脱出出来るような場所にたどり着いていた。

あり得ない。

だが、現実には奴等は生きていた。

俺はその理由を探した。

答えは簡単かつ明瞭、しかしどう考えてもあり得ない事だった。

時計塔に入る直前の奴等を見つけた時に、心底驚いた。

暗い緑のトレンチコートを着た灰色の肌の大男が奴等に付き添っていた。

この時ばかりは自分の目を疑った。

奴等にはタイラントが味方していたのだ。

理由は分からない、だがタイラントが味方していれば大抵のゾンビや生物兵器など恐れる必用は無くなる。

しかもあのタイラントは、筆談をしてコミュニケーションを取っていたのだ。

疑問は尽きない。

何故？ 何故だ？

何故俺より劣る奴等が生き残っている？

何故奴等にタイラントが味方している？

何故なんだ？

色々と考えている内に、奴等は時計塔に入ってしまった。

その光景を見て、疑問を抑え再び怒りが沸き上がってくる。

俺は今すぐ時計塔に飛び込んで奴等を始末したい衝動にかられたが、今の装備では奴等を殺す事が出来てもあのタイラントを殺す事が出来ない。

そう自分に言い聞かせ、怒りを抑えるのに数分の時間を用とした。
今思えばミハエルをきちんと始末しなかった自分が悪いのかもしれない。

どうせ直ぐに死ぬだろうと楽観した自分が悪いのかもしれない。

確かに俺はミスをした、それは敵にポイントを与えてしまったのも

事実だ。だがそれも些細な事に過ぎない、結局は俺が必ず勝つのだ。
怒りに任せてこれ以上ミスを重ねる訳にはいかない。

俺は足早にその場を去った。

side???

状況はあまり良くない。

ウェスカーも無茶を言うものだ。

この仕事を初めてもう長い間が経つが、ゾンビの支配する街で仕事をしたのはこれが初めてだった。

あの男に雇われてこの街に来たが、私が来た時には街にはゾンビが溢れていた。

そんな中でウィルスを回収しろだなんて、無茶も良いところだわ。

でも、

私はニヤリと笑ってしまった。

無茶である方がやりがいがあるのも事実よね。

私はスリルを求めている、ウェスカーは私にスリルのある仕事をくれる。

素晴らしい利害関係だ。

あの男は何処か掴み所が無いが、どうせ何時かは裏切るのだ、それはウェスカーも分かっているだろうし彼もそうするだろうから別に問題では無かった。

今も問題が無いと言えば嘘になるが、そこはどうかなるだろう。

スパイには運も必用だし、私はそれにピッタリな程運が良い。

今回もウェスカーを満足させる結果を出せるだろう。

43話 時計塔と他の人（後書き）

新連載の予定を繰り上げようかな…

感想お待ちしております

44話

時計塔と他の人その2（前書き）

短めです

44話 時計塔と他の人その2

side上総君

「やっぱりヒントの解釈が違うのかしら？」

「俺はこのままでいけると思うぞ。」

「うーん、私も解釈が違うような気がします。」

仕掛けを一時放置し、話し合う三人。

もう謎解きに二時間も掛かっている。

余りに時間が掛かっている為、しびれを切らしたクレアが勝手に仕掛けをいじり始めた程だ。

三人は話に熱中していて、さっきから仕掛けをクレアが弄っている事に気が付いてない。

「解るのか？」

一応クレアに聞いてみた。

「ううん、適当。」

あ、そうですか。

さすがクリスの妹、細かい事は苦手なんかな？

しかし、適当にやって解けたら苦労は「カチャリ」「あ、できた。」

「「「え?」「」」

sideウエスカー

非常に興味深い事が分かった。

どうやらアンブレラは貴重なタイラントを一つ操作出来なくしてしまっただけらしい。

あの組織らしい基本的かつ致命的なミスだ。

奴等は洋館での事から何も学ばなかったようだ。

せっかく私が体を張って証明したというのに。

まあ、そんな事は今はどうでも良い。アンブレラはいずれ崩壊する。

興味深いというのは、操作出来なくなったタイラントが明らかに自分の意思を持って行動しているという事だ。

私はここ数日間の間にラクーンに配置された監視カメラで撮影された映像をチェックしてみたところ、面白いものを幾つか見つける事が出来た。

それらは数日前から数時間前のものだ。

そこに写っていたのは、人間と協力するタイラントの姿だった。

初めてこの映像を見つけた時、とてつもなく驚いた。

基本的に生物兵器に知性は有っても自我は無い、それは自我が有っては運用に支障をきたす恐れが有るからだ。必用なのは指定された物事を効果的に成し遂げる知性のみだ。

それはタイラントも例外では無い。

今でこそ完成されているが、試作品にはほとんど知性が無く、視界に入る物は全て破壊しつくすような代物だった。まあ、戦闘能力は申し分無かったが。

だが、映像に写るタイラントは明らかに自我を持っているとしか思えない行動をしていたのだ。

ケルベロスに襲われた人間を助けたり、ネメシスと遭遇した時には人間を抱えてロケットランチャーを避けたりした。

別にここまでなら、人間を助けるようプログラムされていれば可能かもしれない、しかし私は決定的な物を見た。

そのタイラントは、意志疎通を図るため筆談を行っていたのだ。

これはあり得ない事だ。

今までのどの生物兵器の実験にもこんな事は報告されていない。

同種間で何らかのコミュニケーションをとる生物兵器は幾つか有るが、人間とコミュニケーションをとる事が出来る生物兵器など今まで居なかった。

一体このタイラントは何なのか？

普通ではあり得ない事をやってのけるこのタイラントは一体どうなっているのか？

次々と疑問が頭を過る。

面白い、非常に面白いぞ。

私は何時しかこのタイラントに興味を持っていた。

最初はたんにアンブレラを追いつめる証拠としか考えていなかったが、どうやらそれは大間違いだったようだ。

使える、このタイラントは。

私の計画に使えるかもしれない。

上手くやれば私の計画を大きく進める事が出来るかもしれない。

だが、残念な事にそのタイラントは現在監視カメラの無い所にいるようだ。先程からどのカメラにも写っていない。

まさかくたばってしまった訳では無いだろう、もう少しこの興味深い観察を続ける事にしよう。

私はモニターの操作を続けた。

side上総君

「「「……………」」」

一言で表すなら多大な徒労、と言ったところか。

ジル、カルロス、レベツカの三人は今現在、orzな雰囲気醸し出している。

まあ、二時間掛けて解けなかったのを適当に、しかも一瞬で解かれたらこうなるよな。

この場合仕掛けを適当にやって解いたクレアが凄いのか、その仕掛けを二時間やっても解けなかった三人が凄いのかどっちだろう？

多分両方だろうな。

後で慰めところ。

なんか、

「……結構頑張ったのに」

とか聞こえるし。

フォローは必須だな。

「ご苦労だったな、歯車も手に入った事だしあの機械の有った部屋に戻るでしょう。」

ミハエルがそう皆に告げて準備を促した。

そうして、

「カズサ、前衛を頼む。」

と、言われた。

分かっていますよ。

44話 時計塔と他の人その2（後書き）

感想お待ちします

45話 時計塔脱出（前書き）

誤字直しました

45話 時計塔脱出

side上総君

再び俺前衛にて進行中。

が、有り難いことに一向に虫とかゾンビが現れない。

どうした？俺に怖じけ付いたのか？

腰抜け共、出てこいやあ！

カサカサカサ……………

……今の嘘です、すいません出てこないで下さい。

キシャアアアア……！！

きゃー！

sideジル

あの二時間は一体何だったのだろう……

あれだけ頑張ったのに、クレアに適当にやって開けられるとは、非常に不服だ。

今私達は菌車を手に入れて、あの機械の有った部屋に向かっている。

勿論前衛はカズサだ。

私達の弾薬は限られているし、私達が戦うのはリスクが大きすぎるのだ。その点カズサは銃を使わないし、タイラントは人間よりとても頑丈だ。別にタイラントだから大丈夫と思っている訳ではない、今は彼の力が必用なのだ。

まあ、肝心のカズサはアンブレラ製品の虫と戦う時、凄く嫌そうだが。

そこは我慢してもらおうしかない。

ドゲシッ！（飛び出してきた巨大な虫が吹き飛ばす）

カズサは沸いてくる虫なんかには負けないだろうし、多分大丈夫だろう。

だが、何だかカズサの後ろ姿に哀愁を感じるのは何故だろう。

吹き飛ばした虫の数が增えるに比例して哀愁も増加しているように感じる。

頑張れカズサ、私は応援してるわ。

side 上総君

鬱、ですね、ハイ。

途中まで全然出てこなかったのに、何でいきなりわんさか出てくるかな！

ん？出てこいやあって言ってたじゃないかって？いやあ記憶に御座いませんな、ええちつとも。

そんなこんなで虫とかゾンビを蹴散らしながら進むこと数十分、

「よし、ここだな。」

着きました。

ちょっとミハエルさん、俺が言おうとした事先に言わないでよ。虫退治したのは俺なんだぞ？

「ようやく街から出られるのね。」

ジルが嬉しそうに言う。

その顔は良い笑顔だ。

まあ、この街から出られるなら誰でも嬉しいよな。

カルロスやクレアも何だか嬉しそうだ。

「それじゃ早速やりましょう。」

レベツカが手に入れた歯車を持ちながら言う。

レベツカも嬉しそうだね。

ぞろぞろと部屋に入っていく俺達。

「それじゃさっさとやってこの街からおさらばしようぜ。」

カルロスが言う。

皆楽しそうで良いね。

「じゃあいくわよ。」

レベツカが歯車を嵌めるとカチリ、という音がして歯車が嵌まった。

歯車が嵌まると、それを合図に機械が動き出した。

「帰ったら一番に何する？」

カルロスがジルに聞く。

「そうね、まずシャワーを浴びるわね。」

ジルがその問に答える。

仲の良いこって。

「私はクリスを探すわ、まだ見つかってないし。」

なんて兄思いの妹だ、クリスって中々幸せものだな。

クリスめ、こんな美人に心配してもらえるなんて、羨ましい。

「とにかく寝たいよ。」

レオンが呟いた。

「私もゆっくり休むわ。」

レベツカがレオンに同意し、言う。

「カズサ、貴方は何をしたい？」

おおいきなり俺に振りますか、レベツカさん。

うむ、まあ振られたからには答えようではないか。

「とりあえず、」

「とりあえず？」

筆談ではどうしても発生する時間差で、先に書いた方をレベッカが読み上げた。

「着替えたい。」

だってさ、さんざんゾンビとかハンターとかブレインサッカーとかを粉砕して来たから、もうコートに色々付いてるんだよね、暗緑色だから分かりにくいけし、ちよくちよく払ってるけど。

それにネメシスと格闘した時に破れちゃったところもあるし、腹の部分なんか図らずもへそだしになってるし。

それを見たレベッカは、

「貴方らしいわね。」

そう言って薄く笑った。

起動させた鐘が鳴り響く中、俺達はこの街の惨状に似合わないような談笑をしていた。

さて、ここで原作を思い出して貰いたい。

確か原作ではジルが鐘を起動させる事に成功する。

しかし、バイオ3はそこで終わりじゃ無かった筈だ。

脱出にはカルロスが操縦するヘリでラクーンから脱出した筈。

つまりは時計塔でエンドでは無かったという事だ。

ではそれは何故だろうか？

いくらアンブレラとはいえ、迎えのヘリを寄越さないなんて事は無い筈だ。

答えは簡単。

「スタアアアアズ！！！」

コイツだよ。

ネメシスが迎えのヘリをロケットランチャーで撃ち落としたからさ。

やはり来たか。

原作と同じなら来るとは思ってたが、こうもタイミング良く来るとは。少し予想外デス。

「嘘でしょ、こんな時に……」

ジルが呟く。

皆一様に落胆が表情に表れている。

そりゃそうだな。もう少しで脱出出来る！って時に一番出会いたくない奴に出会ってしまったんだからね。

俺は皆を放って扉に近づく。

「何処へ行くの？」

案の定レベッカに呼び止められた。

その顔には落胆と困惑が滲み出ている。

見渡してみたら全員が俺を見ていた。

いや、皆本当に分からんのかい？

「片付けてくる。」

俺はそれだけ言って部屋を出た。

ここで脱出の手段を失う訳にはいかんだよ。

俺が外に出る為、廊下を歩いていると、

「待って！」

呼び止められた。

「私達も行くわ！」

レベッカがそう宣言する。

良く見れば各々自分の得物を準備している。

そうこなくつちな。

俺は首を縦に振った。

45話 時計塔脱出（後書き）

感想お待ちします

46話 時計塔脱出その2（前書き）

日光を浴びながらの執筆はきついです

46話 時計塔脱出その2

side上総君

スタアアアアズ!!!

奴は時計塔の側にある然程大きくない建物の屋根にいて吼えていた。
相変わらず耳障りだ。

まるで血を求める野獣のような叫びを上げるネメシスは、形態が変化していた。

俺と同じようなコートはボロボロに破れ、上半身は露出している、しかしその上半身は度重なる被弾からか増強され、まるで筋肉の塊のようだ。右腕は無くなっていてそれを触手が補っている。

明らかに第二形態だ。

再びネメシスが吼える。

不味いな、ついカッコつけて出てきてしまったが、これは不味い。

大量生産品と少数生産品ではどちらが強いかと聞かれたら、例外も無くはないが基本的に少数生産品の方が強い事が多い。

数を揃る大量生産品に対して、数よりも質を重視する場合が少数生産品には多いからだ。

タイラントである俺だが、この街にくる前に研究員ズから聞いた話から考えるに、俺は明らかに大量生産を意識したタイプのタイラントだ。

実際に俺のタイプのタイラントはバイオ2以外にも登場する事が多々ある。

対するネメシスは、タイラントに寄生生物を寄生させ、知能や回復能力を底上げしたものだ。

知能では元人間の俺が勝っているが、力は拮抗しているし回復能力はネメシスの方が圧倒的に上だ。しかもネメシスには触手による攻撃等、俺には無い攻撃方法を持っている。それだけ攻撃の引き出しが大きいのだ。

現に俺は一度ネメシスとで殺りあって負けた事がある。

つまりはガチンコなら俺が不利なのだ。

バンッ！

レオンのデザートイーグルが吼え、ネメシスの肉が弾ける。

しかしネメシスはそれを気にもとめず屋根から降りてきた。

ズシンという音と共に着地するネメシス。その鈍い音とは違いその着地は無骨で荒々しい。

ネメシスがゆっくりと胴を起こす。

そして、

スタアアアアアアズ！！！！

今までで一番大きな叫びを上げた。

レベッカやジル達はあまりの音量に耳を押さえている。

俺は耳こそ押さえなかったが、多分端から見たら物凄い顔をしかめてると思う。

バンツ！

銃声が響く。

誰かがネメシスの叫びに耐えながら発砲したのだろう。

弾丸はネメシスの頭に直撃した。

ネメシスは怒りの声を上げる。

それを引き金にレベッカ達が銃撃を開始する。

確かにネメシスは強力だが、奴はたった一人なのだ。こちらには俺を含めて七人、しかも全員が銃で武装しているのだ。

銃撃は直ぐに弾幕を形成する。

何せアサルトライフルが二人とサブマシンガンが一人いるのだ。その弾幕の密度は物体を一瞬で挽き肉にしてしまうだろう。

それを知ってか知らずか、ネメシスは高速で突進を開始、接近してきた。

余りに高速で接近してきた為、弾幕が乱れ始めた。

唸り声を上げながら突進するネメシス。

悲鳴を上げるクレア。

ネメシスは握り固めた拳をクレアに振り下ろそうとした。

そうはいかん。

俺はネメシスの顔面に全力でドロップキックを放った。

ドカアッ！

生体どうしの衝突とは思えないような音が響き、折れた歯を吹きながら盛大に吹き飛ぶネメシス。

俺を忘れちゃ困るんだよ。

何せネメシスの突進の勢いと俺のドロップキックの勢いとが合わさったのだ、その衝撃は並みの人間なら粉々になるだろう。

だが残念ながらネメシスは普通の人間では無い、吹き飛んだものの、直ぐに立ち上がった。

距離が離れた事で再び弾幕が形成される。

弾幕に包まれるネメシス。その皮膚のあらゆる部分がはぜている。

……中々にグロいな。

なんか目の前で生き物から直に挽き肉を作ってるような感じだ。

突然弾幕が止まった。

え、何？なんか起きた？

「カズサ、今よ！」

あ、そういう事ですか。

つまり俺が決めろと。

ネメシスはあらゆる部分を撃ち抜かれ、もはやボロ雑巾と化している。

俺としてはあんまり近付きたくないが、折角の機会だ、殺らない手は無い。

俺はネメシスに近付き、脚をつかんだ。

ズタズタになったネメシスに抵抗する力はない。

お返しをさせてもらうよ！

俺はネメシスの両足を脇に挟み、がっちり固定する。

お前に殺られた時、結構痛かったんだからな！

俺は自分を軸にネメシスを掴んだまま回転を始める。

所謂ジャイアントスイングというやつだ。

ボロボロになったネメシスの脚から繊維が切れるような音がするが
気にしな―い！

どんどん回転の勢いを強める俺、唸り声を上げるネメシス。

そして、

ドゴオオオオオオン！

勢いが最高潮に達した時、パッと手を離れた。

回転の勢いのまま飛んでいき、さっきネメシスが屋根に乗っていた
建物に直撃、建物は崩落しネメシスもその瓦礫の中に埋まった。

思いしったか。

sideレベッカ

弾幕でズタズタになった化け物を、カズサがジャイアントスイングして瓦礫の中に埋めてしまった。

改めてカズサが人間では無いと思い知らされた。

あの状態ではさすがの化け物もう動けないだろう。

アンブレラの化け物ほとんどもなくタフなようだが、あれではもし死んでなかったとしてもしばらくは動けない筈だ。

もつとも、化け物が動けるようになるまでに私達はラクーンを脱出してるでしょうけどね。

「……死んだの？」

クレアが不安そうに聞いてきた。

「分からないわ、でもしばらくは動けないと思う。」

クレアの疑問にジルが答えた。

皆に安堵が広がっていく。

「生きてこの街から脱出出来るんだな。」

カルロスが呟く。

ちょうどタイミング良く、ヘリの駆動音が辺りに聞こえ始めた。

これでハッピーエンドね。

46話 時計塔脱出その2（後書き）

感想お待ちします

47話 不可能（前書き）

ふと思う

なんかコメディーじゃ無くなってきたな

47話 不可能

sideレベッカ

「俺はそのへりに乗る事が出来ない。」

一瞬時間が止まったように思えた。

「……な、何で？」

その言葉を発するのにも時間が掛かった。

皆啞然としてカズサを見ている。

そして全員が同じ疑問を持っているだろう。

何故貴方はへりに乗れないの？

こうなったのには理由があった。

へりのホバリング音が段々と大きくなり、ついにへりがやって来た。

やって来たのは割と大型のヘリだった。少なくともラクーン市警に配備されていたヘリよりは大きかった。

クリスとかならず詳しく解るのだろうが、あいにく私はヘリに対して専門的な知識は無かった。

それでもあの大きさなら、この人数でも楽に乗る事が出来るだろう。

そしてカズサも乗れる筈だ。

実の所、カズサがヘリに乗れるか心配だった。

カズサはタイラントだから当然体格は非常に大きい、それに伴って体重も重いだろう。

もし、ヘリが小さくてカズサが乗る事が出来なかったらどうしようと思っていたのだ。

だからヘリの大きさをみて凄く安心した。

ヘリが近付き、パイロットの顔が分かる程になった。

髭を剃って優しい笑みを浮かべる男のパイロットだ。

不意にヘリの後部のドアが開け放たれた。

「場所が小さすぎて降りられない、ハーネスを降ろすからそれを使ってくれ。」

拡声器越しに声が響いた。

「OK、わかったわ!」

ジルがそれに大きな声で返す。

それを聞いて、ヘリは弱冠降下して空中に停止して、後部のドアからハーネスが投げられる。

ミハエルは落ちてきたハーネスを掴むと、

「怪我人から先に行かせよう。」

と言った。

確かにマーヴィンは肩を借りれば立てる程に回復していたが、怪我人である事には変わりはない、私達は直ぐに賛成した。

マーヴィンは化け物と戦う間、時計塔の中の鍵つきの部屋で休んでいたのも、今はカズサに支えられている。

「何だか悪いな。」

そう呟くマーヴィン。

「いいえ、貴方は怪我をしてるのよ、バンドエイド位じゃ治らないね、だから貴方が先に行くのが正しいのよ。」

ジル言った。

マーヴィンはミハエルに手伝わねながらハーネスに固定され、上がっていった。

マーヴィンのハーネスの固定を手伝う途中、ミハエルは

「誰から上がるか決めておいた方が良い、もめると面倒だ。」

「そうだな。」

レオンがそれに答えた。

「次はクレアだろう。」

レオンが確認するように皆の顔を見る。

私は直ぐに賛成した。

だって彼女はこの中で唯一の民間人だ、本人から聞いたところ大学生らしいし、ただクリスの妹でクリスを探しにこの街に探しに来ただ。

話は途中で議論が起きることなく進んだ。

そして、カズサを何番目にするかという話になった時だった。

「カズサは何番目が良い？」

一応確認の為私が聞くと、

「俺はいいよ」

とカズサは紙に書いた。

「いってどういう事だ？」

カルロスがカズサに問う。

「俺はそのへりに乗る事が出来ない。」

side 上総君

「俺はそのへりに乗る事が出来ない。」

あらゝ皆固まっちゃって。

でもこれは元々決めてた事なんだよね。

俺はラクーンからの脱出はバイオ2の方法でいこうと考えていたんだが、それにはきちんとした理由があるんだ。

迎えにくるへりが小型だったら体重の重い俺が乗れないってのもあるが、本当の理由は他にある。

迎えにくるヘリは元々UBCSを回収する為のものだ、そしてUBCSはアンブレラの私兵組織だ。

と、いうことは迎えにくるヘリは当然アンブレラのものになる。

アンブレラのもの、ということは当然アンブレラが管理する場所に帰還するだろう。

俺がヘリに乗れない理由はこれなんだ。

俺はタイラントでアンブレラの持ち物だが、今はアンブレラを裏切った状態だ、アンブレラはタイラントが裏切るなんて事は予想しない、というか生物兵器が裏切るなんてあり得ない事だろうから俺が裏切った原因を調べたがるだろう。

アンブレラに拘束されるなんて事は絶対にごめんだ。

俺の力なら逃げ出す事は難しくは無いだろうが、それではレベッカ達に迷惑をかけてしまうだろう。というか俺がレベッカと一緒に行動するだけでアンブレラに拘束される理由になるかもしれない。

だから俺はこのヘリに乗る事が出来ないのさ。

俺はその事をレベッカ達に伝えた。

皆哑然としている。

「俺は別の脱出方法を探す」

そう告げた。

依然として沈黙するレベッカ達。

ま、仕方ないな。

俺は背を向けて

「さよなら」

その場を去ろうとした。

が、二三步歩いたらいきなり袖を掴まれた。

振り返るとレベッカが俺のコートの袖をしっかりと掴んでいる。

レベッカよ、コート綺麗じゃないからあんまり掴まない方が良いよ。

レベッカは真剣な表情で、

「私も残る。」

と、言った。

は？

「レベッカ！何言ってるの！？」

レベッカの言葉にジルが激しく問い詰める。

「私も残ります。」

イヤイヤ、レベッカ何言ってるの？

ほら、ジルもびっくりしてるじゃないか。

「貴方はたった一つの脱出方法を捨てるっていうの!？」

「仲間を見捨てるくらいならそうします。」

あくまで冷静なレベッカ。

「本気か？」

俺はレベッカに確認をとってみる。

レベッカはマジなのか？

「もう、仲間を失うのは嫌なんです。だからカズサと残って他の脱出方法を探します。」はっきりと宣言するレベッカ。

マジですか、レベッカさん。

「俺もそうさせてもらおう。」

お前まで何を言うか、レオンよ。

「彼女が残るなら俺も残る。」

さも当たり前のように言うレオン。

「俺は警察官としての仕事を果たして無いからな。」

この正義感の塊め。

「何を言われようとも私は残ります、絶対に。」

真剣な表情でジルを見るレベッカ。

暫し沈黙。

折れたのは、

「……………分かったわ」

ジルだった。

ジルは溜め息を一つ吐き、

「ただし、絶対に生きてこの街から脱出するのよ?」

こう付け加えた。

「レオン、貴方もよ。」

「分かってる。」

素っ気なく答えるレオン。

ジルは確認を終えると、ミハエル達の所に戻っていった。

俺達も歩き出す。

しばらくはすると、ヘリのホバリング音が離れていった。

さて、もう一働きするか。

47話 不可能（後書き）

感想お待ちします

48話

現状確認（前書き）

短めです

48話 現状確認

side上総君

「脱出方法ってやっぱり、貴方の言ってた警察署の地下からなの？」

真っ暗の中、月明かりだけを頼りに歩く途中レベッカが聞いてきた。

「その通りだ。」

ラクーンからの脱出方法は本当は幾つかあるんだが、その内のほとんどがへりでの脱出だから俺は出来れば避けたいんだよね。

「警察署の地下？ そんなのあるのか？」

俺は聞いた事無いぞ、というレオン。

そう言えばレオンには詳しくは言ってなかったな。

「警察署の地下にはアンブレラの研究所があってそこから脱出出来る。」

俺はレオンにそう書いた紙を見せた。

「確証はあるのか？ とうかそれが本当なら警察署に居た時に何で脱出しなかったんだ。」

レオンは割と信じて無さげだ。

まあ普通はそうだな、自分の職場になる筈だった場所に脱出方法が有っただなんて、それに警察署にはずっと居たんだし。

「地下研究所は確かにある、そもそもこの街を地獄に変えた原因はその研究所からウィルスが漏れたからだ。証拠はこの街の惨状そのものだ。」

地下研究所が無きゃこんな事になってないからね。

「警察署の地下にそんな危ない研究所が有るなら何でばれないんだ？」

「ラクーン警察の署長がアンブレラと繋がっている、だから世間にはばれなかった。」

「署長、アイアンズ署長が？」

「そうだ。」

如何にもショックを受けた顔をするレオン。

どうやら自分が働く組織のトップがこの街を地獄に変えた事に関わっている事が衝撃だったようだ。

「やっぱりアイアンズはアンブレラと繋がってたのね！」

おおう、いきなり大声出すなやレベッカ、びっくりするじゃないか。

「変だと思ったのよ、きちんと証拠も提出したのにいきなり活動停止にされるなんて、何かおかしいと思ったのよ。」

アイアンズがアンブレラと繋がってたと知って弱冠、というかな
りご立腹なレベッカ。

そりゃ怒るよな、だってアイアンズがもう少しまともな人間だった
らラクーンはこうならなかったんだし。

「カズサ、これから警察署に戻るんでしょ？」

レベッカが聞いてきた。

まあ、そうだね。

俺は首を縦に振る。

「じゃあついでにアイアンズの為に時間を使って良いかしら？」

物凄い笑顔で言うレベッカ。

俺は直ぐに賛成した。

ヘタレ？そうですけどなにか？

というか時間で思い出したけど、今日って何日だ？

確かレベッカと初めて出会ったのが9月27日だった筈だ。

俺がネメシスに殺られてくたばってた時間はそこまで長くは無いと
思うが、時間によっては急がないといけない。

何故なら9月30日には地下研究所は自爆によって消滅するからだ。
もし、余り時間が無いようだったら急がないと、俺達にとってはこ
の街から脱出出来る最後の切符だ、逃す訳にはいかない。

「今日は何日？」

レベッカに聞いてみた。

レベッカは腕時計を見て、

「28日よ、もうすぐで29日だけど。」

……やっぱ！

確か地下研究所が爆砕するのはゲーム通りなら、9月30日まであ
と1日しかないじゃないか！

「急ごう」

俺は二人に告げた。

「アンブレラの造った研究所には、バイオハザードが起こった時の
為に完璧な消毒システムが備え付けられている。」

「完璧な消毒システム？エタノールでもまくのか？」

レオンが不思議そうに聞いてくる。

俺は首を横に振り、それを否定した。

「要するにバイオハザードの起こった研究所は爆破される、消毒と機密保持の為だ。」

それを聞いたレオンが、爆破！？と驚いている。

「有り得ないわね、洋館もそうだったし。」

レベツカは一度経験してるからか、レオンより落ち着いていた。

「だから急ごう、いつまでも研究所が無事とは限らない。」

二人は直ぐに首を縦に振った。

そして、俺達は警察署に向かって走り出した。

勿論俺はスピードを二人に会わせていた。

48話 現状確認（後書き）

感想お待ちします

49話 警察署（前書き）

残念ながら明日は更新が出来なくなっていました、申し訳ありません。

49話 警察署

side上総君

道中レベッカからアイアンズがどれだけ汚い奴かを聞きながら、警察署に戻ってきました。

レベッカの愚痴の大半はレオンが対応していた。

だって俺喋れないしー。

その時にレオンに恨みがましい目で睨まれたような気がするが、多分気のせいだ。

相変わらず警察署の中は、静だった。

聞こえるのは唯一の生者である、俺達の足音だけだ。

「これからどうするんだ？」

俺の後ろを歩いているレオンが言った。

「どうって、脱出方法をさがすんでしょ。」

何を今さら、とばかりにレベッカ。

「それは分かってる、でも何の手掛かりも無しに探すのか？その地下研究所は秘密だったんだろ？なら、先に手掛かりをてに入れた方が良くないか？」

「……確かにそうね、あてずっぽうで探すより何かしらのヒントが無いと時間が掛かるものね。」

そこで一旦会話を止め、二人ともこちらを向き、

「何か無いの(か)?」

いきなりだね。

まあレオンの言うことにも一理あるな、それにある程度分かっていた方がモチベーションも上がるだろうし。

しかし、手掛かりか、何か情報持ってる人っていたかな?

まあ、アイアンズなら知ってるかな。

「アイアンズ署長のデスクに行こう、アイアンズはアンブレラと繋がっていたし、警察署の地下に研究所が造られている事を知っている筈だ、もし本人が居るなら情報を吐かせば良いし、居なかったらデスクを探索すれば良い、どちらにせよ何らかの情報は手に入るだろう。」

俺の提案に二人とも直ぐに賛成した。

「じゃあ、署長室に行く事にしましょう、私が案内するわ。」

ついてきて、と言いき出すレベッカ。

それに従う俺とレオン。

つか、普通こういう場合レベッカから作戦とか方針を考える頭脳担当で、タイラントである俺は主に筋力担当ってのが筋じゃないのか？俺が頭脳も筋力も担当してんだよ。

「何してるんだ？早く行くぞ。」

どうやら俺は立ち止まったままだったらしく、レオンに声を掛けられた。

「何でも無い」

俺はレオンにそう伝えて歩き始めた。

side???

誰かの喋り声が聞こえたので、その聞こえた方に換気シャフトを通って行ってみた。

そして、後悔した。

何であの人達が戻ってきてるの！？

てっきりもう何処か安全な場所に行ってしまったか、死んでしまったかのどちらかだと思っていた。

驚きのあまり叫びそうになった。

人数は三人に減っていたが、あの恐ろしい大男も居た。

大男は先頭の女の人の直ぐ後ろに居た。

最後尾には制服を着た警察官が、大きな銃を構えて辺りを警戒しながら歩いている。

今彼らが歩いているのは、警官たちの働くデスクに通じている廊下だ。

もっと、その働くべき警官は死んで腐った歩く死体になってしまったけれど。

私がシャフトから彼らの様子を伺っていると、

「なあ、アイアンズ署長はそんなに悪党だったのか？」

唐突に警察官が、先頭を歩く女の人に問いかけた。

「そうね……クリスの言葉を借りるなら、金と名誉に溺れたゲス野郎、ってところかしら。」

女の人が警察官の問いかけに答えた。

「……凄い評判だな、クリスってクレアが探してた彼女の兄で君の同僚の事だろ？ STARSからもそう思われてたのか？」

「いいえ、私達どころか殆どがそう思ってたわ。」

警察官と女の人はしきりに、この警察署の署長の事を言っている。

私もアイアンズ署長の事をお母さんから聞いた事があった、内容は二人が言っているようなものに近かった、というか同じだった。

「カズサ、貴方もアイアンズが汚い悪党だと思うでしょう？」

女の人が直ぐ後ろに居る大男に問いかけた。

だが、大男は無言で持っているバインダーに挟まれた紙に何かを書いている。

そして何かを書き上げ、それを二人に見せた。

「そう、やっぱりそう思うわよね！」

どうやら大男は答えを紙に書いているようだ。

私は紙を覗こうとしたが、バインダーが大男に隠れて読む事が出来なかった。

私がどうにか紙を覗こうとしていると、大男が急に立ち止まり、私が居るシャフトを凝視してきた。

バレた！？

鼓動が激しくなり、背中に嫌な汗がでる。

「どうした？」

警察官が大男に問い掛けている。

大男は再び紙に何かを書いて警察官に見せた。

警察官に紙を見せた後、大男は廊下の壁に寄って、壁を軽くノックし始めた。

良かった、バレて無いみたい。

私は安堵した。

しかしその直後、とてつもない衝撃がやって来た。

ガシャンッ！

最悪な事に、その衝撃でシャフトの金網が外れた。

思わず目をつぶった。

私が落下する中、金網が床にぶつかる音が聞こえてきた。

私はぶつかる衝撃を出来るだけ和らげる為に、体を極限まで縮めた。

しかし、いつまでたっても衝撃はやってこない。

恐る恐る目を開けてみると、

大男が私を片手で受け止めていた。

49話 警察署（後書き）

感想お待ちします

50話 警察署その2 (前書き)

さあ困った、バイオ2やった事ねえ

動画で探すか……

50話 警察署その2

side上総君

何かさっきから視線を感じるんだが、何度確認してもここに居るのはレベッカとレオン、それと俺しか居ない筈だ。

なら、さっきから感じる視線は何なんだろう？

……まさかのホラー展開か！？確かに人間いっぱい死んでるけどそれだけは勘弁だ！

幽霊は勘弁してください、イヤマジで。

だってさ、クリーチャーとかは実際には居ないって分かるし今なら襲われてもどうにか出来る自信あるけどっていうかどうにかしちゃうけど、幽霊は居る所は居そうだし対応出来ないし何より怖いじゃん。

正直グロ系は割と平気だけど、幽霊系で特に日本映画特有の怖い雰囲気は苦手だ。

俺が見えない恐怖にかなりびびりながら、レベッカに振られた話題の返答を紙に書いていると、

カタッ……

という音が聞こえてきた。

何だ？

音自体はとても小さなものだった。

実際、レベッカとレオンは相変わらずアイアンの評判（悪口）を言い合っていることから多分気付いてない。

どうやら、やたらハイスペックな俺の聴力だけが聞き取ったらしい。

俺だけに聞こえるとかどんだけホラー展開なんだよ。あれか、これからバイオハザードからサイレントヒルにチェンジするのか。あの壊れたラジオ持って進めていくやつ、あ、会社変わっちゃったよ。

イヤイヤ、んなことどうだって良い筈だ。多分………

問題はさっきの音が何処からするかって事だよ。うん、ホラー云々は後で考えれば良い。

このゲームって音が結構重要なんだよね。敵の接近を知らせたりとか、例えばリッকারのピタピタいう足音なんかがそうだ。

だからこういうのは安易に見逃す事はしたくないのだ！

俺がレベッカへの返答を、それとなく二人の雰囲気に合わせて返すと音源を探した。

暫くすると、

カタッ……

再び音が何処から聞こえてきた。

俺はハイスペックな聴力をフル活用し、その場所を特定しようとした。

「どうした？」

レオンが問い掛けてくる。

ええい、今忙しいのだよスコット君。

俺は紙に、

「少し静にしてくれ」

と、書いた。

それを見て顔に疑問だ、という表情を浮かべながらも黙るレオン、
なんかレベッカも一緒に黙ってるし。

カタッ……

三度音が聞こえてきた。

相変わらずとても小さい。

だが、俺は静になったので音が何処からするのかを突き止める事が出来た。

上から、そう天井から音がしている。

もしかしてリッカーか!?

俺は直ぐに天井を見渡した。

幸い、リッカーは居なかったが、少し気になるものを見つけた。

天井の丁度真ん中辺りに金網が張られている。多分換気シャフトとかだろう。

俺は、その金網の中に動くものを見た。

それは綺麗な金髪だった。

俺はそのシャフトの中の金髪を見た事から合点がいった。

はくん、分かったぞ。

いつか出会うとは思ってたが、こんな風に出会うとは。人生分らないものだ。

まあ、人じゃ無いけどね。

しかしどうするかな、あの娘俺の姿見たら多分、というか絶対逃げると思うんだよね。彼女も結構重要なポジションにいるから出来れば一緒に行動したいんだけどな。

逃げられずに合流する方法はないものか。

名案はないかと暫し考え込む俺。

暫く考え込む内に、一つ考えが浮かんだ。

でも、あんまりよろしくない方法だ。

しかし他に方法は思い浮かばない。

自分だけで考えるんじゃないくて、レベッカ達とも考えれば良いんじゃないの？と言われるかもしれないが、レベッカ達と相談してみると彼女にばれる可能性がある。逃げられるのは面倒だ。

他の案も考えてみたが、これが一番確実な手段だった。

仕方ない、これでいくか。

俺は壁に近付き、軽くノックして手頃な場所を探した。

そして、場所を決めると、

ゴンッ！

壁を殴った。

sideレオン

カズサが壁を殴ると、天井から金網が落ちてきた。

否、金網と女の子が落ちてきた。

金網はカズサが壁を殴った衝撃で換気シャフトのものが落ちてきたんだろうが、女の子が落ちてきたのは意味が分からない。

ガシャンッ！

金網は床に激突して派手な音をあげたが、幸い女の子の方はカズサが受け止めていた。

女の子はぎゅっと目をつぶっていたが、暫くすると目を開き、

「キャアアアアア！！！」

悲鳴をあげた。

「放して、放してよ！」

女の子はカズサの手から離れようと必死にもがく。

しかしカズサと同じような巨体の化け物と戦えるカズサの力の前には微々たる抵抗だった。

「大丈夫、大丈夫だから、私達は貴方を傷付けるつもりは無いわ。」

レベッカが女の子を宥めにかかる。

俺も我に返り、

「そうだ、危害なんて加えない。」

フォローをいれた。

俺やレベッカの声に女の子は漸く、悲鳴をあげるのを止め、こちらを見た。

「私はレベッカ、彼はレオンよ、貴女は？」

レベッカが優しく問い掛ける。

女の子は俺達を見てキョトンとした顔をしていたが、

「――！」

不意にカズサの腕から逃れ、レベッカに抱き着いて泣き出してしまった。

レベッカはその頭を優しく撫でた。

女の子は数分間泣き続けた後、涙を拭いこちらを見た。

「貴女の名前は？」

レベッカが問い掛ける。

「……シェリー」

女の子は短く答えた。

50話 警察署その2（後書き）

募集についてお知らせがあります、詳しくは活用報告まで。

感想お待ちしております。

51話

警察署その3 (前書き)

少し進展

51話 警察署その3

side上総君

俺が捕獲した女の子、もといシェリーはレベッカに抱き着いてひとしきり泣いた後、

「貴方嫌い。」

と、俺に言った。

はい嫌われた〜

まあ、予想はしてたけどね……

「私が覗いてたからって、あんな事しなくても良いじゃない。」

むくれ顔で言うシェリー。

今シェリーはがっちりレベッカに抱き着いています。

だって普通に出くわしたら逃げるじゃん、あんまり時間無いし、何より俺は今でこそタイラントだけど心は17才なんだよ？ グラスハートなんだよ？

女の子に悲鳴あげられながら逃走されたら俺のグラスハートは耐えられないよ？

でも、それを言う訳にはいかない。俺がこのラクーンの大体のシナ

リオを知っていると気取られてしまう。俺としては正体を明かしてしまいたい所だが、いかに主人公で善人であるからといって、出会って数日の人間に正体をばらす訳にはいかなかった。

仕方ない、ここは誤魔化してしまおう。

「すまない、化け物かと思った、君も知ってるだろう？あの舌の長い化け物を。だから放っておく訳にはいかなかった。改めてすまない。」

ここはありがちなパターンでいこう。所謂敵と間違えちゃった、ごめんなさい（テヘツ☆とか付けて良いのは女の子だけ、ここ重要）というやつだ。

「私はあるな化け物じゃ無いもん……」

俺の答えを聞き、不満そうに呟くシェリー。

そんなにレベッカに抱き着かなくても、レオンも俺も何もしないよ？

こんな時は女子って得だな、初見でこれ程までに信用されるとは、予想外だ。

シェリーはそれっきり顔をレベッカに埋め、黙ってしまった。

レベッカはそんなシェリーを同じく黙りながら優しく撫でている。

レオンは武器を確認し、回りを警戒している。余り会話に入るつもりは無いらしい。つかお前そのグレネードランチャーどうしたんだよ？ジルから受け取ったのか？あの短い間で？

俺は言うまでもなく沈黙、つか喋れんし。

「「……」」

気まずい静な雰囲気がいり占拠する。

何か言わなきゃならんのだろうが、こういう時に限って話題が無いのだ。ええい役立たずのマイ頭脳め！タイラントになって強化されとるんと違うんかい！

そんな時、

「マーヴィンを寝かせてたあの部屋って、まだ安全だと思う？」

沈黙を破ったのはレベッカだった。

「さあ、でもマーヴィンを寝かせられる程安全だったんだろ？それが急には変わらないと思うが。」

レベッカの問いに、顎に手を当てて答えるレオン。

さすが二枚目、そのポーズ絵になるな。

「なら、一旦そこへ行きましょう。」

レベッカの提案で俺達はマーヴィンを寝かせてた部屋に行く事になった。

相変わらずシェリーはレベッカにくっついてる。

……そんなに嫌われたのかな……ちよつと、いやかなりショック……

side???

「高い確率でそちらに生存者が向かうだろう、上手く利用するのだ。」

ウェスカーは通信でそう伝えてきたが、その通りになった。

彼が分からないよう観察したところ、彼らは三人だった。

制服を着た警察官が一人と明らかに訓練された動きの女性、そして見上げる程背の高いコートを着た大男だ。

私が目をつけたのは制服の警察官だ、彼は利用出来るかも知れない。

警察官というのは大抵正義感が強い場合が多い、だから利用しやすいのだ。

警察署に警官は居たが全員が生ける死体になって利用できなかったが。

しかし他の二人は利用出来ないだろう、女性の方は訓練明らかにされているし、大男の方は近付くべきでは無いと自らの勘が言っていた。

顔が思わずにやけてくる。

本当のところどうしても研究所への道が見つからず正直手詰まりだったのだ、だからこれはチャンスだった。

せっかくのチャンスだ、これを利用しない手は無い。

51話 警察署その3（後書き）

感想お待ちします

52話 警察署その4 (前書き)

誤字直しました

52話 警察署その4

sideシェリー

レベッカはとても暖かくて、気が付いたら泣き出してしまっていた。

レベッカは私が泣いている間、ずっと頭を優しく撫でてくれていた。

私はもう12才だし、子供扱いされるのは嫌いだったが、不思議とレベッカにはそう思わなかった。

レベッカの側にいると安心した。

私が泣き止むと三人は相談し、部屋に行く事になった。

先頭をカズサ（後で教えて貰った）が歩き、後ろをレオン、真ん中に私とレベッカが歩いている。

歩いてる間にレベッカに他の二人の事や、既に脱出した生存者達など色々な事を教えてくれた。

話によると、彼らは七人だったらしく、他の四人は脱出してしまったらしい、レベッカに何で彼らと脱出しなかったのかと聞くと、レ

ベツカは

「原因は彼よ。」

カズサを指しながら言った。

「彼は事情があつてへりに乗れなかったのよ。」

事情って何だろう？

レベツカに聞いてみた。

「どうして？ やっぱり体重？」

カズサの体格はボディビルダーよりゴツい、だからへりに乗れなかったのだろうか？

「いいえ、違うわ。」

そこでレベツカは一旦言葉を区切った。

「彼がへりに乗ると余り起きて欲しくない事が起きるかも知れなかったからよ。」

「カズサって何か悪さをしたの？」

「そんなことは無いわ。」

彼は良い人よ、とレベツカは言う。

良い人よなら私を乱暴に捕まえたりするだろうか？

「彼の事がばれると不味い事になるのよ。」

レベッカはそう言った。

彼女の言葉を聞き、私にはある疑問が湧いてきた。

「じゃあどうして貴女はてカズサと一緒にいるの？ 貴女はカズサと一緒にいて不味い事にならないの？」

そうレベッカに聞くと、レベッカは少し笑いながら、

「大丈夫よ、だって彼が守ってくれるもね。彼は強いんだよ？」

それに、と付け加えて

「カズサは仲間だから。」

レベッカは笑顔でそう言った。

暫く歩くと、カズサが急に歩みを止めた。

「どうした？」

レオンがカズサに問いかけた。

カズサは右手を横に伸ばし、私達が前に行かないようにした。

どうやらカズサは来るな、と伝えたいらしい。

カズサは一人で廊下を進む。

私がレベッカに何か来るのかを聞こうとした時だった、

ガシャンッ！

廊下の途中までカズサが進むと、突然窓ガラスが割れて飛び散った。

そして、

シャアアアアアア！！！！

同時に何かが飛び込んできた。

思わず悲鳴をあげた。

「レベッカ！化け物だわ！」

私は必死にレベッカの手を握った。

だが、レベッカは銃を構えたものの、その表情には何処か余裕があった。

レオンが同じように銃を構えて直ぐ側に来たが、やはりレオンも何

処か冷静だった。

まるで現れた化け物が大した問題では無いかの様に。

「大丈夫よ、カズサが居るから。」

レベッカの声はとても落ち着いていた。

ハアアアアアア！！！！

化け物が一番近いカズサに飛びかかった。

駄目だわ、カズサは死んでしまう。

緊張からか、心は何処か冷静だった。

そして、化け物の鉤爪がカズサに届く直前、

ガシッ！

カズサは化け物の脳ミソが浮き出た頭を鷲掴みにし、

グシヤッ！

握り潰した。

咄嗟にレベッカが目を塞いでくれたが、少し遅かった。

私はバッチリ見てしまった。

レベッカが私の目を塞いでからも、肉を叩き潰す音は絶えなかった。レベッカからが余裕な訳が分かった、そして出来れば知りたく無かった。

side上総君

レベッカの提案でマーヴィンを寝かせてた部屋に戻ってきました。

道中、ゾンビとカリツカーが出てきたが俺が叩き潰しました。

シェリーの「貴方嫌い」発言の八つ当たりをリツカーにしたら、バリバリR指定な事になっちゃいました。

その時レベッカがシェリーの目を塞いだけど、どうやら一瞬見えたらしく、物凄くビビられました。

チクショー！

52話 警察署その4（後書き）

感想お待ちします

53話 警察署その5 (前書き)

誤字直しました

53話 警察署その5

sideニコライ

不思議な事に奴等は脱出手段を手に入れたのに、三人（正しくは二人と一体）が街に残ったようだ。

俺はこの事実にな得がいかなかった。

この俺から脱出手段を奪っておきながら、何故脱出しなかったのだ？

この時点でこの街から脱出出来る確率は、確実な情報を持ってない限りほぼ0%だと言っている。その事は奴等も分かっている筈だ。

始めは、あのタイラントがヘリにその体重から乗れなかったのかと思った。しかし迎えにくるヘリは建前上UBCSと生存者を回収する為のものであるからかなり大型のものである筈だ、いくらタイラントが重いといってもヘリに乗れなかった可能性は低い。

仮にタイラントが乗れなかったとしてもそれならタイラントだけが残れば良い筈だ。

他にもいくつか考えてみたが、どれも正解では無さそうなものばかりだった。

何時までも答えが見付からない事に段々自分が苛つき始めているのが分かった。

俺はこの苛つき、怒りを沈める為に無理矢理数を百まで数えなければ

ばならなかった。

冷静になれ、ニコライ。

確かに奴等は俺が受けるべき利益を掠め取ったが、まだ脱出手段は残っている、問題は無い筈だ。

無理矢理怒りを抑えるのにはかなりの労力を要したが、何とか怒りを抑えた。

奴等には後で鉛玉を幾つかプレゼントしてやれば良い。

漸く冷静になるとある考えが浮かんできた。

もし、奴等がへりに乗らなかった理由とは体重等による制限ではなく、もっと他の、例えばへり以外の脱出手段や有益な情報だったとしたら？

俺はそこまで考えた時、俺はまた怒りが沸き上がってくるのを感じた。

もし、他の脱出手段だったとしたら非常に危険だ。俺は今ラクーンシティからの脱出手段はへりだけという前提で行動している、まだ推測の域を出ないがもしへり以外の脱出手段があったとしたら他の監視員にばれると不味い事になる。

先程抑え込んだ筈の怒りが再び沸き上がってくる。

許せない、奴等はどこまで俺の邪魔をするのか。

いや、だが待て。

そこまで考えた時、その怒りとは対称的な一つの考えが浮かんだ。

もしかするとこれはチャンスなんじゃないのか？

確かに他の監視員に脱出手段がばれるのは不味い事だが、同時にそれは俺の脱出手段、つまりは選択肢を増やす事になる、これはとても有益な事じゃないのか？

それに有益な情報であった場合にしても手に入れられれば結果としてアンブレラを喜ばせる事になる筈だ。

考えれば考える程チャンスではないか。危うく怒りに任せて無駄にするところだった。

そうと決まれば今後やることは一つだ。

奴等が脱出出来るのにも関わらず、何故それを捨ててまでこの街に残ったのかを見極めるとしよう、ついでにそれが俺にとって有益なればいただいてしまおう。

端から見れば俺は今凄くにやついているだろう。

さっきとは打って変わってすこぶる気分が良い。

奴等が見つけたものを俺が奪うところを想像するとにやつきが止まらない。

俺は立ち上がり、歩きだした。

先にまだ始末していない監視員を処理してしまおう。

全く、楽しくて堪らなかった。

side 上総君

レベッカの提案でマーヴィンが寝てた部屋にやって来ました。

道中、リッカー数体に襲われたが無事に俺が叩き潰し、レベッカからは怪我一つ無かった。

まあ、俺の心は深い傷を負ったが。

「……」

俺が顔を向けると、さっとレベッカの後ろに隠れるシェリー。

これ、何とかならんかなあ。

そりゃ確かにリッカー握り潰すとかかなりR指定な光景を見せてしまった訳だが、それは君に最も危害が及ばないようにレベッカ達を

君の側に居させて俺がリッカーを処理したからであって、君を怖がらせるつもりは毛頭無かったのだが……

「……」

あ、プイって擬音がするような顔の背け方したな。

そんな怖がられるなんて、お兄さん悲しい……………

まあ、今はタイラントだけど。

「で、ここに来て何するんだ？」

部屋に入って一息付くと、レオンがレベッカに聞いた。

「シェリーの事よ。」

レベッカはレオンにそう答えた。

「私の事？」

今までレベッカの後ろに隠れてた（主に俺から）シェリーが首を傾げる。

べ、別に可愛いなんて思っただけだからね！

危ねえ、危うくロリに開眼するところだった。

一応言っとくが俺は断じてロリでは無い、神に誓おう。こう見えても守備範囲はそこそ狭いんだぜ？

俺が心の中で一人悶えていると、

「そう、貴女の事よ。」

話は進んでいたようである。まあ当たり前か。

「こんな危ない所をシェリーを連れて歩けないわ、だから安全なこの部屋に居てもらおうと思って。」

「やだ！」

レベツカが言い終わるとほぼ同時にシェリーが否定した。

「反対だな、この部屋は安全かも知れないがそうじゃないかも知れない。子供を一人に残すなんてそれこそ危険だ。」

レオンがきつぱりと否定の言葉を言った。

いや、俺もそう思うよ。だって一人、しかもたかだか十二歳の子供じゃゾンビとかの対応は難しいと思う、いや無理だな。

「一人にしないで……」

シェリーは思いきりレベツカに抱き着いている。その顔は不安で一杯で今にも壊れそうな雰囲気を纏っていた。

く、耐えろ俺！

俺は断じて、断じてロリでは無いぞ！

俺がまた一人で悶えていると、

「大丈夫よ、シェリー一人で残す訳じゃ無くて私達の誰かが一緒に残るのよ。」

レベツカはシェリーの頭を撫でながら言った。

そういう事か……いやでももし俺がシェリーと残る事になると、多分俺の心は砕け散ると思うのですが……そこんどこ考えて、

「なら、まあ、大丈夫か。」

無いよね、考えてる訳無いよねえ。

つかレオンももうちょつと考えろよ。

「でしょ?」

でしょ、じゃねえって。

何なの?皆そんなに俺の心を粉碎したいの?そんな事になったら再起不能だよ?

「じゃあ、誰が残るか考えないと。」

「レベツカが良い!」

レベツカ、話し進めないで、それとシェリー、君のはただの願望だろ。

皆が誰がシェリーと残るかを話し合いだした。

俺は必死に紙に否定の言葉を書く。

今さら反対出来る空気では無いが、心がけ砕け散るのに比べれば安いものだ。

俺が否定の作文を書き終わる頃には、話は纏まりかけてたが今は気にしない。

俺はレベツカらにバインダーを見せようとした。

が、

バンツ！バンツ！

突如銃声が聞こえてきた。

皆が驚いているが直ぐに武器を構える。

「今のは何！？」

レベツカが叫ぶ。

未だ銃声は鳴り止まない。

「他の生存者かも知れない！」

言うやいなや走り出すレオン。

「な、ちょっと待って！」

それに続くレベッカとシェリー。

勿論俺も走り出す。

誰かは知らんがとう。おかげでブローケンハートは一端遠ざかったぜ。

53話 警察署その5（後書き）

感想お待ちします

54話

警察署その6 (前書き)

出来たので

54話 警察署その6

sideレオン

俺は今、警察署内を走っている。

銃声は未だ鳴り止まない。

「レオン！待って！」

後ろを追うレベッカが言うが気にしない。

俺は警察官だ。そんな俺の仕事は困っている市民を助ける事、街の平和を守る事だ。

いくら今日配属された新人だといってもそれは変わらない。

だから俺は助けないといけない、それが俺の義務だから。

俺は一度ちらりと後ろを見た。

追いかけてくるレベッカは元特殊部隊だ。カズサもいるしシェリーに危険が及ぶ事は無いだろう。

走りながら銃を確認する。

愛用のデザートイーグルはフルのマガジン一つしか残っていない。

今右手に握って安全装置を外しているのは、ラクーン警察の支給品

のハンドガンだ。

化け物との戦いで弾薬を殆ど使ってしまった俺とレベッカは、ジル達と別れる時に武器とその弾薬を受け取っていた。幸いな事にカルロスやミハエルはハンドガンを殆ど使っていなかったのだ。

デザートイーグルに比べれば威力は落ちるが、警察の支給品になるくらいのこのハンドガンは悪いものじゃ無い。

弾にはいくらか余裕がある。

これなら、この銃声の主を助けられる。

銃を確認する間も俺は銃声を頼りに走り続ける。

壁や天井で反射して分かりにくいが、どうやら地下の駐車場から聞こえている様だ。

署内の間取りは大体頭に入っている。自分の勤務場所で迷子になんかなりたくなかったので、前日にしっかり把握しておいたのだ。やがて、駐車場への扉が見えてきた。

俺は足に力を込め、加速する。

そして、

ダンッ！

破る程の勢いでドアを開けた。

バンッ！

刹那、銃声が響きすぐ側のドアに風穴が空いた。

驚いて銃声が聞こえた方を向く。

そこには、震えながら銃を持つ女性が居た。

side上総君

只今絶賛疾走中です。

「レオン！止まって！」

何故疾走してるかというレオンが勝手に突っ走ってるからだ。

先程からレベッカがレオンに止まるよう声をかけているが、レオンはそれを全て無視し、自分の銃を確認つつ走り続けている。

レオン、頼むから止まってくれ。

焦りながらそう願った。

今のレベッカの装備は余りよろしくない。

サブマシンガンは殆ど射ち尽くして予備のマガジンは残ってないし、他にハンドガンとライフルしか持っていない。もしここで大型の生物兵器と遭遇するとハンドガンでは威力が少なすぎるし、ライフルは室内での取り回しが悪くて使いにくい。

俺は考えながらもレベッカに続き走り続ける。

ぶっちゃけ、前を走るレベッカが退くなりなんなりしてくれれば、俺の脚力でレオンに追い付くのは簡単だ。でも俺にはそれをレベッカに伝える手段が無い。

爆走してる中では筆談なんて無理だ。

レオン、正義に燃えるのは良いがとにかく今は止まってくれ。

俺達が走る間も銃声は鳴り止まない。

どうやらレオンが地下に向かっていている事から、多分銃声は駐車場からしているのだろう。

「お願いだから止まってレオン！」

レベッカが再び叫ぶがレオンは一向に止まらない。

……そろそろ怒るぞ？ベリイでもしてやろうか？

バンッ！

レオンはドアを凄い勢いで開けた。

そして、

バンッ！

銃声と共に固まった。

「撃つな！人間だ！」

レオンは両手を上げて声を張る。

ほれ見ろ、言わんこっちゃない。

俺は溜め息を付きたいのを我慢すると、

「な、何！？」「キャッ！」

レベッカとシェリーを抱えるとスピードを上げた。

つたく、ニコライみたいな奴だったらどうすんだよ！

「ごめんなさい、ゾンビかと思ったの。」

女性がレオンに対して謝っている。

ちくしょう、俺の心配を返せ、そしてレオンよ一発殴らせろ。

「何してるのよレオン！一人で行くなんて、危ないじゃない！」

俺はレベッカの言葉を肯定し、何度も頷く。

「すまない、銃声を聞いてまだ生存者がいると思うと止まらなかったんだ。」

謝るレオン。

しっかり反省したまえ。

冗談抜きで危なかったんだからな。

「ええと、私のせいで危ない目に合わせてしまったんですね、本当にごめんなさい。」

レオンと同じように謝る女性。

「いいえ、貴女は悪くないわ、悪いのはこの新人よ。」

「本当にすまない。」

上司に怒られた部下みたいに謝るレオン。まあ実際は部下と上司み
たいなもんなんだが。

「でも、私を助ける為に危険を犯したんでしょう？なら、私も謝らせて下さい。」

そういつて更に謝る女性。

その女性は、ニットの赤いワンピースを着て、太股のホルスターには銃が挟まれている。

先程の脱力はこの女性が原因だ。一目見ただけで分かった。

「ところで貴女、名前は？どうしてこんなところにいるの？」

「エイダです。ここには人を探しに来ました。」

ほらな。

バイオで女で赤のワンピースで東洋系なのはエイダしかいない。

「ベルトリッチという人を知りませんか？」

エイダがレベッカから聞いてくる。

「さあ、私は知らないけど。」

エイダの問いに対して分からないと答えるレベッカ。

どうやらレオンも同じらしい。

「カズサ、貴方は知ってる？」

あ、俺っすか？

うーん、どう答えようかね、あんまりなんでもかんでも答えるのは良くないだろうし、何より俺が介入したから全部原作通りじゃ無いかも知れない。

まあ、知らんという事にするか。

俺は首を横に振った。

「じゃあシェリー、貴女は知ってる？」

俺の答えを受け、今度はシェリーに質問するレベッカ。

「うーん……」

首を捻るシェリー。

こりゃ知らんな。

「何でそのベルトリッチって奴を探してるんだ？」

レオンがエイダに問う。

すると、エイダはやや目を伏せた。

「2ヶ月前に私の恋人が行方不明になって、でも警察は取り合ってくれなくて、だから自分で情報を集めてたんです。そしたら、ここにいるベルトリッチって人が恋人の行方を知ってるかも知れないってわかったんです。」

そこまで言うと、エイダは顔を上げて、

「お願いです！探すのを手伝ってくれませんか？」

レベツカらに懇願した。

エイダさんスゲー名女優だわ。いやホントに。

表情とか完璧だもん。

知らん奴なら絶対騙されるな。

エイダの言葉を受け、相談してるレベツカとレオン。俺は筆談しか出来ないから必然的に意見を求められた時だけ答える感じになる。

「俺が行こう。全員をベルトリッチの搜索に割いたら脱出経路の搜索が疎かになる。」

「危なくないかしら？」

「彼女も銃を持ってるし、多分大丈夫だろう。」

うーん、と考えるレベツカ。

そして、

「カズサ、どう思う？」

俺に聞いてきた。

俺は紙に、

「多分大丈夫だろう。」

と、書いた。

「決まりだな。」

そう言ってエイダに改めて向き直るレオン。

「レオンだ、改めてよろしく。」

そう言ってエイダに握手を求めた。

「ありがとうございます！」

レオンの手を握って喜ぶエイダ。

ま、俺も考えなしに賛成した訳じゃ無いしね。

せいぜいメロドラマしてこい。

54話 警察署その6（後書き）

何時も更新速度に戻るにはもうちょっと時間がかかります。すいません。

感想お待ちしております

55話 警察署その7 (前書き)

作者多分復活？

55話 警察署その7

sideエイド

生存者との接触は概ね上手くいったと言って良いだろう。

私は出会った彼らの内、警察官の協力者を得る事が出来た。

彼は若くてハンサムで、何より若さ故の情熱が体からあふれでている。こういう人間程利用しやすいものは無い。

「着いてきてくれ、頼むから絶対に離れるなよ。」

今も彼が私の前に立ち、私の為にゾンビ達を排除している。

「は、はい、お願いします。」

私は出来るだけ緊張した声で返事した。

彼と、レオンと出会って間もないが、基本的に彼は弱いものを守ろうとする。警察官になるくらいなのだから正義感が強いのだろう。

なら、私は守られるべきか弱い存在になろうじゃないか。

そうすれば私は彼という護衛を得られるし、弾の節約にもなる。それに彼だって守るべき対象である私を助ける事で、満足感を得られるだろう。良いこと尽くしじゃないか。

前を歩くレオンに、不意に通路から飛び出したゾンビが掴みかかっ

た。

しかし、レオンはそれを直ぐに振り払い、よろめいたゾンビに体重を乗せた回し蹴りを叩き込んだ。

叩き付けられたブーツが腐った頭を陥没させ、バランスを崩した腐った死体は壁に叩き付けられるようにして床に沈んだ。

「だ、大丈夫ですか!？」

私は彼に駆け寄った。

「ああ、どうって事は無い。」

彼は服を軽く払いながら答えた。

私はそれを見て、にやり笑いしそうになったがどうにか抑え込んだ。

彼はとても強いのだ。

とても素晴らしい。

駒は長く使えるにこした事は無い。

私は中々運が良い方だと自負しているが、かれもかなり運が良いらしい。それにサバイバル術もある程度身に付けている。

この任務は楽しくなりそうだ。

「行こう。」

辺りを警戒していたレオンが、周りにゾンビが居ないと判断したらしく、出発を促してきた。

私はそれに大人しく従った。

side 上総君

「……（レベッカに隠れるシェリー）」

これ、どうにかならないかな。

「ちょっとカズサ、聞ってるの？」

どうやらぼーっとしていたらしく、レベッカに咎められた。

「もう、貴方は時々そうやってぼーっとしてるんだから、気を付けてね。」

すいません。善処します。

怒られちった。

レオンとエイダさんと別行動をする事になったので、今俺達は作戦

会議を行っている。

議題は勿論今後どうやって動くか、である。

あの時、別行動をとらずに一緒に行動するという選択肢もあったんだろうが、バイオ2の流れるに行けばここは別行動すべきだろう、それにレオンとエイダさん仲良くなって貰わないとバイオ4の時に助けてもらえないし。

「やっぱりこのままアイアンズから情報を聞き出して、脱出経路を探すべきよね。」

俺はレベッカの言葉に、首を縦に振った。

出来るだけ原作通りに進まないで、いくら原作知識があるっていつでもイレギュラーな事には対処しにくいし。

「でも、一つ問題があるのよね……」

レベッカは苦い表情で言う。

レベッカさん、この時点で既に問題は山積だと思うよ。武器とか弾薬とか疲労とか、まだまだ他にもあるけど。

「シェリーよ」

レベッカは今まで黙って俺達の話を聞いていたシェリーを一瞥すると、そう言った。

「アイアンズから情報を得るにしろ、脱出経路を探すにしろ彼女を

連れて歩く事になるわ」

危険じゃないかしら、と言うレベッカ。

まあ、そりゃ危険だろうな。

ここに居るのはゾンビだけじゃ無いし、これから研究所に行くならボスとも戦わないといけないだろう。危険はかなり多い。

俺がそう考えていると、

「そこでなんだけど」

レベッカは一旦言葉を切り、俺とシェリーを交互に見回して、

「シェリー、貴女をカズサに守ってもらおうと思うの、だから彼の側にいてもらえるかしら」

と、ぬかした。

暫し沈黙。

黙るシェリーと元々話せない俺。

「どうかし「やだ!!!」」

レベッカは沈黙する俺達に確認をとろうとして、話しかけるも見事玉碎した。

「嫌!レベッカが良い!」

叫ぶシェリー。

そんなにお兄さんの事キライなの？

さっきの叫びで俺のハートは深い傷を負ったよ？

だ、だれか、かいふくのくすりか世界樹のしずくを、いや葉の方が
必用かな……

俺が大ダメージ（主に精神面）に悶えていると、

「シェリー」

レベッカは膝を地面に付き、目線をシェリーに合わせた。

そして、シェリーの肩に手を置いた。

「私じゃ貴女を守りきれないわ、でもカズサなら貴女を守れる、私は貴女を危険な目に会わせたくないのよ」

「……」

「別にカズサは怖くないわ、彼はとっても優しいし、力もテレビのヒーローみたく強い」

「……」

「だから貴女にはカズサの側に居て欲しいの」

「……」

「お願い、貴女を守る為なの、どうかわかって」

「……ちよつとなら、良い」

レベッカの度重なる説得により、漸くシェリーは折れた。

まあ、物凄く嫌そうな顔してるけども。

「そう、ありがとう」

そう言って微笑むレベッカ。それを見てちよつとだけ笑うシェリー。

レベッカが物凄い俺の良いところ列举してたし、これで少しはましになっただろうか。

「でも、どうしてもカズサじゃないと駄目なの？」

いや、なってなかった。

まだまだブローケンハートは続きそうだ。

トホホ……

55話 警察署その7（後書き）

感想お待ちします。

56話 ピンチ（前書き）

長らくお待たせして申し訳ありません。

あと、今回から書き方を弱冠変えました。

まあ、些細なものです。

56話 ピンチ

sideレベッカ

嘘だと信じたい。

「お前達に渡す訳にはいかないのでな、あれは俺が手に入れるべきものだ」

私の後ろからカズサが思い切り切り拳を握る音が聞こえる。

「フン、いくら貴様が強靱でも、これでは何も出来まい」

馬鹿にしたように鼻で笑い、ミハエル達が使っていた銃を突き付けた。

確かに普通の人間である私ならそれは脅威であるが、タイラントであるカズサにはゴム鉄砲と殆ど変わらない。

だが、彼も私も一步も動く事が出来ない。

何故なら、狂った兵士のもう片方の腕には、恐怖に震える金髪の少女がいたからだった。

レオンとエイダという東洋系の女性と分かれた後、私達はアイアンズのデスクを目指していた。

理由は言うまでも無く、脱出経路の情報を集める為である。

カズサは生物兵器なのにやたらアンブレラの内情に詳しく、アイアンズがアンブレラと癒着している事と、この街にはアンブレラの地下研究所がある事を教えてくれた。

その全てに確証は全く無いが、カズサは嘘を付くような人間（？）では無い。

カズサはアイアンズなら何かしらの情報を持っているかも知れない、と私達に教えてくれた。

だから、私達は恐らく最後のキップを手に入れるべく、アイアンズのデスクにむかっているのだ。

途中、当然の様に私がアークレードで出会ったような化け物と歩く死体が襲い掛かってきたが、全てカズサが文字どおり一捻りに潰してしまった。

あつという間に挽き肉にされていく化け物達を見ると、カズサが居て良かったというのと、少しやり過ぎなんじゃ……と思ってしまった。

あまりに凄惨過ぎる光景だったので、ちょっと声を掛けようとしたが、彼から滲み出るところかやけっぱちな雰囲気気圧され、何も

言う事が出来なかった。

カズサが化け物と戦う中、私に出来たのは、せめてそのR指定な光景を見せない様に、シェリーの目を塞ぐ事だけだった。

化け物を掃討し終わると、再び歩き始めたが、明らかにシェリーがカズサを避けている。

カズサはそんなシェリーの態度を見て、生物兵器という構造上、乏しい表情で悲しそうにしていた。

カズサは、先程のR指定な光景がシェリーが彼を怖がる原因だと分かっているのだろうか？

シェリーはカズサからきっかり1メートル半離れながら彼の後を付いていつている。私はその後ろに位置どっている。

時々カズサが後ろを見るが、その度にシェリーが一瞬震える。

カズサとシェリーが仲良くなるのはもう少し掛かりそうだ。

思わず溜め息を付いた。

警察署を歩く事数十分、漸くアイアンのデスクに到着した。

今思えばもう少し周りを警戒しておくべきだった。

打合せ通りカズサがドアを蹴破り、デスクに入った。

しかし、アイアンズは居なかった。

あるのは悪趣味な剥製と、机の上に置かれた女性の遺体だけである。

あらかじめ相談し、アイアンズから情報を聞き出す計画が意味をなさなくなった為、私達はカズサを先頭に、部屋に入った。

女性の死体をシェリーに見せたく無かったが、かといって部屋の外に出す訳にはいかなかったので少し迷ったが、部屋に入れる事にした。

私の後に続いて部屋に入ってくるシェリー。

私とカズサが部屋の探索、もとい物色を始めようとした時、悲鳴が聞こえた。

カズサと私は瞬時に振り返った。

そして、己の迂闊さを呪った。

シェリーは軍服を着た兵士に捕まっていたのだ。

Side上総君

どうしよう。

俺と目が合うとシェリーが激しくびびる。

まあ、多分原因はあれだな、俺がリッカーとかゾンビを潰したのがあまりにもグロ過ぎたんだろう。

でも仕方ないじゃん。でないと君とレベッカ守れないし。

俺のライブはR指定なんだぜ？ ガキはさっさと帰りな。

……某赤いコートの銀髪悪魔狩人みたいな台詞を決めてみたが、なんかイマイチ。

何にせよ俺喋れないから、ビンゴ！ とか言えないんだけど。

残念ながら、アイアンズは部屋に居なかった。

やっぱ俺が介入してるから原作とは大きく違っているらしい。エイダさんには会えたのにね。

俺とレベッカが部屋を物色しようとした時、突然悲鳴が響いた。

咄嗟に悲鳴の元を振り返るレベッカと俺。

「動くなよ、妙な真似をしたら子供を撃つからな」

……最悪だぜチクショ―。

何で貴様が此処に居んだよ、ニコライ。
頭が逝っちゃったロシア人め。

「お前達には渡す訳にはいけないのでな、あれは俺が手に入れるべきものだ」

ニコライは片手でアサルトライフルを俺達に突き付け、もう片方でシェリーを捕らえて首にナイフを突き立てている。

なんて事を、貧乳は希少Kゲフンゲフン、いたいけな少女にナイフを突き立てるなんて。

思わず拳を握る。

あ、一応言っとくけど、俺はロリじゃないからね！

それを見たのかは知らないが、ニコライは

「フン、いくら貴様が強靱でも、これでは何も出来まい」

と、言いやがった。

うぜー、コイツうぜー。

これが殺意ってやつか？

「アイアンズはもう居ないぞ、私の小遣いの為に処理させてもらっ

た」

勝ち誇った様に言うニコライ。

「落ち着いて、私達はただこの街から脱出したいだけなの、お願い、その子を放して、私達は何もしないわ、約束する」

レベッカは必死にニコライを宥めにかかる。

「俺に指図するな！」

宥めるレベッカを遮り、ニコライは大声をあげた。

「俺は貴様らより優秀だ！ このゲームに勝つのはこの俺だ！ 敗者でしかない貴様らの指図は受けない！」

怒鳴りちらすニコライ。

ああもう、シェリーがびびりまくっている。早急に解決せねば！
だがどうやって？ ニコライを潰すのは簡単だが、シェリーという人質が居る。はっきり言って手止まりだ。

ニコライはシェリーを引きずりながら、アイアンの机に近づいていく。

「アイアンズから情報を聞き出せたのは幸運だったよ」

そう言って笑うニコライ、その笑みは何処か狂人じみていた。

ニコライはシェリーを捕まえたまま机を探り、やがて机から離れ

た。

刹那、一部壁が開き、通路が現れた。

「どうやら何かの仕掛けを作動させた。

そのままシェリーを引きずりながら通路にむかうニコライ。

「止めて！ シェリーを放して！」

レベッカが叫ぶが、それをニコライは一切無視。

そして、通路に、入行ってしまった。

ご丁寧に仕掛けを元に戻して、通路をふさいで、ね。

ニコライ、貴様だけは殺す。

「どうしようカズサ！」

レベッカが青い顔で言う。

「取り敢えず後を追おう、仕掛けを作動させれば通路が開く筈だ」

俺の記憶が間違っただけや、どっかにボタンがある筈、ニコライは机を探ってたから多分机にあるんだろう。

必死にボタンを探すレベッカと俺。しかしカミサマは残酷だった。

「そんな……」

レベッカが力無く呟く。

確かにボタンは有った。しかし、そのボタンには大きく傷が走っていて押しても何も起こらない。

ニコライってとことん嫌な奴だな、ボタン破壊するとか鬼畜すぎる。

取り敢えずニコライは後で旋風脚決定だな。いや、レベッカにサッカーボールキックしてもらうのも良いかな？

この時点で、ニコライがシェリーを拉致ってから数分が経つ。

レベッカは半ば泣きそうになりながらも何か方法を探している、無論俺もだ。

俺もレベッカも必死に何とか他の方法を探したが、それは一向に見付からなかった。

突然、悲鳴が聞こえてきた。

それは先程のシェリーの甲高い悲鳴とは違い、野太い声だった。

「な、何があったの？」

「分からない、とにかく急がないと」

でもボタンは壊れている。

ヤバイ、本当にどうしよう。

無い知恵を必死に絞る俺。

ポク、ポク、ポク、チーン

あ、良いこと思い付いた。

「通路を開く方法が分かった」

「ホント！　じゃあさっそく行きましょ！」

「じゃ、少し下がっていてくれ」

レベッカに十分壁、もとい隠し通路から離れてもらう。

んで、俺も一緒に少し離れる。

「何してるの？」

レベッカが怪訝そうに聞いてくる。

焦るのは分かるけど少し落ち着けて。

壁との距離は目測で三メートルってところか。

俺はそこから思い切り走り出し、壁に渾身のタックルを放った。

凄い音と共に崩れる壁。

よし！ これで道は開かれた！

「行こう」

俺は振り返り、レベッカにそう伝えた。

レベッカは少し放心していたが、直ぐに元に戻り頷いた。

その時

「ホント、貴方って規格外ね……」

とか聞こえたのは気にしないよ！

56話 ピンチ（後書き）

感想お待ちします。

57話 ピンチその2（前書き）

研究所へむかう所で、原作とは違う部分が出てきます。

悪しからず

57話 ピンチその2

side ニコライ

何もしなくても笑いが込み上げてくる。

俺は今、署長室の隠し通路から地下研究所への入り口へと向かっている。

「ッ！……」

腕に力を入れすぎたらしく、子供が呻いた。

「放して……お願い……」

小さく懇願する子供。

だが、離す訳にはいかない。

アイアンズから手に入れた情報ではこの子供は、俺がむかう研究所の責任者の子供らしい、その研究所で開発されている新型ウィルス、アイアンズはGと言っていたものを手に入れるのに利用しない手は無い。

そう、俺は何もかも運が良い。

聞けば、この研究所への道は最近増築されたというではないか。

思わずにやついてくる。やはり俺は勝者なのだ。

奴等とは違う絶対の勝者なのだ。

にやつきから高笑いに変わった時、何かが首に巻き付いた。

side上総君

チクショーニコライの奴、本気で嫌な奴だな！

俺が壁をぶっ壊して道を作った後、また俺達は障害にぶち当たった。

「駄目、此方からでは制御出来ないわ」

一通り調べ終わったレベツカ言う。

何で俺達がそんなに困っているかと言うと、隠し通路の奥に来たのはいいが、降りる為のシャフトが下に降りたままになっていて、此方からでは操作出来ないんだ。

「何とかならない？カズサ」

そう俺に聞いてくるレベツカ。

俺は青狸じゃねーっての。

まったく、あの駄目少年が頼るような顔するんじゃないよ。

まあ、方法が無い訳じゃ無い。

出来ればあんまりやりたくないけど。

「……ッ！」

涙目になるんじゃないよ、レベツカ。

……仕方ない、ね。

本当はやりたくないんだけどね。

俺は、

「キャッ!?!」

レベツカを抱えて、ケーブルを掴み飛び降りた。

……問い会えず、レベツカの悲鳴はちょっと可愛かった、とだけ
言っておく。

スッゲー嫌な金属音と共に、シャフトの上に降りた。

ふう、良かった。

見た感じ、シャフトと言っても割りと小型のエレベーターみたいなものらしい。

シャフトの上に降りた瞬間、ケーブルが千切れないかヒヤヒヤしたわ。

「……」

レベッカは沈黙してます、ハイ。

リアルフリーフォールを体験したら、ま、こうなるわな。

ま、着地の時に足で出来るだけ衝撃を吸収するようにしたから、レベッカにそこまで衝撃は伝わっていないだろう。

ケーブルを掴んでた手は、手袋が弱冠破れた程度で済んだ。

おっと、長々と事情を説明してる場合じゃ無かった。

早いところシェリーの居る場所にむかわなくては。

俺は、シャフトをこじ開け、そこから出た。

刹那、シャフトのケーブルが千切れ、シャフトが落下した。

……帰れなくなってしまった。

ま、いつか。

慎重に辺りを警戒しながら、進むご一行、もとい俺とレベッカ。
勿論さっきの二の舞にならない為だ。

「こんな場所があったなんて……」

呟くレベッカ。

まあ、自分の職場に秘密の場所があったらこうなるのは当然だわな。

突き当たりにあるドアを開ける。

そこには、

「そんな、シェリー！」

床に倒れ込むシェリーと、何故か七転八倒しているロシア人がいた。

レベッカは直ぐにシェリーの元に駆け付ける。

元がRS（リア・セキュリティ、主に看護や狙撃、偵察を担当）

だけにシェリーを手当てする手付きは手慣れていた。

「大丈夫、生きてるわ」

暫くシェリーの手当てをしていたレベツカは、顔上げ、そういった。

そうか、良かった。

危うくいたいけな少女を失う所だった。危ない危ない。

さて、シェリーの安否が分かったんだから、もう良いよね。

俺は床をのたうちまわっているニコライを摘まみ上げ、サッカーボールよろしく蹴っ飛ばした。

ぶっ飛んで壁に激突するニコライ。

ん？ 殺しちゃいないよ、無論力は抑えてある。楽に殺す訳無いじゃないか。

まあ、力を抑えてるつつつてもギリギリ死なない程度だから、あばら骨は逝くだろうけどね。

ニコライ、君に未来は無いのだよ。

暫くニコライをサッカーボールよろしく蹴り飛ばしてたら、ある事に気付いた。

蹴り飛ばされたニコライは、激しく暴れるのだが、どうも変なのだ。

何が変というと、何ていうかどうも不自然というか、蹴られてるのにあんまり反応が無いというか。

俺が最後の鉄拳制裁を加えるべく、ニコライを掴み上げた。

最後は蹴りではなく、拳で決めたかったので、胸ぐらを掴み上げた。必然的に、今までよりニコライとの顔が近くなった。

その時だった。

ニコライの口の端が切れているのだ。

それはかなり大きな傷で、切れているというより裂けていると言った方が正しいようなものだった。

俺は咄嗟にニコライを投げ捨てた。

壁にぶつかるニコライ。

床に落ちた後、激しくのたうち回るが、明らかにそれは壁にぶつけられた時の痛みではなさそうだ。

まるで、内側に何かが居るかのような。

ニコライの様子から、明らかに異変を感じ取った俺は、レベッカにそれを伝えようとした。

が、それは出来なかった。

突如、ニコライが叫んだ。

そして体が裂けた。

血がまるでスプリングラーみたいに辺りに撒き散らされる。

そして、ニコライの体から、何かが飛び出してきた。

見た感じ、サンショウウオっぽい。

それは、先程のニコライと同じように床をのたうち回っている。

「何、あれ……」

レベッカが呆然としながら呟く。

俺も嘘だと信じたいね。

突然、のたうち回ってた謎の物体が、動きを止めた。

そして、むくむくと巨大化しはじめた。

……最悪、G成体かよ……

57話 ピンチその2（後書き）

感想お待ちします

58話 ピンチその3（前書き）

ま、間に合った……

58話 ピンチその3

side上総君

バイオシリーズの中でグロいボスは？ と聞かれれば、俺はGシリーズと答える。

何が気持ち悪いって、あの”目”よ、ギョロギョロと気持ち悪い。

それとあの如何にもな色も肉感的で気持ち悪い。

「-----!!」

分かった、分かったから叫ぶな。ビジュアル的に気持ち悪いから止めて。

……嫌だが、現実逃避は終了しよう。

さて、まず状況を確認しよう。

1、シェリーを回収成功

2、ニコライが真っ二つになった

3、真っ二つになったニコライから、G成体登場

G成体が出てきたって事は、ベルトリッチは死んじやったのかね。まあ、変に俺やレベツカ、シェリーに胚を植え付けられなくて良かった。

「カズサ！」

わーってますって、何も叫ばなくても良いじゃん。

「―――！」

叫ぶG成体。

……何故奴等は叫ぶ〓声を出せるのに、俺は出せんのだ？ と、そんな事は置いといて、レベッカから安全な所に避難させなくては。

俺はバインダーに挟みこまれる紙に、避難する事を伝える文章を書くが、筆談ではどうしてもタイムラグが生じてしまう。

俺が必死に文章を書いている間に、甲高い射撃音が響き、G成体の肉が一部弾けた。

見ればレベッカは、ライフルを構え、スコープを覗いている。

ちょ、レベッカ、撃っちゃったの！？

当然、レベッカの方へむかうG成体。歩み自体はかなり低速で覚束ないが、その肥大した腕に殴られたら、普通の人間ではひとたまりもないだろう。

ちらりと横たわるシェリーを見る。

……つち、まだ眠れる森の姫のままかよ。

ジリジリと間を詰めてくるG成体。レベッカもライフルで対抗しているが、決定打に欠けるようだ。

しゃあない。

俺はG成体に全力でタックルした。

S i d eレベッカ

また、化け物だ。

懲りずに次々と化け物を作り出すアンブレラは、きっとバカの極みなね。

化け物はそのアンバランスな感覚器官を使い、辺りの様子を伺っているようだ。

……アイツと戦う事になるに、20ドル賭けてもいいわ。

私は周りの状況を確認した。

カズサはバインダーに何かを書いている。シェリーはまだ眠ったままだ。

対処出来るのは私だけって事ね、もう、ホントすばらしわ。

背に掛けてあった重いライフルを構える。

他にも武器は有ったが、サブマシンガンは弾が後少ししかなかったし、ハンドガンでは力不足だ、だから重いし室内では取り回しの悪いが、威力と命中精度が高いライフルを選んだ。

ライフルを膝立ちの姿勢で構え、スコープを覗く。

RSは主に衛生兵のような役割だが、場合によっては狙撃や偵察を行う事もある。

だから私は銃を扱う訓練において、狙撃を重視した訓練を受けてきた。

そのおかげで、狙撃は割りと得意な方だ。

膝立ちの姿勢でライフルを構え、引き金を引く。

狙いは上々で、放たれた弾丸は化け物の歪な顔の頬が弾けた。。

しかし、威力の高い狙撃用ライフルと言っても、高々一発で仕留められる訳も無く、化け物は平然とし、こちらによたよたと歩いてきた。

直ぐにスコープを覗き、狙いをつけ直す。

今度は、化け物の顔、つまり眉間だ。

化け物はこちらへ歩き、距離を詰めてくるが、まだ間合いはある。私は構わずライフルを操作し続けた。

化け物が動く度に、少しずつ修正を加えていく。

そして、スコープの十字の丁度真ん中に化け物の眉間を捉えた。

私は引き金を引こうとした。

が、それは出来なかった。

何故ならいきなり覗いていたスコープから、化け物が消えてしまったからだ。

直ぐにスコープから目を離し、直に化け物の居た方を見る。

……私、疲れてるのかな？

そこには、化け物とのプロレスを繰り広げるタイラント、もといカズサが居た。

side上総君

G成体をタックルで吹っ飛ばした俺は、奴に跨がりひたすら拳を打ち付けていた。

んが、G成体もやられるままな訳も無く、俺に蹴りを入れてくる。

蹴りを受け、強制的に距離を取らされる俺。

もぞもぞと起き上がるG成体。

同時に銃声が響く。

俺が離れた事で、レベッカがライフルを再び撃ち始める。

次々G成体に弾痕が刻み込まれる。

良いぞレベッカ、もっとやるんだ！

G成体は撃たれながらも、レベッカの方へ向き直った。

そして、

「ひっ！」

レベッカが悲鳴を上げる。

何かゲロリやがった。

ゲロられた嘔吐物は、魚みたいにピチピチ動いている。

ヤバイ、G幼体だ。

再びG成体が、ゲロる体勢に入る。

俺は即座に奴にむかってダッシュした。

そうはさせん！

そして、勢いそのままに、喉へアッパーを叩き込んだ。

グチャリ、と何かが潰れる感覚と共に、G成体が吹き飛ぶ。

「何なのよ、これ！」

背後からレベッカの悲鳴が聞こえ、同時に銃声が鳴り響く。

レベッカ、ご愁傷さま。

でも俺だってこの気持ち悪いのと戦ってんだぜ？

俺はレベッカに嘔吐物（G幼体）の対処を任せ、G成体に追撃をかけるべく、勢い良く駆け出した。

G成体のパンチを受け止め、逆に懷に飛び込み投げ飛ばす。

ニッポンのココロ、ジュードードス。

ま、俺の場合、柔道といってもかなり力任せな感じだがね。

おっと、こんなことしてる場合じゃ無かったね。

倒れ込み、床に伸びているG成体の腰辺りを強引に掴む。

掴んだ時、スンゲーやな感触がしたが、今は無視だ、無視無視。

そのまま持ち上げ、背中を反らしながら後ろに倒れ込む。

凄まじい衝撃に、床が陥没し、頭部を強打したG成体がかな切り声を上げる。

俺がしたのは、所謂バックドロップというやつだ。

かなり思い付きでやってみたが、G成体や俺の体重が重かった事もあって、奴に与えたダメージは相当なものだろう。

その証拠に、未だ奴は立ち上がる事無く、もがき続けている。

そろそろ、終わらせますかね。

俺は、じたばたと暴れるG成体を押さえ付け、馬乗りになった。

拳を振り上げる俺。だが、狙いは顔では無い。

俺は力を込めて、拳を降り下ろした。

奴の肩にある、Gシリーズの特徴であり、弱点である巨大な目に。

湿っぽい音と共に、拳が目にめり込む。

G成体はより一層暴れるが、馬乗りになっていたので、どうにか押さえ付ける事が出来た。

俺は再び、拳を振り上げ、何度も拳を目に叩き付ける。

今すぐ手の汚れを洗い流したい所だが、今はただ殴る事に集中した。

何度も何度も拳を叩き付ける。

だが、やはり体術では決定打に欠けるらしく、G成体は一向にくだばる気配が無い。

……仕方ない。やだけど、やるか。

俺は目玉を鷲掴みにし、力の限り引っ張った。

G成体は、これまでに無いくらい、激しく抵抗する。

が、散々ダメージを受け続けた為、その抵抗にはあまりに力が無かった。

ブチブチと何かが切れる音がする。

俺は、最高の力を込めた。

刹那、非常に嫌な音と共に、目玉が引き抜かれた。

58話 ピンチその3（後書き）

感想お待ちします

59話 もっとピンチ（前書き）

出来たので更新

59話 もっとピンチ

side上総君

俺はG成体から引き抜いた目玉を捨てた。それからもう動けなくなったG成体を一瞥する。

……今考えると、俺がした事ってとんでもなくR指定な事じゃん。シェリー寝てるよな？ あ、良かった、寝てたね、うん、良し。

そろそろ、俺にも武器欲しいなあ、今回の事でつくづくそう思うよ。

別にもう飛び道具とかじゃなくてもいい、素手で相手に触れなくていいなら何でもいい。目玉手掴みとかもう二度としたくない。

武器になりそうな物は、幾つか転がってるんだが、いかんせん、耐久性が低いのだ。

例えば、ポピュラーに鉄パイプを使うとしよう、タイラントの力量でそれを振り回したらあつという間に鉄屑に大変身するだろうね。

G第一形態の鉄パイプが何で折れないのか凄く不思議だった。

ま、ゲームだからその辺にあまり突っ込んじゃいけないんだろうけど、俺が今居るのはれっきとした現実だ。生半可な武器でいざという時に壊れたり、壊れなくても使い物にならなくなったりするとかは本気で笑えない。スピアを持てば良いじゃないかと言うかも知れないが、あまりかさばるのはいただけくない。

我が儘なんだろうが、きちんとした武器が欲しい。

「……死んだ、の？」

俺がいかに関分に武器が必要か、についての考察を纏めているとき、レベッカが話しかけてきた。

俺は首を縦に振る。

G成体はピクリとも動かない。もしかしたら死んでないのかも知れないが、少なくとも原作では復活するなんて事は無かったし、G成体ってのは適合出来なかった被験者、つまりは人間を宿主として産まれた不完全な生き物の筈、そうハイスペックな訳が無いのだ。

「そう、良かった」

もう二度と戦いたくない、とレベッカ。

そう言うレベッカの周りの床には、明らかに何かの体液であろう汚れが出来ていた。

きつとあれだな、俺が戦ってる間に、レベッカはG幼体とやりあってたんだな。

デカイ奴とやり合うのも勘弁願いたい、大量のちっこいのとやり合うのはもっと勘弁願いたい。ベビースパイダーとかコックローチ、G幼体にまとわりつかれた主人公らは、何で「キャ！ 何これ！？」くらいの悲鳴で済むのかね、俺なら絶叫してのたうち回るな。

「シェリーは？ まだ起きないのか？」

レベッカにシェリーの様子を聞いてみる。

俺の言葉を聞くと同時に、脈をとったり、額に手を当てたりしている。

「うーん、別に怪我してるとかは無いわね、内出血とかも無いし」

「なら何で起きない？」

「私に聞かないでよ、この状況じゃ分からないわ」

ま、触診と視診だけじゃ分からんわな。

レベッカはまだシェリーの診察を行い、俺は汚物（G成体）を部屋の片隅に足で蹴り飛ばし、ヤツとの戦闘で凶らずも生産された瓦礫で埋めた。

R指定な汚物を見て、シェリーにドン引きされるのは勘弁だからね。

あの無垢で薄幸な雰囲気少女に、恐怖の視線を向けられるのって、結構辛い（決してつらいとは読まない）ものがある。

しかし、やっぱりGシリーズ来ちゃったかあ。まあ、バイオ2のシナリオに入った時点である程度覚悟はしていたけど、それが現実になると、それなりに堪えるね。

Gとの連戦になるな、これは。本来Gと戦うのはバイオ2の方々な訳だが、実際には俺と言うイレギュラーが介入したせいで、クレアがラクーンシティから早々と脱出したし、代わりにレベッカが街に残ってしまった。それとゲームみたいに簡単に弾薬が補給出来る訳じゃ無い。つまり弾薬とかの補給や、ある程度の傷はへっちゃらな俺が戦わないといけないのだ。

実際、レベッカが持っている中で、一番威力が高いのは狙撃用ライフルだ。だが、それは威力が高いというだけであり、最強な訳じゃ無い。銃身が長いライフルは室内では使いにくいのだ。これからバリバリ室内戦になるだろうから、これは大きな欠点である。

俺としてはショットガンくらいは欲しかったのだが、無い物ねだりしても意味はない。

俺は前途多難な今後についての考察を纏め、溜め息をついた。

そういえば、レオン達はどうなったのかなあ、もう下水道くらいには行ったかなあ。時間的にもレオンがアネットに撃たれる頃かねま、エイダさんについてるから多分大丈夫だと思うけど。

というか、レベッカからエイダさんの事教えて無いけど、大丈夫かな？ まあ、大丈夫かな。うん、大丈夫という事にしよう。下手に教えて警戒して仲悪くなったら困るしね、主にレオンが。バイオ4でエイダさんの手助けが無かったら、4、5回はレオンが死ぬ

し。今エイダさんに敵認定されるのは困るのだ。俺が二回目の今後に対しての考察を纏めという時、

「ん、んう……」

眠れる森のお姫様はお目覚めになったようです。

あ、いけね、ニコライの死体片付けて無いや、はやいところ片付けないと。

「良かった、気が付いたのね」

そう言って微笑むレベッカ。いや、マジで美しいね、美人の笑顔ってのは。

「レベッカ？ え、怪物は？ あの男の人は？」

「男の人は怪物に殺されたわ、でもその怪物はカズサが倒したし、もう居ないから大丈夫よ」

レベッカの言葉に、シェリーは複雑そうな、しかし安堵の表情を浮かべた。

俺としては非常に良かったと思う。シェリーも助かったしニコライも排除できた。奴は残すと後々大変だったからだろうからね。シェリーにゃ悪いが収穫はあったと言えるよう。

「大丈夫？ 自分で立てる？」

シェリーに問うレベッカ。

懸念が無い訳じゃ無い。だが、怪我は無かったんだし、可能性はそう高くな――

「……お腹痛い」

い、と思ったんだが……

「どうしようレベッカ、お腹が痛い」

ぺたんと座りながら腹部を抑え、涙目でいう少女。

あの変態（汚物から昇格）め、いたいけな少女に何て事を！
どうやらシェリーはGの胚を植え付けられたらしい。

最悪だ……

59話 もっとピンチ（後書き）

感想お待ちします。

60話 研究所へ(前書き)

超絶難産の回

60話 研究所へ

sideレベッカ

シェリーは、どうやらアンブレラが新に造り出したウィルスの胚を植え付けられたらしい。

私はカズサからそれを聞いた時、あまりの怒りに自分がどうにかなってしまいそうになった。

だが、この少女の為、我を失う訳にはいかない。私はどうにか怒りを押さえつけた。

「どうしようレベッカ、私死んじやうの!？」

「そんな事無いわ! 必ず助かる方法があるわ!」

ウィルスを植え付けられたという事実シェリーは泣き出してしまっており、私は必死にシェリーを宥めていた。

カズサも始めは宥めようとしたが、シェリーに少してを伸ばしたものの、そのまま引っ込めてしまった。

それから、少し考え込むように顎に手を当てると、バインダーに何やら書きはじめた。

その間もシェリーは泣き続けている。

「やだよ! 死にたくないよ!」

「大丈夫よ、だから落ち着いて!」

泣き叫ぶ少女。

もし、カズサの言う通り、シェリーに植え付けられたのがウィルス
の胚なら、助かる方法はあまり沢山は無い。そして時間も。

ああ、アンブレラのクソツタレめ、こんな小さな女の子に死への
恐怖を味あわせるなんて、さっさと地獄に堕ちて今までの悪行の報
いの焰で焼かれてしまえばいいのに。

その時だった。

カズサがバインダーを見せた。

「「え？」」

私とシェリーの声が重なる。

そこには、

「シェリーを助ける方法はある」

と、書かれていた。

Side上総君

「……ねえ、前から言おうと思ってたんだけど」

なんね？ レベッカよ。

レベッカは一旦言葉を切り、息を吸った。

「そういう大事な事は、もっと早く言いなさいよ！」

タイミング悪いのよ！ とレベッカ。

いやはや、それについては返す言葉も無い。だってタイラントだもの。喋れないし。

俺がレベッカに大事な事を言うタイミングについて、お説教を受けていると、

クイクイ

袖を引っ張られた。

視線を向ければ、シェリーが俺のコートの袖を引っ張っている。

イヤッフウウー！ ついにシェリーが俺をビビらずに触れてきたぜ！ あ、でもシェリーさん、俺のコートあんまりキレイじゃ無いよ？ ミは付いてないけど、帰り血とかは付いてるかもだから。

「私、死ななくて済むの？」

不安げな表情を顔に表しながら、聞いてくるシェリー。

何このぷりていーないきもの。

身長差による上目使いと、元からの薄幸な雰囲気で破壊力は抜群である。だが、ここに誓う、断じて俺はロリでは無い！

俺がそんな半分以上無駄な事を考えていると、シェリーは更に袖を引っ張ってきた。

早く話せて事かな？

もう少し、ヒヤッハーな気分に使っていたかったが、切り上げる事にしよう。

「地下にアンブレラの研究所がある事は、分かってるよな？」

こくり、と頷くシェリーとレベッカ。

「先程の化け物もそうだが、恐らく、いやほんと間違いない無い思うが、それらは地下研究所で造られたものだと思う、だから、研究所には、そのウィルスに対する何らかのワクチンや抗ウィルス剤がある筈、それを手に入ればいい」

説明終了。

「じゃあ、私は死ななくて済むんだね！」

さつきとは一変、まだぎこちないが取り合えず笑顔になるシェリー。うむ、やはり女の子は笑っているのが一番だな。目の保養に良い。

「良かったわね、シェリー」

そう言って微笑むレベッカ。

「うん！」

シェリーはそのままレベッカに抱き着く。
レベッカは優しくシェリーを受けとめた、が

「っ!?!? 酷い熱だわ!」

抱き着いたシェリーの額に手を当てながら、レベッカが言う。そう言われればシェリーの顔も、何処と無く紅潮しているように見え

る。

うーん、原作通りというのも考えものだな。

「う……」

高熱の為、呻くような声しか出せないシェリー。

「カズサ、早く研究所に行かないと！」

シェリーを抱き止めながらレベツカが言う。

いやいや、確かにシェリーが危なくて焦るのは分かるが落ち着きたまえ。

さつきバインダーに挟む紙を補充してる時、署長宛ての書類みたいなのを見つけたんだが、そこには、署長たつての希望により、署長室の奥の隠し部屋に新に研究所への道を増設した、とあった。詳しく見てみると、直接研究所に繋がっている訳ではないが、プラットホームにまで繋がっているらしい。

これを見た時、思わず吹き出しそうになった。どんなご都合主義だよ。まあ、楽だからいいけど。

「何してるの？ 早く行かないと！」

おっと、どうやら考え事をしていてフリーズしていたらしい、またレベツカに怒られちった。

「行こう」

んじゃま、行きますかね。

side 研究員ズ

「久しぶりに我々に出番が来たな」

「……お前誰に向かって話てんの？ そっちには誰もいないぞ？
つかキヤラ変わってないか？」

「いや、気にするな、気のせいというやつだ」

「……だといいんだがな」

「そういえば、ラクーンでUBCSに回収された生存者が来るらしい、なんでも検査の為だとか」

「あっさり話題変えやがった、まあ、生存者だろうと何だろうと、
研究の為になるなら何でもいいさ」

「何気にマッドだな」

「褒め言葉として受け取っておこう」

ビー！、ビー！

「な、何だ、警報！？」

「何が起こったんだ!？」

プルルルル!

「こんな時に何なんだ!」

「いいから出ろよ、幹部様だったら大目玉だぜ」

ガチャ

「はい」

「研究部門か!？　こちらはセキュリティ部門だ」

「一体なんの騒ぎですか?」

「UBCSが回収した生存者が襲ってきた」

「まさかウィルスが!？」

「それは無い、何故ならば奴等は銃を撃ってくるからな」

「事態は収集出来そうですか?」

「残念ながら難しい、奴等はかなりの手練れだし、UBCSも裏切つたらしい、よって君らにはこの施設を放棄するじゅ「バンッ!」

「……不味いな」

「激しく同感だ」

頑張れ研究員、明日は必ず来る。

「つて、これで終わりか!？」

それでは、また次回

60話 研究所へ（後書き）

やっちゃった感満載。

感想お待ちしております。

61話 研究所

side???

寝不足のぼんやりとした頭が一気に冴えた。

私はこの施設でもまだウイルス汚染されていない、セキュリティ室にいた。そこで、私は資料の整理を行っていた。

自らが研究していたウイルスによって化け物と化した夫の研究は、絶対に奴等に、アンブレラに渡さない。だから、私は直ぐに資料を持ち出し、尚且つこのデータを破壊するのだ。

その為に、まずは安全なセキュリティ室で資料の整理を行っていたのだ。ここにはパソコンもあり、何より腐った死体やあの舌の長い生物兵器も居ない。集中するには最適な場所だった。

整理が一区切りついた時、私は何気なくセキュリティ室にある幾つかの監視カメラの映像を映すモニターに目を向けた。

もしかしたら夫が映っているかも知れない。

その程度に考えていた。

そして、あるモニターにくぎ付けになった。

ああ、そんな、嘘でしょ。

それは、恐らく警察署からこの施設への通路を映したものだが、そこには最悪のものが映っていた。

私と夫は以前、新しく研究しているウイルスの為に、強力な被験体を探し求めていた。というのも、このTよりも全く新しくウイルスは、遥かに強力である変わりに、Tよりも適合の条件が非常に難しかったのだ。

遅々として進まない実験に、私達は強力な被験体を求めた。

そして、アークレイのチームが開発したという今までとは違う生

物兵器に私達は活路を見いだした。

それは、Tを使った生物兵器でここまでは今までの生物兵器と変わらないが、非常に完成度が高く、欠点はそのコストパフォーマンスの悪さのみという代物だった、だがこの後に新たな欠点が浮上してくるが、今は関係が無いので省く。

タイラント

確かそんな名称だった筈だ。

それがモニターの中に居た。

私が見たのは開発当初の失敗作とされたものだったが、モニターに映っていたタイラントはそれとは違っていた。

タイラントは施設から逃げ出したのであろう、リッカー数体をものの数秒で挽き肉に変え、また道を進んでいる。

思わず拳を机に叩き付けた。

クソツタレのアンブレラめ、どうやっても夫と私の研究を奪うつもりか！

タイラントの資料を取り寄せた時、将来的にはある程度の作戦行動が可能とあった。もし、それがこの忌々しいタイラントにあるのなら、それは恐らく夫と私の研究を奪うようプログラムされているだろう。

絶対に渡すものか。あれは私達の努力の結晶で、とても大切なものだ、奴等には渡さない！

……でも、本当に大切なのはシェリーだ。

あの子には母親らしい事を何一つしてやれなかった。

私も夫も研究が忙しかったのだが、それは言い訳にはならない。

ああ、愛してるわ、シェリー。私の大切な娘。

私は立ち上がった。

早く略奪者への準備を済ませ、シェリーを迎えにいくのだ。

私は足早にセキュリティ室を出た。

side上総君

と、いう訳で、プラットホームの所まで来た。

飛ばしすぎじゃね？　っていう方の為に一応説明しておこう。

あの後、警察署から下水道に入った俺達は、アイアンのデスクからちよいと拝借した文書を持って、進んでいた。

G成体が現れたから、他にも来るかと思って、かなり慎重に下水道を進んでたんだが、特筆しなければならぬような事は何も起きなかった。

途中、やたらとでかいワニの上顎の吹っ飛んだ焼死体があったが、それくらいだった。

そんなこんなで拍子抜けな雰囲気のまま、俺達は下水道を抜け、プラットホームにたどり着いたという訳だ。

車両に乗せた降下式のプラットホームは、既に誰かを運んだ後らしく、下に下がっていた。

レベッカが、シェリーを抱えながら、近くで見つけたキーを使い、プラットホームを上げている。

こいつが既に使われてるって事は、もうレオン達は研究所に入っただのかな。まあ、エイダさんに抜かりは無いだろうから、サクサク進んでったんだろう。

やがて、プラットホームは上がってきて、俺達はそれに乗り込ん

だ。

s i d e ジル

アンブレラらしく、施設の警備はお粗末なものだった。
何せ私を含めて四人と一人の怪我人の攻撃に対処出来なかった程だ。

グレネードや、幾つかのマガジンは、街に残る三人に渡していたものの、施設は簡単に制圧出来た。

「それで、あんたらは何の研究をしてたんだ？」

カルロスが捕虜にした研究員二人に問う。

警備部隊の大半は射殺してしまい、生き残っていたのはこの二人だけだ。

「あんた達はもう知ってるんじゃないのか？」

何やら思案顔だった研究員二人の内、一人が答えた。

「人をゾンビに変えるウィルスを研究していたのは本当か？」

カルロスの代わりにミハエルが答える。

「その通りだ」

もう一人の研究員が答える。

答えた瞬間、激しい怒りが沸き上がったが、表情には表さない。

「そう」

出来るだけ、感情を表さずに言う。

「さっきFBIに連絡しておいたわ」

直ぐに迎えに来るでしょうね、と告げると研究員は観念したように息を吐いた。

62話 研究所その2（前書き）

あれ、これってコメディ？

62話 研究所その2

side上総君

研究所の廊下を歩く俺とレベッカ＋シェリー。

レベッカに背負われている形になっているシェリーは、高熱の為、先程から意識が無い。

それでも拒絶反応が起きてないという事は、やはりシェリーはGとある程度適合する素質を持っているのだろう。

思えば、シェリーって中々不幸な少女だよな、Gに適合してしまっただけに、研究所脱出した後もウェスカーに拉致られたりとか、しかも歴代のバイオを見る限りでは救出されたとかは全くと言っていいほど触れられてないし、ほんと泣けるわ。

「中々広いわね……」

やや疲れ気味にレベッカが言う。

歩き続けてかれこれ数十分、途中の戦闘を入れれば一時間ちよつとの時間、俺達は行動し続けている。ちなみに、シェリーはレベッカが背負っている。俺が背負っても良かったんだが、そうなるゾンビやリッカーやハンター等の生物兵器への対応出来るのがレベッカだけになるからだ、レベッカは決して弱い訳じゃないが、やはりタイラントである俺と比べれば、かなり見劣りするのは否めない。だからレベッカがシェリーを背負い、機動力は犠牲になるが、その分俺が頑張る事になったのだ。

一応言っておくが、決してシェリーに嫌われるのが嫌だからでは無い、多分。

「ふう、漸くね」

呟くレベッカ。若干行きが上がっている。

その視線の先には、ドアがあった。金属の綺麗な銀の光沢を放ち、横には認証機器が設置されている、いかにもセキュリティ拔群ですぜ！みたいな感じである。

「鍵が掛かってないといい「ドカツ！」……」

あ、ゴメン、レベッカの台詞と思いつきり被っちゃった。

俺のヤクザキックを浴び、金属がひしゃげる音を盛大に立てながら、吹き飛ぶ元セキュリティ万全ドア。

残念ながら、タイラントにはセキュリティのセの字も無いのですよ、まあ、原作では常に普通に壁をぶっ壊して登場してきたんだから、これでも幾分マシな方だろう。

だから、隣から聞こえてきた、「……凄い力技ね、何だかデジャブを感じるわ」とかいうのは木の妖精さんの仕業だろう、ここに木なんて無いじゃんとかいう突っ込みは受け付けません。

俺とレベッカ+シェリーは再び歩き出した。

sideレオン

どうやら、地下に研究所があるというカズサの言葉は正しかったらしい。

現に、俺とエイダは下水道を抜けた先の、恐らく警察署の真下の場所に、巨大な研究施設を発見した。

所々にアンブレラのマークがある事から、カズサの言葉が正しかった事を裏付けている。

先程、コンピューターに途中殺した研究員とおぼしきゾンビから回収したIDでアクセスし、この施設の全容を確めた。

すると、この施設には資財の運搬と非常時の脱出経路を兼ねている、鉄道があるらしい。ここからなら脱出出来そうだ。

ただ、残念な事にここからでは、そのプラットホームが正反対にある、という事だ。それに、研究所へ行くために下水道を使う事を教えてくれたベルトリッチという記者に、死の直前アンブレラの暗い側面に関する証拠と、出来れば研究所から更に証拠を回収して欲しい、と頼まれていた。

危険ではあるが、彼の遺志を無駄にはしてはいけないと思う、何より俺は警察官なのだ。もうこの街には守るべき善良な市民は殆ど残っていないだろうが、務めは果たさないといけない、アンブレラという巨悪を裁きに掛けるのだ。

幸い、俺にはエイダという頼もしい女性と、今は別行動をしているが、レベッカとシェリー、そしてカズサが居る。彼らも脱出経路の搜索とアンブレラの巨悪の証拠の回収を行っている事だろう。

俺は、施設の全容を頭に叩き込むと、同じくパソコンを使い、資料を漁っている筈のエイダへ顔を向けようとした。

だが――

「対BOWガスを散布します、直このガスに人体への影響は有りません」

無感情な録音された音声と、天井に設置されたノズルから吹き出される青緑のガスに遮られた。

sideレベッカ

何が起こったのか、一瞬分からなかった。

「対BOWガスを散布します、直このガスに人体への影響は有りません」

突然、スピーカーから声がして、天井にある無数のノズルから青緑のガスが放出され、部屋に満ち始めた。

私は咄嗟に自分やシェリーの口と鼻を布で押さえた。先程の音声は人体への影響は無いと言っていたが、アンブレラの事をあまり直ぐに信用しない方がいい、という事を私は嫌という程知っている、だからその場しのぎかも知れないが、何もしないよりましだろう。吹き出されるガスであつという間に、廊下は青緑一色になった。

やはり、ただの布では完全に遮断するのは無理らしく、鼻を薬品の匂いがツンと突く。だが、いつまでたっても、私が危惧したような事は起こらない。

よくよく考えてみれば、ここは研究所であるものの、ただの廊下なのだ。実験室ならいざ知らず、誰もが使う場所にそんな危険な物を散布する装置が設置される訳が無いのだ。

恐る恐る当てていた布、もとい服の端を口元から離す。

鼻を突く薬品の匂いはやや強くなったが、それだけで、別段何かあるという訳では無さそうだ。

今の段階で、このガスに危険は無さそうだ、という事は分かった。しかしなら他にどんな効果があるのだろうか？まさか、視界を青緑にしたかったて訳じゃ無さそうだし。

そう言えば、ガスが散布される前に流れた音声は、対BOWガス

と言っていたような……

私はそこまで考えた時、非常に嫌な予感がした。
急いで後ろを歩いていた筈のカズサを振り返る。

お願い、どうか外れてますように。

だが、そこには、ガツクリと膝を床に付けているカズサが居た。

side上総君

誰だ対BOWガス何て撒きやがったのは、出てこいや、三枚下ろしにしてやる。

畜生、力が上手く入らない、対BOWガスって失敗作じゃなかったのかよ！

恐らくTウィルスに対して効果があるであろう、このガスはTの産物であるタイラントにもばっちり効くらしい。

原作では画面が緑色になる位で、生物兵器が弱ってる描写はあんまり無かった、なのにこれは酷い。

頭がやたらと痛いし、さっきも言ったが体に上手く力が入らない。思考と視界が鮮明なままなのは幸いだった。

「大丈夫!？」

地面に膝を付けている俺を見て、心配したレベッカが駆け寄ってくる。

「すこし、まずい」

ペンを握る手に力が入らず、字が上手く書けない。

いや、本当は少しどころか結構不味いんだが、そこは要らぬ心配をかけない為、軽めに見積もっておく。

それに、原作通りなら対BOWガスは不完全で、時間が経つとその毒性を生物兵器は吸収し、より強力になってしまうという欠点を持っている。だから、時間が解決してくれるであろう。

「立てる？」

「なんとか、できる」

ふらふらとだが、何とか立ち上がる俺。動けないなんてのは俺の男としての矜持が許さないのだ。まあ、単なる見栄だが。

「取り合えず移動しましょう、もしかしたらガスが無い場所もあるかも」

「さんせい」

いや、結構キツいよ、これは。これでリッカーとかに襲われたら多分対応出来ないと思う、まあ、そのリッカーとかも俺と同じ状態でのたうち回ってるだろうけど。

ふらふらと歩く俺と、そんな俺を心配そうに見つつ歩を進めるレベッカ。

運良く、廊下の突き当たりにあったドアには、鍵が無かった。

ドアを潜ると、出たのは広い空間だった。

ただ、広いのは空間だけで、中央の柱の中のを介して中央に廊下が吊られている。

まあ、んな事はどうだっていい。問題は他にあるのだ。

「ここにもガスが……」

これだよ全く、泣けるぜ。

この空間も青緑だった。畜生、超頭痛い。

取り合えず進む俺達。

柱をくりぬいたみたいで中央には、何かの機械があった。

レベッカが確認の為、駆け寄ろうとする。

が、

「きゃっ！」

いきなり機械がショートし、火花を上げた。

「な、何？」

レベッカが困惑の声をあげる。

良く見ると、機械には鉄パイプが突き刺さっている。

あれ、何か凄く嫌々な予感がする。刹那、今までに聞いた事も

無いような咆哮が響き渡った。

俺はふらふらな体に喝を入れながら、どうにか咆哮の音源の方へ向き直った。

そこに居たのは、

「何あれ、また化け物なの！？」

下半身は割りと普通、だが、上半身は以上な程に盛り上がり、殆ど肩に寄った巨大な右手には槍の穂先のような刃が付いている。胴体からは、新たな腕が生成されていて、歪ながら腕は4本ある。そ

して何より、骸骨のような顔の他に、分厚い胸板には明らかに人間の顔が埋没していた。

化け物はもう一度咆哮を上げる。

パン、自重しろよ。

62話 研究所その2（後書き）

感想、批評、ご意見等をお待ちしています。

63話 研究所その3（前書き）

お待たせしました。

後、今回からside（）というのを廃止しました。これ誰？みた
いなのがあったらご報告を。

63話 研究所その3

英語で言うならジーザスって言うべきだよな。

俺は急いで機械に突き刺さっていた鉄パイプを無理矢理引き抜いた。

それと同時にシェリーパパは、走り寄りその肥大化した右腕の爪で切りかかってきた。

俺はそれを半ば体当たりするようにしてパイプを振るい、何とか凌ぐ。

固いもの同士がぶつかり合い、高い金属音が辺りに響いた。

激しく鏝迫り合うパパと俺。が、やがて俺は体勢が崩れ力を受けきる事が出来ず、吹き飛んでしまった。

吹き飛んで壁に叩き付けられる俺。が、やはりタイラントらしくダメージは微々たるもので、特に損傷も無く直ぐに起き上がる事が出来た。

くそう、パパは第2形態みたいだ。どうにも部が悪い。それに俺は絶賛大不調だ。完全な時なら、対等に相手取る事も出来るだろうが、対BOWガスでヘロヘロな状態じゃ時間稼ぎにすらなるか分からない。

「こつちよ、カズサ！」

後ろに居た筈のレベッカが叫んだ。

シェリーを抱えてる為、武器を取る事が出来ないレベッカは、この部屋から脱出する方法を探している。

レベッカは入ってきた通路とは反対側の通路に居る。

その向こうにあるドアは、他のドアが赤いランプを灯しているにも関わらず、そのドアだけは緑のランプを灯していた。

まあ、必ずそのドアが開いてるって保証は何処にも無いが、他が

赤で一つだけ緑なら俺は迷わず緑に行くね。

俺はヘロヘロの体に鞭打って何とか移動したが――

「警告、レベル4相当のアクシデントを確認しました。原因の排除またはコード入力まで、全ての扉はロックされます」

……今まででこれ程電子音声がウザイと思った事はねえ。

「そんな、嘘でしょ!？」

ひきつった顔でレベッカが叫ぶ。今にも涙が溢れそうだ。

因みに俺も泣きたい。タイラントに涙腺があるか分からないけど、どうしろってんだ、これ。

のしのしとパパは俺達との距離を詰めてくるし、空気の読めない電子音声は鳴り響いてるし。

状況は正に最悪、敵がいて俺は対処が出来ず、おまけに退路もない。そして極めつけは打開策は今の段階では何一つ無いときた。

でもな――

俺はそこで鉄パイプを握りしめた。

男には、どうしても退けない時ってのがあるだよッ!

のしのし歩いていたパパに、走った勢いを加えた渾身の一撃を加える。

体に上手く力が入らない今、とても有効な攻撃にはならないかもしれないが、やらずにはいられなかった。

無茶苦茶な一撃を受けて、パパは後ろによろめいた。どうやら多少なりとも効果は有ったらしい。

ふん、今の俺は猛烈に暑いのだ。暑苦しいと言っても過言では無い程になッ!

まあ、完全にガスで頭痛がするのの原因だけどね。

俺は再び鉄パイプを振りかざし、パパに突撃した。

どうやら、このガスは生物兵器を弱体化させる代物らしい。実際、あの体の皮を剥いだような舌の長い化け物は、動きが鈍り、ハンドガン数発で仕留める事が出来た。

あの時、俺もエイダもパソコンを弄っているだけで、何もしていなかったが、偶然にしろこのガスが放出されたのはラッキーだったと言えるだろう。

「レオン、これからどうするの？」

俺の傍で見付けた資料の整理をしていたエイダが声を上げた。

このフィリピン系の女性は、ここクーンに失踪した恋人を探しに来たらしい。本当に間の悪い時に来たものだと思う。そして、気の毒な事に彼女の恋人の情報を知っていたであろう新聞記者は、アンブレラが開発した生物兵器によって真っ二つにされてしまった。

その後、彼の遺言に従ってこうしてアンブレラの地下研究所にやって来たが、どうにも資料が少ないのだ。ここの誰かが資料を破壊しているらしい。

「ベルトリッチが言うような証拠はまだ見つかって無い、本当なら直ぐに脱出すべきなんだろうけど、俺は彼の遺志を無駄にしたくない」

俺は証拠の探索を彼女に提案した。

理由は簡単、俺は警察官だからだ。

まさか、初日にこんな実写ホラームービーに放り込まれるなんて、考えもしなかったが、それでも俺の職務は変わらない。

善人を助け、悪人を捕まえる事。それが俺の職務だ。

だが、彼女は違う。幾つか不自然な点もあるが、只の民間人だ。
俺のような職務は無い。

もし、彼女が提案を拒否したら、俺はそれを受け入れるつもりだった。

「そう、ならいっそ現物を手に入れたら？」

以外な事に、彼女は俺の提案をあっさりと受け入れた。

それどころか、驚く俺を尻目に何処に証拠となる現物、つまりウイルスがあるかを探し始めた。

これで彼女に違和感を感じるのは何回目だろうか？ やたらと射撃が上手かったり、手当てに慣れていたりと今までに幾つか不自然な点があったが、今はそんな事を考えるべき状況じゃ無いと自分に言い聞かせてきた。だが道中、それとなく聞いてみたらペイントボールの射撃ゲームに参加していて、恋人は医療関係者だったと答えられた。

彼女は嘘を付いている。たかだかペイントボールごときで、初めて見た化け物に即座に対応出来るものでは無い。

だが、彼女と仲違いしてしまうのは不味い。今は表面上だけでも協力が必用なのだ。

きつと、彼女もここを脱出したら全てを話してくれるだろう。

俺はそれまで彼女を守り、己に課せられた職務を全うすれば良い。

「ここにウイルスがあるみたいだ」

俺は”Gウイルス計画”と書かれた紙を彼女に見せながら言った。

パパが右腕を振り上げ、俺に向かって降り下ろす。俺はそれを鉄パイプを両手で構え、ガードした。

だが、相手はGだ。そこらの量産可能な生物兵器とは訳が違う。それに俺も万全の状態じゃ無い。

ギリギリと押し付けられる力に、俺は段々と押されていく。

そして、ついに鉄パイプが押しきられ、鋭い爪が俺に届く。俺はそれを押しきられた時の反動を利用して後ろに転がるが、それでも爪を完全に避ける事は出来ない。

胸の辺りに衝撃を受け、抑えられた痛覚のお陰で軽減された痛みを感じながら、俺は一旦後退し、距離をとった。

その途端、高い射撃音と共にパパに幾つかの穴が開いた。

振り返らなくても、レベッカが援護射撃をしている事くらいは分かる。だが、音の規模からして、使われているのはレベッカが持っている中で最大の威力を持つライフルでは無く、9ミリパラを使うハンドガンだろう。無論威力は格段に下がる。

だが、パパにはハンドガン程度では何処吹く風、全く無視してずんずん歩いてくる。

タイラントである俺に殆ど聞く筈が無いのに、Gに聞く筈が無いのだ。

それはレベッカも分かっているのだろう。威力の高いライフルを使いたくても、それには背負っているシェリーを降ろさなければならぬ。頑丈な俺と違い、一瞬の油断が命取りになるこの状況では、それは出来なかった。だから、片手で操作出来るハンドガンを使っているのだろう。

あゝ、レベッカ、だからって「シット!」とか言っちゃ駄目だつて。

つか、パパンも自重しろよ。自分の娘危機だぜ? ちょつとは手助けしようとか無いのかよ。

刹那、吼えるパパ。

ま、そんな感情もう有るわけ無い、か。

俺は鉄パイプを握りしめた。

あ、これって良く考えたら初の武器じゃん。ヒヤッハー、やったぜ！　ってか俺気づくの遅い！

フッフ、ダメージとガスと頭痛で中々良い感じだぜ。素晴らしい壊れ具合だ。

もう何度目かになる突撃を遂行すべく、俺は体を叱咤し、力を込め飛び出そうとした時――

聞き慣れない銃声と共に、パパに大穴が開いた。

「ごめんなさい、あなた」

これまた聞き慣れない声だ。声がした方を見たいが、どうやらパパと被って見えないらしい。声は女性のものであった。

「私達はあらゆる物を犠牲にしてきた」

再び銃声が響く。弾丸は大きくパパを削りつつている。何となくだが、レオンが使ってたデザートイーグルに音が似てるような気がする。

「でも、シェリーは犠牲に出来ない。だからウィリアム、あなたを殺さなくちゃならない！」

率直な感想を言おう。この夫婦はサプライズが好きなのか？　ま、伏線無しの超展開はあまり好きじゃないが、この状況ならウェルカムだぜ。

63話 研究所その3（後書き）

感想お待ちします。

64話 研究所その4（前書き）

Q、これはコメディですか？

A、永遠の謎です

64話 研究所その4

アネットが握ってるのは黒光りするごついリボルバーだ。あの泥棒三人組の絶対帽子取らないのが持つてみたいなの。コルトかS&Wか分らんけど。

俺やレベッカとで蓄積させたダメージと背後から放たれた強力なマグナム弾の前にようやくパパン、もといGは倒れた。

ゆつくりと膝から順番に床に倒れ伏すG。その時アネットの瞳が少し揺らいだ気がしたが、俺はそれを見なかったことにした。

まあ、今は化け物とはいえ元夫だからな。夫を撃たざるを得なかった妻。実に泣ける話だ。今まで恋愛経験に乏しかった俺が言える事では無いが。

「シェリーを渡して」

しばらく倒れ伏すGに視線を向けていたアネットだったが、やがてこちらを向いた。

「なんで？　というより貴女はなんなの？」

アネットの問いに明らかな不信感を向け、背に背負うシェリーを背負いなおしハンドガンを握り直した。

「その白衣、ここの研究者なの？」

「ええ、そうよ。だから何？」

二人の間に緊張した空気が満ち始める。うん、ヤバげだ。アネットは娘の為に、対するレベッカはそんな事知るよしもないので、突

然現れた研究者、つまりアンブレラの側可能性のある人間に敵愾心満々だ。

でも、俺には何も出来ないんだな。先程までの激戦によって体力0な今の俺では、正直立ち上がるのもしんどい。唯一救いなのは、俺がアネットとレベツカの間に居ることだろうか。

「アンブレラなんかにはシェリーは渡せないわ！」

「その子は私の娘よ。貴女にそんな事を言われる筋合いは無いわ」

おんやぁ？ 何か冷静だなアネットさん。原作ではかなりのマッドで尚且つヒステリックっていう残念な人なんだが。やはり自分の娘が直接関わってるってことが分ってるから、母親として動いてるってことか？

「……ママ？」

「シェリー！ 無事なのね！」

目を覚ましたらしいシェリーに、アネットの顔が綻ぶ。

「さあ、早くシェリーを渡して！」

迫るアネット。対するレベツカは、躊躇しているらしい。確かにアネットがシェリーの母親という事は分ったが、アンブレラの研究者という事でまだ信用しきれていないらしい。

レベツカに情報を伝えてやりたいが、へろへろな状態なのとアネットさんに警戒されるかもしれないし。俺は色々な意味だ動けない。

迫るアネット、後ずさるレベツカ。だが、俺の近くに來た時、俺

が少し身じろぎするとアネットの動きが止まる。アネットさんは、俺が正義のタイラントという事を知らないんだろう。

「これは、何なの？」

俺を見てアネットが呟く。

ふ、ふはははははは。何を隠そう俺は神が遣わし正義の味方！タイラントだ！

「……分ったわ。貴女を護衛しているのね？ 貴女アンブレラのスパイでしょう？ 夫の研究を奪うつもりなのね！」

あ、ヤベ。アネットさんヒス起こしかけてる。

リボルバーを持ち上げ、銃口をレベッカに向ける。レベッカはシエリーの母親ということに躊躇している。

不味いと思い、俺がもう何回目かになるが、無理矢理体を動かしたとき、ソイツは来がった。

「スタアアアアズ！」

私が目を覚ました時、私はレベッカに背負われていた。

どうやら私達は広い天井のある、吊り橋の様な廊下にいるらしい。意識はまだぼんやりとしていたが、聞こえてきた声で一気に覚めた。

「その子は私の娘よ、貴女にそんな事を言われる筋合いは無いわ」

どれだけ待ちわびただろうか。

地獄に変わった世界で、ようやく聞くことが出来た母の声。

レベツカの声も落ち着くが、やはりママには敵わない。

直ぐにでもママの所に走りよって抱き着きたかったが、熱のせいか体が上手く動かせない。それにこの体ではそもそもレベツカに背負われている状態をどうにも出来ない。それに、何故かレベツカは私を下ろしてくれなかった。

そして、ママがカズサを敵と勘違いした時、それが降ってきた。

それは、巨大な筋肉と触手だった。

足が二本あるという事から、かろうじでこの化け物が人型であると分かるが、それ以外は全く人のそれとは違った。

大きさはだいたいカズサくらい、でもその筋肉はボディービルダーよりずっと体格の良いカズサよりも大きくてゴツい。それに体のあらゆることから、蛇の様な触手がうねうねと蠢いている。

ソイツが上から降ってきた時に衝撃を緩和する為に曲げていた膝を伸ばした時、耳、いや、体全体に衝撃が襲った。

身体中がびりびりと振動する。

この振動の原因が、化け物の恐ろしい咆哮であると気付くには、暫く時間が掛かってしまった。

「そんな……まだ生きてたなんて」

私の顔の傍からそんな呟きが聞こえる。

それでも銃を構えられるレベツカは凄いと思う。私なら悲鳴を挙げて逃げ回るか、それすらも出来ずにただ殺されるだけだろう。

もう聞き慣れたハンドガン射撃音と葉莢が落ちる音が妙に響く。でも駄目だ。化け物はこんな攻撃じゃ止まらない。実際レベツカの放つ銃弾は化け物の体を幾らか削りつつているが、化け物は少しも答えてない様だ。

どんどん近付いてくる化け物。

不意にレベッカの射撃音が止まった。

弾切れだった。

レベッカは私を抱えている為か、リロード出来ないでいる。

ホント、こういうのは映画の中だけにして欲しいわ。だって映画なら正義の味方が絶対に助けてくれるもの。

妙に冷静な思考で私は考える。

重々しい金属の響きと共に、化け物はどんどん迫ってくる。

ああ、私、死ぬんだ。

私は12年生きたけど、所謂生への執着ってというのが少ない。学校の先生は口を酸っぱくして命は大切にしなさいって言ってたけど、私にはそれが分からなかった。

でも心残りが無い訳じゃ無い。折角レベッカやカズサと知り合えたのに、まだ出会ってほんの少しなのに。それにママにもう一度抱き締めて貰いたかった。

でも、もう無理だろう。

私はもう子供じゃ無い、れっきとした大人だ。我慢する事には慣れている。

化け物が後少しの所にまで迫る。

化け物の顔の傷痕まで判別出来るほど、近くに來たとき突然化け物がぐらついた。

化け物が叫ぶ。だが、先程の咆哮よりもどこか痛み耐える様な叫びだ。

私は目を凝らして化け物を凝視する。

原因は直ぐに分かった。

化け物から鉄パイプが生えていた。化け物の背中にはカズサが無理矢理鉄パイプをねじこんでいる。

カズサがパイプを突き刺しす度に、化け物は呻いている。

私とその光景に目を話さずにいると、突然カズサが顔を上げ、目があった。

少しの間、私とカズサの視線が交錯するが、それは突然終わりを

告げた。

カズサが笑ったのである。

まるでロボットが無理矢理笑みを作ったみたいなの、かなり不自然な笑み。

カズサは喋れない筈なのに、ぱくぱくと口を動かした。

そして、カズサは力を込める為、姿勢を直し――

「っ！ ダメ、カズサ！」

化け物を押し倒し、手刷りを越えて落ちてしまった。

暫くして、何かが激しくぶつかる音がした。音はそれだけで何も聞こえない。

あまりの展開に、ママもレベッカも黙ったままだ。

「早く、逃げなくちゃ」

私は気だるい体に喝を入れて、そう言葉を紡ぐ。

私の言葉に反応した二人が漸く動き出した。

「そうね」

レベッカは目に涙を溜めている。本人は悟られまいとしているのだろうが、私にはばれれば良かった。

勿論私だって悲しい。

でもカズサはあの時、私にこう伝えたのだ。

L i v e (生きる)

なら、精一杯生きるしか無いじゃない。

64話 研究所その4（後書き）

シリアス、なのか？ おかしな、これはコメディの筈なのに。

感想等お待ちしております。

65話 研究所その5（前書き）

ちよいと短め

65話 研究所その5

「やっぱり私は運が良いわ」

目覚めて聞いたのは、エイダさんの呟きでした。

前回、ちょっと格好つけてネメシスに特攻した俺は、床にぶつかった衝撃で二回目のブラックアウトを経験したのであります。まあ、ガスにパパンに紐無しバンジーの三連撃には、タイラントのスペックでも耐えきれなかったらしい。つーかその内スーパータイラント化しないだろうな。あれって、肉体へのダメージが限界を越えた時、暴走するみたいな形でなるらしいし。

「貴方、私と引きししない？」

何さエイダさん。つーか警戒心とか無いのか。一応生物兵器だぞ？ 危険かもとか思わないのかよ。

そう思いつつ、体を起こす。もうガスの効果は無いみたいだ。それが、ガスがこの場所に無いからなのか毒性に対する免疫が出来たのか分からないが。

「貴方は危険かも知れないけれど、話が分からない訳じゃ無いでしょ？」

いやあ、いつ見ても素敵ですねえ、エイダさん。特にその如何にも真っ黒な笑みなんか最高だわ。

あれ？ もしかしてエイダさんに俺が過ぎた知識を持ってるのばれたか？

いや、結論を急ぐのは良くないな。スパイの勘というやつかも知れないし。

俺は、近くに散らばっていた恐らくバインダーに挟まっていたであろう紙とペンを拾った。

「それで、取り引きとは？」

「ふふ、話が早くて助かるわ。貴方にはGウィルスのサンプルを取るのを手伝って欲しいの」

「見返りは？」

「貴方のお仲間の女の子達の居場所を教えてあげるわ」

悪く無いでしょ？ とエイダさん。

流石だね、ホント。この人滅茶苦茶やりてだよ。俺がレベッカ達とはぐれたのを見越してこの要求とは。

と、いうかレオンはどうした？ お前らロマンスしてきたんじゃないのか？

「レオンはどうした？」

すると、エイダさんがちょこっただけ表情を崩した。

「彼とはさつき別れたわ」

そう言って少しでも微笑するエイダさん。その笑いは氷みたい、と言えば当てはまるかな。

そうか、じゃああの「絶対に手を離すなよ！」「もう良いの、逝かせて……」「エイダアアア！」はもう終わったのか。そこそこ泣けるシーンだったのに。

だが、やはりステイブの「愛してる（I love you）」の

ところは譲れん。あれはマジで泣ける。

と、そんな事はさて置き、エイダさん良く見たら包帯だらけじゃん。なんかミイラに見えなくも無い。

「一つ聞くんが、レオンは無事なんだな？」

「多分ね。別れた時には化け物植物に囲まれてたけど、彼は火炎放射器を持ってたから」

ふーん、ゲームではあまり役に立つイメージの少ない火炎放射器だが、現実では少しは役に立つだろ。そうでないと困る。主にレオンがな。

というか、エイダさんもしかして植物に落とされたの？ いや、Gを回収しに来る筈のタイラントが居ないから、暴走したアネットさんに辺りにやられたのかと思ってたけど。まあ、ゲームと現実の違いうしな。

今思えば原作から随分離れてきたなあ。まあ、原因は俺なんだけど。マーヴィンやミハエルは助かったし、クレアは早々と脱出しちゃったし、何より足取り不明なレベッカと遭遇したし。

「それで、答えは決まってると思うけど一応聞くわね？」

俺が思考の渦にはまり、ぐるぐると回っているとエイダさんに声を掛けられた。

確かに答えは決まってるし、良いか。

「答えは？」

「貴女の予想通りイエスだ」

エイダさんの笑みが深くなった。それは、危うさと艶かしさの両方を含んでいてとても危険に思えた。

忌々しい化け物の植物が彼女を突き落としてから、既に数十分が経つ。

あの時は我を忘れて手に入れた火炎放射器で植物を焼き付くしたが、今思えばそれも虚しい行為だった。

彼女が実はスパイだった、という事に比べればどうという事は無い。

俺はいけない事だと分かっていたながらエイダに対して、これまで感じていた不信感を打ち明けた。

すると、エイダは少し笑い、そして彼女との関係は終わりを告げた。

あの時の事はよく覚えていない。いや、覚えてく無いんだろう。彼女が銃を突き付け、その後ろから植物が突進してきた事くらいしか覚えていない。

何度も何度も後悔した。何故俺はあんな事を言ったんだろう。言えさえないければ、エイダと仲違いする事なんて無かったのに。

思わず苦笑した。

じゃあ、あのままずっと彼女を手伝い、彼女の仕事を終わらせれば良かったのか？

何故こんなに彼女の事を考えるのだろう。彼女とは出会って数時間程度なのに。

要は彼女に惚れたのだ。あの謎に満ちた女性に。ただそれだけの事だ。

俺は、立ち上がり歩き出した。同時に火炎放射器から空の燃料弾マガジ

倉を抜く。

当初の目的だった開発された新ウィルス、Gウィルスの入手は、彼女が居なくなった事と、そこが植物や鉤爪の化け物の巣窟と化しているのも、これは不可能だ。

なら、レベッカ達と合流した方が良いでしょう。彼女達が、この施設に居るかは分からないが、カズサが付いているし、仮に居なくても引き返せば良い。

俺は妙に重い足を引き摺る様に進んだ。

止まる訳にはいかない。彼女の為にも絶対に。

65話 研究所その5（後書き）

66話 研究所その6（前書き）

出来たので更新

66話 研究所その6

エイダさんのGウイルスのサンプルの回収に付き合う事になり、後ろを付いていく事凡そ数分。

部屋の入口っぽい所に着いたら、あり得ない程沢山のゾンビやライバーやリッカーやらに囲まれた。

え、ちょ。一旦落ち着け。

「この先よ」

さも当然と言わんばかりなエイダさん。

でも、そう言いつつハンドガンに新しい弾倉を入れている。

まさかの強硬突破ですか？

「この先にサンプルがあるんだけど、ちょっと障害が多くて困ったのよ」

そうですかそうですか。じゃあ、一生困つて下さい。私帰ります。

と、言いたい所だが、さっき約束しちゃったしね。漢に二言は無いのだ。

エイダさんが喋る間に接近してきたリッカーを掴んで、イビーが二、三体纏まってる所に投げ付ける。着弾地点から緑だか赤だかの液体が飛び散った。

やはり、手袋してるとはいえ、リッカー驚掴みは結構キモいな。

ん？ 驚掴み？

あ、鉄パイプ……無くした!？

ええ、マジか、嘘だと言ってくれよ。誰でも良いから。嘘だと言ってくれええええ!!!!!!

折角の武器だったのに！ ああ、どうしようパパンから戴いた（強奪した）鉄パイプを無くしてしまった。

ちくせう。落ちた時にどっかにいったんだろうが、目覚めた時にちゃんと探せば良かった……カムバアアアアック鉄パアアアイプウウ。

「泣けるぜ」

「タイラントに涙腺なんてあるのかしら？ それより、前を見た方が良いんじゃない？」

ゾンビに的確に銃弾を叩き込みながら、エイダさんがバインダーを覗き込む。

あまりの衝撃について、レオンの名台詞をバインダーに書いてしまった。そしてらエイダさんに注意を受けてしまった。

顔を上げれば確かにリッカーが飛び付こうとしている。

ふん、残念だったな。今の俺は機嫌が悪いのだ。

俺は両方の拳を合わせて固め、リッカーの頭目掛けて全力で振り下ろした。直後、凄く鈍い音が響く。俺の会心の一撃を受けたリッカーの頭はスイカが砕けるみたいに四散してしまった。当然、床に叩き付けられたリッカーはピクリとも動かない。

リッカー二秒撃破の余韻に浸っていると、背中に何か液体っぽいのをぶっかけられた。

直ぐ様後ろを振り向くと、そこには直立二足歩行植物が数体固まっ

っているではないか。
背中に付いた液体が、床に垂れると、床が炭酸水のような音を立てながらへこんでいく。

ふむ、強酸性の液体か。どうやら、俺のコート、つまりタイラントのコートには対酸性加工がなされているらしい。だって、床溶けてるのにコート溶けてないし。

ま、今はそんな事どうでもいいか。

哀れな植物達を早急に葬るべく、俺は持ち前のタイラントクオリティーの素晴らしい脚力で近づき、数体纏めてラリアットをかます。レタスから葉を剥がすみたいな音を立てながら、植物達はリアル携帯電話と化した。要するにくの字にへし折った。

べちゃべちゃという音を立てながら、床に崩れ落ちる元植物、もとい現携帯電話。汚ねえ携帯電話だ。

某野菜王子の様な事を考えていると、またまた後ろからうめき声が聞こえた。

む、そのうめき声はゾンビだな。私には分かる。何故なら、セガールもビックリな程、俺はゾンビを葬ってきたからである！

と、いう訳で貴様にはオーバーヘッドニーをくれてやろう！

俺の踵を受け、もう描写するのもアレなくらい、頭部というか全体的にばらばらなゾンビ。

ヒャッハー！ 気分は北斗の拳に出てくる雑魚キャラだぜ。もしくはクリスのウォーリアでも良いぜ！ 誰か、ユワッシャーて歌うのだあ！

今まで、数々の任務をこなしてきたが、その度に私は運が良いと思う。

私は今、タイラントと共闘している。と、いっても、生物兵器の大半はその攻撃本能からか、暴れまくっているカズサに群がっている。私は精々カズサの攻撃の余波を受けて転がってきたゾンビに銃弾をプレゼントする程度だ。

本当なら、私はとくにサンプルを手に入れている筈だったが、ある事情によりその手筈が狂ってしまった。

くすり、と私はその時を思いだしながら、転がってきたまだもがき続けているゾンビの頭に向かってハンドガンの引き金を引いた。あの警察官との一時は、とても手放したく無い程に良いものだった。

あんな、下心の無い純粋な善意を一心に向けてくる人間に出会ったのは久しぶりだった。

あまりの善意に、私は任務を忘れかけた。他人から見れば一流のスパイ失格と言うかも知れない。だが、彼はどう転んでも悪役^{ヒール}に過ぎない私を庇ってまで助けてくれたのだ。何も思わない方がおかしいというものだ。

だが、やはり夢は夢だった。

彼にばれてしまったのだ。今思えば、善意に触れて演技がおざなりになっていたかも知れない。

私は夢から覚めるべく、彼に銃を向けた。

だが、それは突然死角から襲ってきた二足歩行の植物によって妨げられ、私は手すりを越えて落ちてしまった。直ぐに彼は手を出してきたが、私にはそれを掴む権利など無い。

重力に従い落下する最中、最後に見た彼の顔は悲痛と後悔に揺れていた。

彼は私が死んだと思ってるでしょうけど、生憎私はそんなに簡単に死ぬ訳にはいかない。

途中、フック付きのワイヤーを階下の手すりにひっかけ、転落を防ぐ。

そして、今後の計画を練り直す為、考えながら移動していた時、このタイラントを発見したのだ。今回の失態で、ウェスカーの私に対する評価は幾らか下がったかも知れないが、このタイラントの情報とサンプルを付けてやればどうにか挽回出来るだろう。

私は次々と生物兵器を葬っていく、”正義のタイラント”を見ながら考察を終えた。

フウハハー!!

一昨日来やがれバーロー!!

出来上がった残骸の山を眺めつつ、俺は勝利に酔いまくる。

迫り来るグロテスク生物兵器軍団を無事撃破した俺は、返り血な
んかを拭った。

ちよつと殺りすぎたかな？ 返り血半端ねえ。

「ありがとう、貴方のお陰で道が通りやすくなったわ」

未だヒヤッハーな状態の俺を後目に、エイダさんが歩き出した。

ちなみに、残骸の山は大半を下に落としたから、割りと周りは綺麗だ。余談だが「割りと」が付く理由は、液体がエライ事になっているからである。

目的の部屋であるドアを開けながら、エイダさんが此方を振り返る。

「入らないの？ それとも貴方は外で待ってるつもりなのかしら？」

もうちよつと勝利の余韻に浸らせてくれたって良いじゃん。たく、やはりロマンというヤツは女性には理解し難いのか？

促されるまま、俺は部屋に入った。

中には、俺には到底理解不能な機械が所狭しと並んでいる。

「ここはウィルスの精製をする部屋よ」

俺の疑問を感じ取ったのか、エイダさんが説明を始める。

ほうほう、だから何か如何にも高額そうで尚且つ訳の分からない機械が並んでいるのか。

「ウィルスを精製するから、少し待ってて」

エイダさんは一通り説明を終えると、何処からか紙を取り出すと、それを見ながら機械を操作し始めた。

どうやら、紙はマニュアルらしく、時々エイダさんはそれを見ている。

そして流石はスパイといった所か、角度的にマニュアルが俺には見えない様になっている。

……気になる。

俺には見られたら不味いつてか。

ま、見せてって言うっても絶対に見せてくれないだろうし。

スパイには駆け引きが重要なのだよ。お前スパイじゃ無いじゃんとかいうのは無視する。

エイダさんが機械の方に集中してるのを確認すると、俺は近くの机にあったビーカーをドアに向かって投げ付けた。

「何!？」

スイッチが入ったかのように途端に迎撃体勢になるエイダさん。

俺はその隙に紙を盗み見た。

そこで、少し驚いた。

「……やったわね」

溜め息混じりに此方を振り返るエイダさん。

「今まで騙してた君には言われたくない」

「あら、私がスパイだって分かって付いてきたんでしょ？　スパイに嘘はつき物よ」

「じゃあ、嘘の対価をもらおう。俺にもそれを作ってくれ」

「断れば私はきつと挽き肉にされるのでしょね？　まあ、良いわやれやれと、再び機械に向くエイダさん。」

そう、エイダさんは俺に嘘を付いていたのだ。

今エイダさんが弄っている機械、それはウイルスを精製するのでは無くワクチンを精製する為の物だった。

大方、ウェスカーに対する手土産を増やそうといった魂胆だろう。彼女は筋金入りのスパイだという事は分かっていたが、いきなり騙されるとは思いもなかった。

まあ、賢い彼女の事だ。他ならともかく、この状況では先程の言葉を反故にする事も無いだろう。今のエイダさんはハンドガンしか持っていないし、潰すのは容易い。

数十分後、エイダさんは俺にワクチン入りのケースを渡し、監視室の場所を教えて部屋から出ていった。

ちなみに、渡されたワクチンが偽物である可能性もあったので、彼女が作った幾つかのワクチンを俺が無作為に選んだ。エイダさんはそれを見て笑いながら全部本物だ、とか言ってたが油断は禁物だろうし。

俺もエイダさんの後に続き部屋を後にした。

……うーん、今気付いたけど、教えてもらった監視室の場所って、正しいのかな？　いや、ここは信じるしかないか。非常に不安だが。嘘だったらヨーロッパでしめてやる。

67話 研究所その7（前書き）

漸く更新。

今回はリハビリ的な色合いが強いです。面目無い。

67話 研究所その7

飛び掛かってきたリッカーを、雑巾を絞るが如く捻り回した。

プレス機でドラム缶を潰す様な音が響き、リッカーは上半身と下半身が反転したまま動かなくなった。

うむ、冒頭からいきなりR指定な事をやってしまった。でも、俺は悪くないのだ。モニターを確認しようとしたところへ、不粹にも飛び掛かってきたリッカーが悪いのである。

とまあ、そんな事はさて置き、俺は今監視室にやって来たところだ。幸い、エイダさんに教えられた場所は正しかった様できちんと監視室に辿り着く事が出来た。

途中例の如く、何体かゾンビやらリッカーやらいビーやらのメイドインアンブレラズが襲ってきた。が、最早それらがどうなったかは言うまでも無いだろう。結果だけ言うならば何時もの通り、”ミンチ”にした。

いやはや、慣れとは恐ろしいもので、飛び掛かってきたリッカーをへし折ったり、ゾンビの頭を蹴り潰したり、イビーを二つに折り曲げたりするのに抵抗が無くなってきた。うん、もう並みのホラー映画程度鼻で笑える様な気がする。まあ、ゾンビとか化け物は大丈夫だが、お化けは嫌いだけど。

そんな訳で、監視室までの道中で非常に愉快的体験をした俺だったが、今とんでもなく困っている。

モニターが有るには有るのだが、1つも点いてないのだ。

困った。どうしよう。

もしかしたら、スイッチが入っていないのかも知れないが、おいそれと弄る訳にもいかない。

理由は簡単。相手が化け物ならば、大抵は対処出来る自身が有る俺だが、精密機械には滅法弱い。先ずタイラントの剛力でぶっ壊しそうだ。特に力を込めたつもりは無いのに、今まで11個のドアノ

ブをねじ切って破壊した実績があるのだから尚更だ。それに、タイラントサイズの指だと、大きすぎてスイッチを1つ押したつもりが隣のも押してたという事もあるかも知れない。後、これが一番大きな理由なのだが、今はタイラントでもうスプラッタに慣れつつあるが、中身はうら若き高校生である。俺が行ってた高校は工業高校では無い為、ただの高校生が機械を弄るなんて出来る筈が無い。

どうしようか。監査カメラのモニターが復活しなければレベッカ達を見付けられない。だが、今の俺ではスイッチ1つ入れられるかすら怪しい。

ぬおおお！！ と俺が悶えて（声は出ないので非常に静かだ）いると、唐突に足音が聞こえてきた。

その足音はしっかりとされていて、ゾンビの酔っ払った様な歩き方では無い。

俺は、最大限に耳を澄ませて、足音を聞き入った。同時に、足音の主が友好的で無かった場合に備えてその辺に倒れていた椅子を構える。

どんどん足音は近付いてくる。近づくにつれ、足音と共にカチャカチャと金属が擦れる様な音も聞こえてきた。多分、ホルスターに入れた銃が歩く震動でそんな音を立てているのだろう。

銃を持っているという事は、民間人ではあるまい。というかこんな所までただの民間人がたどり着ける筈は無いのだが。

足音が扉の前で止まる。俺は椅子を構えた。

刹那、扉が勢い良く開き、それと同時に人が飛び込んできた。

そいつは飛び込むと同時に銀色に光る銃を構え、すぐさま周囲の状況を確認しこちらを発見した。

「カズサか、脅かすなよ」

そいつ、もといレオンが溜め息を一つ付いた。

脅かすなよ（キリッ）じゃねーよ。俺も驚いたっての、このイケ

メンが。

俺は構えていた椅子を下ろした。

「無事だったんだな」

「まあ、何とかな」

これまでの経緯を尋ねてみた。聞けばレオンは大体は原作通りに進んできたらしい。大体というのはGウィルスを回収する筈のタイラントが居なかったり、レオンが未だにGシリーズと出会ってないという事等だ。

さてさて、それじゃ重要な事を聞きますかね。

「時にレオン」

「何だ？」

「このモニター付けられるか？」

どれだ？ と機械をやり始めるレオン。

いやあ、良かった。このまま機械とにらめっこになるかと思ったが、レオンが来てくれたお陰で何とかかなりそうだ。

暫くして、モニターの幾つかが付き始めた。

お、レベッカ達発見。場所は……リフト近くの休憩室か。良く見たら端っこに古いタイプライターがある。

「これを見てくれ」

俺がそのモニターを指し示すと、レオンも直ぐにそれを見つけ、表情を崩した。

が、直ぐにそれは驚愕に変わった。

「ああ、クソッ!!」

「どうした？」

俺がその理由を聞くと、レオンは何も言わずに
レベルカ達が写っているモニターの左隣のモニターを示した。

そのモニターを注視する。

そこには、パパンもといGが写っていた。

それも、リフトのある方向に向かって。

俺とレオンは同時に走り出した。

また、だ。

カズサはまたしても自分を犠牲にして、私達を助けた。

私が知る限り高所からの落下程度ではタイラントの生命力を消し
去る事は出来ない。あのカズサを苦しめていたガスを差し引いても
だ。だが、問題はそこでは無い。

彼が自分を犠牲にしても私達を助けるという選択をした、とい
う事が問題だった。

そういう選択をした時、何れだけの心配をかけているかカズサは
もっと知るべきだと思う。

だけど。

私は一度溜め息をついた。

それが最良の選択だった事は否定出来ない。

シェリーという内患とアネットという外患の両方を抱えていたあの場合、カズサの選択が最も良かったのだろう。何故なら、あの化け物相手にシェリーを抱えたまま勝利するのは不可能だったからだ。それを分かっていたからこそ、カズサは化け物に特攻を仕掛けたのだろう。

「レベッカ？ どうしたの？」

不意に背中に声が響いてきた。まだまだ幼さが残る鈴の様な声だ。振り替えればシェリーが心配そうな表情で此方を見詰めている。今、彼女は簡易ベッドで横になっている。

「ううん、何でも無いわ」

私は心配そうなシェリーを安心させる為、精一杯の笑顔を作った。只でさえ、今彼女は危ない状態なのだ。要らぬ心配は出来るだけかけたく無い。

「大丈夫？ 無理はダメよ」

熱に苛まされる体を無理に動かしたらシェリーを見て、アネットが心配そうに駆け寄る。

彼女はシェリーの母親だ。そして、シェリーを蝕むウイルスを開発した張本人でもある。正確には彼女とその夫の共同研究だが。

今現在、彼女とは協力関係にある。それは彼女がシェリーの母親で、彼女が研究よりも娘を大事に思っているからだ。もし、研究を重視しているならば、私は銃を向ける事を躊躇わないだろう。

始め、彼女は私をアンブレラの手の者と勘違いしていたが、私と

シェリーの説明でその誤解は大方無くなっている。

「さて、これからどうしましょうか。何時までもここに隠る事も出来ないでしょうし」

今私はリフト近くの休憩室に居る。無論、シェリーを休ませる為だ。

「ワクチンが要るわ」

私の問いにアネットが応えた。

「でも、あそこはもう化け物の巣窟よ」

そう言っ肩を落とすアネット。

それは休憩室に付いて確認した通りだ。ここに戻るまでの道のりですら、かなりのゾンビに遭遇したのだ。最深部にある研究室がここよりマシな筈が無かった。

それでも諦める訳にはいかない。

私達は議論を重ねる。そして、私がどうにかして研究室前の化物を突破するかに話題を変えた時。

「――――ッ!!!!!!」

突然、何かの咆哮が聞こえた。その大きさと響きからして、そう遠く無いと思われる。

恐らく、というか多分そうだろうが十中八九あの化け物だろう。

「ちょっと見てくるわ」

私は努めて冷静に言った。先程も言ったが、無用な心配はかけたくない。この中で、まともに戦えるのは私だけだ。なら、私が行かないといけない。

私は、ハンドガンのマガジンを交換し、壁に立て掛けてあったライフルを手にとった。

「……レベッカ」

再び不意に背中がかけられた。

「シェリー？ 何かしら」

シェリーの方を見る。彼女は熱で顔を紅潮させながら、心配そうな表情をこちらに向けている。

「絶対、帰ってきてね」

弱々しい声でそう言ってきたシェリー。

「約束するわ」

私はそう宣言すると、部屋を出た。

次にカズサに会ったら、みっちりと言教してやろうと考えながら。怖くない訳じゃ無い。でも、私は弱く無い。だから大丈夫だ。

67話 研究所その7（後書き）

そろそろラクーンシティ編も終盤ですね。

ここで唐突ではありますが、読者の皆さまにアンケートを取りたいと思います。

どんなものかと言うとですね、遂にカズサに銃器を持たせようと思うのですが、それをアンケートしたいのです。実際に持つのはラクーンシティ編が終わってからなので、コードベロニカ辺りですかね。

ではどうぞ。

1、やっぱ見映えをとってガトリングでしょ。M134

2、いやいや、そこは破壊力だろ。M2（重機関銃の方）

3、何言ってるんだか、追及すべきは汎用性だろ。M240

4、必用なのは爆破だ！ Mk19（此方の場合、フルオートでは無くセミオートで。主に滞弾数の問題から）

5、その他（この場合、持たせたい銃を書いて下さい。出来るだけ詳細をお願いします）

回答はメッセージか感想に放り込んでおいて下さい。

ではでは、感想+回答お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2892s/>

T103～タイラント物語～

2011年10月11日01時54分発行